その娘はバーチャルウマ娘でした

もにゃし

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女の名前は立華茉莉、何処にでもいる普通で普通な一般ウマ娘……だったわけだが。

どういうわけか七転八倒すってんころりと事態が進み、気が付けばバーチャルウマチューバーになっていた。

府中の片隅でネットの世界を舞台に活動していたと思えば、本人の意思とは関係なしに色々なウマ娘と出会い絆を結んでいく茉莉。

配信をし、バイトをし、たまに走って、仲間と活動する。

アンニュイでモラトリアムな日々は遠い昔、茉莉は今日も画面の向こうで待つ視聴者と共に今を楽しむ。

これは、そんな彼女の断片的な日常の一コマである。

～＊～＊～＊～

思いついたネタを何となく形にしてみました。

基本的に思いついたときに書いていくため不定期投稿となっております。

感想、評価をいただけると嬉しいです。

アニメ版ウマ娘を基準とした独自の設定となっており、ウマ娘の活躍時期について相違が出る場合がございます。

目次

#00 1
#01 8
#02 23
#03 34
#04 49
#05 67
#06 82
#07 98
#08 前編 114
#08 後編 129
#09 144
#10 158
#11 172
#12 189
#13 208
#14 224
#15 前編 239

＃００

時刻は土曜日の夜の１０時過ぎ。
良い子は皆布団に入り夢の国へご招待、悪い子もそろそろ寝ないと不味いかなぁなんて考えながらもだらだらと夜更かしを続けているであろう時間、もしくは若気の至りで夜更かし真っ最中な感じ。
府中のそこそこ立派なマンションの一室には不夜城の如く煌々と明かりがともっていた。
「は～い皆さんこんまいや～、本日の夜更かし雑談はじめますよ～」
ウマ娘専用ヘッドホンを身に着け、普通よりも機能的でリクライニングもしっかりとしたゲーミングチェア（尻尾を出す穴は自分でＤＩＹ）に座った少女が話始める。
「お相手は私、セカンドライフ３期生のヴァーチャルウマ娘シルトマイヤーでお送りしま～す」
画面に向かって挨拶をすれば、モニターの上にくっつけてあるカメラがその動きをとらえ、それをソフトが認識して画面に映るキャラクターが同じ動きをしているのが見える。
万年３着：まってましたぁ～！
会長は今日も快調：今日も配信お疲れ様、これで飲み物でも買うといい〈３００円〉
「お、万年３着さんこんばんわ～、会長は今日も快調さんスパチャありがと～……今日はへんなダジャレないんだね？」
画面に映るチャット欄を爆速で流れるコメントから適度に拾い上げては読み上げる。
「今日は雑談枠なんだけど、話題と言えば何と言っても今日行われたＵＲＡファイナルの決勝だよね」
コメント：激アツなレースだったなぁ
コメント：今年もＵＲＡファイナルは盛り上がったなぁ
コメント：タマちゃんは惜しかった……

「うんうん、今年も競技シーンで活躍する名ウマ娘達の熱い戦いが見れて、私も思わず手に汗握って応援しちゃった！」
コメント：マイヤーちゃんは現地行ったの？
コメント：もしかしたら、側で推しが一緒に応援していた可能性が……
「いやいや、私は今年もお家で中継見てたよ～、さすがに人が集まる所に行くのはねぇ？」
コメント：そんな可能性なかった……
会長絶対主義：見に来てもいいんだよ～？
坂路至上主義：見に来ていただけるのなら万難を排します
「あはは、ありがとね～？まぁわたしだけの判断で行くわけにはいかないからなぁ～……それよりも、決勝ですよ決勝！いやぁ皆すごい走りで見ごたえ十分だったね～」
コメント：マイヤーちゃんは誰推し？
大和ナデシコ：あ、それは気になりますね
レスラーマスク：わたしもきになりマース！

「ん～……そうだなぁ、ルドルフさんの王道の走りはかっこいいし、スズカさんの異次元の逃亡劇には浪漫があるしなぁ～」
コメント：返答次第で明日のトレセン荒れそうだな
コメント：さすがにそれは……ないよな？え、無い……よね？
「そうだねぇ……決勝だけで言えば、やっぱり……スペちゃんかな？」
先頭民族：そんな……嘘でしょ？
コメント：また先頭民族ショック受けとるぞ？
コメント：先頭民族さんオッスオッス
「やっぱり後ろで足を貯めに貯めて、最後の直線に向かって一気にスパートしていくのは見ていて気持ちがいいし、これぞレース！って感じがするよね～」
ホワイトサンダー：せやせや、やっぱわかっとるなぁ！
食いしん坊：やはり差しこそ至高だな
ホワイトサンダー：あ？追い込みが一番にきまっとろうが？

食いしん坊：む、やるか？
「こらこら、コメントで喧嘩しないの！それよりＵＲＡファイナルが終ったら今度はさ～……」
それからしばらくはコメントの反応を見ながら、年明けからのレースについてや今後自分の配信で行おうと思っている内容についてリスナーの皆との雑談に花が咲いた。
「あ、もうこんな時間かぁ。今日の雑談枠はそろそろここでお終いにしようと思うんだけど、最後に告知があります！」
コメント：お？
コメント：なんだなんだ!?
コメント：ついに我らの推しもレースにでるのか!?
「あはは、流石にレースじゃないかな……あれ？でもちょっと近いのかな？」
コメント：おお!?
コメント：ドキドキしてきた
コメント：いったい何が始まるんです……？
コメント：知らないのか……？
「はいはい注目！なんとですね……よっと、画面映ってるかな？この度ＵＲＡさん並びに中央トレセン学園さんご協力のもと、なんと私シルトマイヤーがトレセン学園の学生さんと一緒にライブを行うことが決定しました！」
コメント：まじか!?
コメント：ついに我らの推しが皆の推しと一緒に歌うのか……胸が熱くなるな！
会長絶対主義：えええ!?ボク聞いてないよ!?
バイク好き：まｚぇｋごえぁｋｒご
真紅：落ち着きなさいよあんた
勇者：くぇｒｔむべいらｍｓみこせｔｇんつｒしｋれｌｍｓだおいえｓｒぐじあｒじぇｋｊｋｆｄｓｄじゃ
コメント：もっとやべぇ奴が来た!?
科学万歳：やべぇ奴はこっちで無事に回収したよ

可愛いは正義：なんか凄い悲鳴聞こえたけど……大丈夫ぅ？
開運福来る：まぁあの方は万事いつものことですからねー
「詳しい日程や内容については後日事務所のＨＰで正式に発表がありますので！そちらの方をご確認いただければと思います！ってことで……それじゃ、今日の配信はここまで！おつまいや～」
コメント：おつまいや～
コメント：っよ！乙舞屋!!
コメント：おつまいやー！
会長絶対主義：なんで誰も教えてくれなかったのー!?
万年３着：いや他の子も知らなかったですしー
科学万歳：むしろ君が知らないことの方が驚きだがねぇ
コーヒー好き：お友達も、とても喜んでるみたいです

～＊～＊～＊～

私の名前は立華茉莉（たちばな まつり）。今のところ三女神様からお声がかかっていないどこにでもいる普通の一般ウマ娘。
家はごくごく普通の一般家庭で、メジロ家やシンボリ家みたいなおっきいウマ娘の家系とかでもなく、私の両親もいたって普通のサラリーマンと専業主婦。
一応母方のひいおばあちゃんがウマ娘みたいだけど、残念ながらレースに出たって話は聞いたことがない。なにせ学生時代は戦時中だったみたいだしね……。
母はなんだかウマ娘に強い憧れがあったらしく、未だウマソウルなるものを実感したことのない私にこれでもかとトレセン学園中等部の受験を進めてきたものの、結果は見事に不合格。
まぁそりゃ人よりかは足が速いといっても本格化の兆しどころかウマソウルを感じ取ってもいない子が受験したところで受かるほど門戸が広く開いているわけもなく……。
その後地元の地方トレセンへの進学率の高い中学校に入学するもそこでもぱっと振るわなかった私は早々に競技レースをあきらめて

ドロップアウトして高校は通信制に通いながら半引きこもり状態。
父は気に病むな、自分のしたいことを見つければいいと言っていたけれど、母はそんな私の生き方を認められないらしい。
顔を合わせてはヒステリックに喚きたてて家庭の空気は最悪……結果父の勧めでしばらく距離を置いた方が良いとなった私は家を出てバイトをしながらの一人暮らしになった。
最初は父方の祖父母のもとに行くという話もあったのだけど、私自身も少し一人になりたかったこともあって断った。
実家からの最低限の仕送りとバイト代で暮らす日々は静かで平穏だったけど、どこか退屈で退廃的な毎日。
日々の刺激を求めてあれこれと手を出してみたけどどうにもしっくりこなくて飽きては投げての繰り返し。
正直どうにかせんとなぁと思いながらも所詮は人生経験の乏しい小娘にはバイトや生活の細々とした用事をこなすのが精いっぱい。
このままぼんやりと大人になっていくんかなぁ……なんてアンニュイでモラトリアムな時間を過ごしていたわけだが……。

「んぅぅぅ……あさぁ？」
カーテンから洩れる日の光で目が覚めてベッドそばの時計を見れば、すでに11時、自分で言っておいてなんだけどこの時間を朝と表現するあたり人としてかなり致命的な気がしてならない。
「えっと……めがね、めがねぇ……」
ウマ娘用の眼鏡を探して顔に着ける、世間的にはウマ娘はコンタクトレンズが主流らしいけど、私はどうにも目の中に物を入れるのが怖くて眼鏡を愛用していて、この子で3代目だ。
ぼやけた視界がクリアになれば、そこに広がるのは2ＬＤＫの我が家。府中のはずれにあってお値段そこそこ立地そこそこ（ウマ娘基準）なマイホーム。
とりあえず顔を洗って冷蔵庫から牛乳とジャム、戸棚に入れてあった食パンを2枚ほど取り出して咥えながら戻る。
ウマホを見るといくつか連絡が来ているらしいけど、健やかなブラ

ンチくらい気にせずのんびりしたい派なのでいったん保留。
部屋でまったりご飯を食べ終え食器を片付けた後、やっと目覚めた頭でウマホの通知を一読。
「ほむほむ……りょーかいりょーかいっと」
どうやら午後からの予定が変わったらしく、事務所から来ていた連絡に返答した私は空いてしまった時間をどうするか考えて……まぁ、いつも通りでいいかとウマホをまた手に取った。
「ウマッターで通知をしてっと……ウマスタの更新はいいかなぁ……」
いつも通りの告知をウマッターに載せた後、私は必要器材の電源を入れて準備に入る……といっても、それらは昨日寝る前に使っていたためほとんど準備出来ている、けして片付け忘れていたわけではない、いいね？
「飲み物よーし、ティッシュよーし……よいしょっと」
最近ついに買ってしまった高級ゲーミングチェアに座ってウマ娘用のヘッドホンをセット。必要なソフトを立ち上げてからモニターに設置してあるカメラの位置を改めて確認。
「えっと……突発の雑談だし、２Ｄの……パジャマ衣装でいいかな？」
ママ渾身の一品は私もお気に入りでよく深夜の雑談で使っているモデルを読み込んで動きの最終確認……よし！
「それじゃ……配信開始っと」
私の名前は立華茉莉。今のところ三女神様からお声がかかっていないどこにでもいる普通の一般ウマ娘。
ウマソウルの実感は相変わらずなくて名前も不明。
そんな私は早々に人生ドロップアウトして退屈で退廃的な生活をアンニュイでモラトリアムな感じで送っていたはずなのに……。
「皆おはまいや～、お昼の雑談始めるよ～」
コメント：おはまいや～
コメント：おはまいやー！
コメント：っよ！御葉舞屋!!
コメント：っよ！

コメント：っよ!!!
コメント：お昼なのにおはようとはこれいかに
コメント：お昼なのにパジャマなの芝
「わっはっは、なにぶんつい今しがた起きたものですからねぇ……」
コメント：すっかり自堕落しちゃって……
コメント：デビューしたての頃の規則正しさは何処……？
コメント：マイヤーちゃんもすっかりセカライの一員なんだね……
コメント：セカンドライフ全般的に生活不規則過ぎ問題
「まぁまぁ、そういいながらも付き合う君たちも立派な教官役ですなぁ」
コメント：それほどでも……あるな！
コメント：こんな自堕落ウマ娘面倒みきれんわ
コメント：そんなんじゃ立派なウマ娘になれないぞ！
「はいはい、だから今日も立派なウマ娘目指して配信していきますよ～」
気が付けば、あれよあれよという間に事態が一転好転すってんころり。
どういうわけかは私もわからず、気が付けばバーチャルウマチューバー始めちゃいました。

#００　その子は一般家庭の普通の娘でした

#01

それはとある配信でのこと。

「それじゃ、今日の配信はここまで～おつまいや～」

コメント：おつまいや～

コメント：おつまいやー！

コメント：おつまいやー

コメント：っよ！乙舞屋！

コメント：っよ！乙舞屋!!

コメント：っよ！

コメント：おつまいやー！

コメント：っよ！

「……よし、配信終了っと」

慣れた手つきで配信終了の作業を終わらせてから立ち上がってひと伸び。

固まった体をほぐしながら配信中に飲んだ飲み物を片付けて洗面台で一度顔を洗う。

それから食べそびれたご飯の代わりに戸棚に入れておいたお菓子を手に取って部屋に戻る。

お菓子を摘まみながら読み切れてなかった先ほどの配信のコメントを読んだり、ウマッターでの視聴者達の反応を見るのだが、その中にちらほら気になる話題が出てきた。

「ん～……もう次ですかぁ」

次、というのは次にお披露目する歌動画のこと。

というのも今日の配信はその直前に発表した新しい歌動画の収録や動画作成時の話をするための配信だった。

今回あげた歌動画はウマチューブだけでなく他の動画サイトやウマトックでも話題になっていた歌だ。

茉莉自体も気合を入れて練習しており、また今回歌に合わせたミュージックビデオをなんと本家の動画も手掛けていた絵師さんと

編集さんにお願いした自信作だった。
茉莉自身今までの中で一番の出来だと思っており、その反響たるや開始からまだ半日足らずで2万再生を超えていて、業界全体で見ればまだまだかもしれないが茉莉自身としては大満足の結果だった。
そんな中、ネット上ではすでに「次は何を歌うのか？」といった予想合戦が始まっており、視聴者同士であの曲が～とかこの曲は～などなど、盛んな意見が飛び交っている。
茉莉自身そんな話題が出てきてくれることは有難いことだし嬉しい悲鳴なのだが、いかんせん気が早すぎるというもの。
茉莉の苦笑いも詮無き事というものである。
「ん～……どうしよ……」
茉莉自身は歌うことは好きだし、気晴らしやストレス発散でカラオケに一人で5時間くらい籠ることもざらである。なんなら一時期はあまりに歌いたい衝動にかられた結果カラオケボックスを3件はしごして合計11時間歌い続けたちなみに、一人カラオケ合計11時間は筆者の実話ですこともある。
それにかつては競技ウマ娘を目指していたこともあり、ウィニングライブのための歌や発声の練習なんかもしていたためそれほど苦ではない。
事務所からも安定した再生数とチャンネル登録者数増加を見込めるから積極的にやっていくのも有りだと言われているため、こうして定期的に動画を出しているのだ。
「最近しっとり目が多いし……なにか元気な歌がいいかなぁ？」
歌動画自体はセカンドライフに所属する他のバーチャルウマチューバーも数多く出しており、業界全体のトップ層ともなれば１００万再生もごろごろとある。
そんな猛者達に比べれば自分の再生数なんて可愛いものだが、視聴者からの期待があるのならば答えたいと思うのがライバーの性というもの。
「えっと……明日はゲームの配信で……明後日は事務所のマネさんと打ち合わせ。そのあと来月やるコラボの打ち合わせがあるから……

うん、日曜はフリーだね」
　ウマホでスケジュールを確認すれば、日曜日は久しぶりに一日フリーとなっていた。
「よし、久しぶりにカラオケに行って次の歌動画のネタ考えよっと」
　早速アプリに日曜日の予定を登録してからカラオケの機材を出しているメーカーのサイトに飛び、配信されている最新曲の一覧から歌えそうな曲を見繕うことにした。

～＊～＊～＊～

　そんなこんなで予定をこなして迎えた日曜日。ウマ耳を隠すための少し大きめのキャスケット帽をかぶり、少し窮屈になるけど尻尾を隠すためにゆったりサイズのパーカーとワイドレッグのパンツに押し込む。
　玄関横の姿見で確認してから外に出れば天気は気持ちのいい日本晴れ。
　早速一番近い駅前まで出てからまずはいつも通り朝食兼昼食で腹ごしらえ、何事もやっぱり腹が減ってはって奴ですね。
　それから真っ直ぐカラオケボックスに行ってもよかったんだけど、あまりの天気の良さに気をよくした私はそのまま駅前をぶらりと散歩してから向かうことにした。
　最近使う頻度の増えたリップクリームや喉のケアのためののど飴やハーブティーなんかを見て回りながらぶらぶらと歩いていたんだけど……なにやら、前方からどこかで見たような人が……。
「……トウカイテイオーさん？」
　私の思わず漏れ出た声が聞こえたからなのか、あっちも私のことを見て驚いた顔をした後、嬉しそうに笑ってこっちに駆け寄ってきた。
「あ、茉莉ちゃんじゃん！」
　そういって手を振ってこっちに来るのは皆様ご存じトウカイテイオーさん。
　トゥインクルシリーズを数々の苦難を乗り越えて走り切り、現在は

ドリームトロフィリーグにて活躍するウマ娘。
　そんな彼女がなぜ私にこんなに親し気に話しかけてくるのかと言えば……実は、私がトレセンを受験した際に次の番号が彼女だったのだ！
　……いや、それがどうしたんだよって話でしょ？私もそう思う。
「私のこと、覚えてくれてたんですね」
「あったりまえでしょー？受験の時一つ隣だったんだから！」
「それで覚えているのも珍しいと思いますけど……？」
「えー？そうかなー？」
　不思議そうにしているが、私と彼女の接点ってほんとその程度だと思うんだけどなぁ……なんで覚えてるんでしょうかね？
「トウカイテイオーさんは買い物ですか？」
「ううん、ぶらぶらお散歩中。茉莉ちゃんは？」
「私は……その～……」
「？」
「えっと、カラオケに……ちょっと、歌いに行こうかなって」
「……ほほぅ？」
　なんでニヤニヤ笑ってらっしゃるので……？
　なんだか嫌な予感がして話を切り上げてカラオケに行こうかと思ったけれど、それより先にトウカイテイオーさんに先手を打たれてしまった。
「いいねーカラオケ！ボクも一緒に行っていい？」
「え、一緒に……ですか？」
「うん！嫌だったー？」
「いえ、そんな……でも、トウカイテイオーさんに聴かせられるほどの物じゃ……」
　いやいや本当に、レースだけじゃなくその後のウィニングライブも全力で応援するのがファンの務めならば、私がトウカイテイオーさんのライブを見たのも一度や二度ではないわけで。
　あんな凄いライブとパフォーマンスを見せる人と一緒にカラオケに行くとかなにそれ拷問かな？

いやでもウマ娘レースを愛するファンであり、当然トウカイテイオーさんのファンでもある私としては一緒にカラオケに行けるなんてもう嬉しい恥ずかし通り越して今すぐ昇天グッバイＭｙウマ娘生次はちゃんと走れる娘に生まれたいね！って感じですが……あれ、それもある意味拷問なのでは？

「いーのいーの！ほら行こ！」

「あ、ちょ!?」

とっさの事態にフリーズしている間に気が付けばトウカイテイオーさんと手を繋いでカラオケボックスに連行された私は、リクエストされるがままに歌い続けたのでした……。

（この手、今日は洗わないようにしよう……）

～＊～＊～＊～

Ｓｉｄｅ：トウカイテイオー

その日、ボクはぶらぶらと商店街を当てもなく自由気ままに散歩していた。

トウインクルシリーズから身を引き、強豪が集うドリームトロフィに参加してからというものの、比較的自由な時間が増えていた。

走りたいと思うレースに出る以外はそれまで所属していたチームへ顔を出し、後輩の練習風景を眺めたり併走などで練習を手伝ったりするくらい。

勿論、ボクは皆の夢や想いをその背に乗せる天下無敵のトウカイテイオーだからね、望まれたレースには絶対出るつもりだけど。

とはいえ以前と比べてレースのこと以外に使える時間が増えたし、これからのことも考えればそういう時間が大切なことも理解しているつもり。

それは、これからの競技シーンのことでもあるし、そこから引退した後のこともある。

「とまぁ……そんなモラトリアムは似合わないか」

自分らしくない思考に苦笑いを浮かべられる程度にはウマ娘として第一線で走りぬいてきたのかな？
なにはともあれ、今はのんびりお散歩を……なんて考えてたら、前から見知った顔が歩いてきたんだ。
あっちもボクに気が付いたのか、昔見た頃よりはちょっと大人びたけど今も変わらない綺麗な水色の瞳が真ん丸になってた。
「トウカイテイオーさん？」
「あ、茉莉ちゃんじゃん！」
相手は立華茉莉ちゃん、たぶんボクのウマ娘生の中でも5本指に入る印象深いウマ娘。
「私のこと、覚えてくれてたんですね」
「あったりまえでしょー？受験の時一つ隣だったんだから！」
「それで覚えているのも珍しいと思いますけど……？」
「えー？そうかなー？」
そう、茉莉ちゃんはボクが中央トレセンを受験するとき一つ隣の番号だった娘なんだよね。
それにしても……当時は推薦だって貰えたはずだったのに「この無敵のテイオー様が受験で落とされるはずなんてないもんね！」なんて考えて一般受験をしてたんだよね……今に思えば随分と無謀な事してたんだなぁ……。
でも、そのおかげで茉莉ちゃんと出会えたんだから、結果オーライだね！
「トウカイテイオーさんは買い物ですか？」
「ううん、ぶらぶらお散歩中。茉莉ちゃんは？」
「私は……その～……」
「？」
「えっと、カラオケに……ちょっと、歌いに行こうかなって」
「……ほほぅ？」
その返答を聞いて思わず顔がニヤニヤしちゃった。
なにせこんな偶然出会っただけでぎょーこーなのに、茉莉ちゃんの歌がまた聞けるかもしれないなんて……こんなチャンス、逃す手はな

いよねー？
「いいねーカラオケ！ボクも一緒に行っていい？」
「え、一緒に……ですか？」
「うん！嫌だったー？」
「いえ、そんな……でも、トウカイテイオーさんに聴かせられるほどの物じゃ……」
「いーのいーの！ほら行こ！」
「あ、ちょ!?」
　何かと渋ってきそうな茉莉ちゃんの手をとってボクはこの商店街で行きつけのカラオケボックスに向かった。
　このお店ならウマ娘用の部屋もあるし、機種も器材も豊富だし、提携メニューではちみー置いてるし！はちみー！はちみー！
「ほらほら、早く歌お！」
「うぅ……なんでこんな事に……」
　早速デンモクを手に取って茉莉ちゃんに渡す。普段だったらボクかスカーレットが一番争いをするんだけど、今日は特別。
　少しでもたくさん茉莉ちゃんの歌を聞きたいからね！
「えっと……それでは、お耳汚しかと思いますが……」
「いーのいーの！思いっきり歌ってよ！」
　すでに歌うよりも聴くことがメインになってる気がするけど、まーいいか！
　備え付けのモニターに映ったのは最近ウマトックで有名なアーティストの曲だった。
　茉莉ちゃんはマイクを手に持ち、一度目を瞑ってから深呼吸して……それからすっと目を開いた。
　その瞬間、ボクの体にレースでも中々感じられないくらいの衝撃が走り抜ける……それはまるで会長や名だたる先輩たちの領域を体験した時のよう。
「（そうそう……やっぱり、茉莉ちゃんはすごいなぁ！）」
　その衝撃を未だ持て余しながらも茉莉ちゃんの歌に聴き入ってたボクは、あの日……受験で出会った頃の事を思い出していた。

トレセン学園の入学試験には3つの試験項目がある。
一つは学力試験、トレセン学園は学校でもあるから当然頭の良さは求められるし、地頭がよければレース展開を考える上で何かと助けにもなる。
次はもちろん試験レース、ウマ娘なんだからやっぱり走る力が無いと入学なんてできないからね。
そして最後にあるのが……試験ライブ。
会長が常々言っている「ウイニングライブをおろそかにする者は、学園の恥」という言葉にもある通り、ライブはレースと同じくらい大事で切っても切り離せない存在。
ただ頭がいいだけでも、早く走れるだけでもいけない。その三つがあって初めて一流のウマ娘になれる……だからこそそれを入学する前に見るみたい。
試験は願書提出後に受験票と一緒に与えられた課題曲を歌う内容で、その時は「Ｍａｋｅ　Ｄｅｂｕｔ！」だったかな？
沢山のウマ娘達がそれぞれ持ち味を生かして歌っていて、もちろんボクも自信は満々だったけど、それでもこれは……！って思える娘が何人かいた。
そんな中、ボクは順番を待つ中でふと隣の娘の様子が気になった。
「（この娘……たしか、立華……茉莉ちゃん、だっけか？）」
偶然一つ隣の番号になったウマ娘。名前に関しては他のウマ娘は皆ウマソウルの名前を名乗っていたのに、彼女だけ親からもらった名前を名乗ってたから珍しくて覚えていたんだ。
筆記試験では最後までうんうんうなってたし、試験レースでは組み合わせが違ったおかげで見学できたけど、後ろから数えた方が早い順位だったかな？
そんな娘だから、さぞ悲壮感漂う感じで次に歌うボクとしては困ったなぁなんて思ってたんだけど……。
「……♪～～～♪」
その子は直前に歌っている娘の歌に合わせて鼻歌を歌っていたんだ。どう見ても悲壮感漂う感じではなかったし、まして緊張している

様子もなかった。
「（相当自信あるのかな？それとも開き直っただけ？）」
なにはともあれ、ボクの前で試験会場がお通夜みたいにならないことだけは確実そうだからボクは一安心していたんだ。
でも、それは大きな勘違いだった……。
「受験番号４０５３３１、立華茉莉です！よろしくお願いします！」
順番が回ってきて、元気に挨拶してからステージに立った彼女は手に持ったマイクを胸に抱き、目を瞑って深呼吸していた。
そして、顔を上げてその瞳を開けた瞬間……ボクは今まで感じたことのない衝撃を体中に受けたんだ。
「（っこれ……なに!?）」
流れてくるメロディーはさっきと全く同じもので、耳に届く歌詞ももちろん同じもの。
それなのに、ボクにはその曲が全く違うものに感じたんだ。
そのうち視界は真っ白に染まっていて、ボクはまったく知らない場所に一人立っていた。
そこがどこなのかわからない、でもかすかに聞こえてくるなにかの音と声が、ボクにどうしようもない焦燥感を与えていた。
訳も分からず走り出して、でもその音と声は何処から聞こえてくるのかわからなくて、ともすればすぐ側から聞こえている気がして……。
気が付いたときには、茉莉ちゃんは歌い終わっていて綺麗なお辞儀をして舞台袖に下がって行くところだった。
あまりの衝撃に言葉が出なかったのはボクだけでは無かったみたいで、試験官（あとでそれが理事長とたづなさんだって知ったんだよね）も呆然と彼女を見送っていたし、順番を呼ぶ人もしばし次を呼ぶのに時間がかかったくらいだからね。
結局ボク自身もあの衝撃が忘れられなくて一通り上手くは歌えたけどそれだけで……ボクよりも後ろの順番の娘達なんてさらに委縮しちゃってぼろぼろだった。
試験が終わって帰る時に声をかけようと思ったんだけど、ボクが荷

物を置いてある待機場所の教室に戻ったころにはもう茉莉ちゃんは居なくて……でも、まぁいいかって思ったんだよね。
だって、あんなに凄いパフォーマンスをボク達に魅せてくれる娘なんだもん、受からないわけがないよね！って……あの当時は思ってたんだけどね。
いざ入学してみたら茉莉ちゃんはまさかの不合格で「ワケワカンナイヨー！」ってなったのを覚えてるよ。
「（今も変わらない……ううん、あの頃よりももっと！）」
一曲歌い終えた茉莉ちゃんは恥ずかしそうにしていたけれど、むしろもっと自信を持つべきだとボクは思うんだけどなぁ……？
なにせこの走っても歌っても踊っても一流のトウカイテイオー様が認めているんだから……さ？
「（そういえば、最近ネイチャが教えてくれたバーチャル……ウマ娘？……なんだか茉莉ちゃんの歌に似てるなぁ？）」

…　ｓｉｄｅ：トウカイテイオー　ｅｎｄ

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶　▶　　・ライブ

チャット〉

『今日は疲れてるからのんびり雑談するよ』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　　メンバーになる
　チャンネル登録
チャンネル登録者数　７．３万人

「《ｆｏｎｔ：ｕ２１９》こんまいや《／ｆｏｎｔ》～……セカンドライフ３期生のシルトマイヤーです」
コメント：こんまいやー！
コメント：っよ！紺舞屋！
コメント：っよ！
コメント：おい声どうしたよ？
コメント：マイヤーちゃん！ボイチェン切れてるよ！
コメント：まじかよ、今までの可愛いマイヤーちゃんボイスを返して……
コメント：ボイチェン使ってたんですね、失望しましたチャンネル

登録解除します
「《ｆｏｎｔ：ｕ２１９》いやいや、ボイチェン使ってないから……んん《／ｆｏｎｔ》っ！……今日はね、ちょっと喉の調子が悪いのです」
コメント：喉いたわってもろて〈３５０円〉
コメント：ボイチェン使ってないんですね、よかったですチャンネル登録しなおします
コメント：相変わらず手のひらくるっくるで芝

「いやぁ、今日はさ。久しぶりにカラオケに行ったんだけど……ちょっと頑張り過ぎちゃった、みたいな？」
コメント：カラオケ！
コメント：まさか、友達と……？
コメント：おいおいマイヤーちゃんがそんなこと出来るわけないだろ？
コメント：セカライ１の人見知りクソ雑魚ナメクジ小動物やぞ？

「ちょっと言い過ぎでしょ!?残念でした～お友達とカラオケに行ってきたんですー！」
コメント：マイヤーちゃん……
コメント：マイヤーちゃん、イマジナリーフレンドは本当の友達ではないのよ？
コメント：エア友達とカラオケって斬新だな
コメント：その場合二人分の料金払うの？
コメント：一人だけなのに二人分の料金払われるとか、カラオケ店員にはホラー体験過ぎんだろ
コメント：一人カラオケっていいよね……こう、自由で、救われた気がしてさ……

「君達ぃ……？まったく、本当に友達と行ってきたんだってば！まぁ……偶然出会って一緒に行ったんだけど……なぜかやたらリクエストばっかりされてほぼほぼ私しか歌ってなかったけどさぁ……」
コメント：その友達よくわかってんな

コメント：マイヤーちゃんの生歌とか普通に羨ましい
コメント：俺たちでさえまだ聞いたことがないのにっ!!
コメント：いくら払えばマイヤーちゃんの生歌聴けますか？〈５０００円〉
コメント：貢げば生歌を聴けると聞いて〈３００００円〉
コメント：マジか!?今から貢ぐわ〈５０００円〉
コメント：っく！もう今日の上限まで投げてしまった……
コメント：上限ニキは自重してもろて
コメント：この人さっき夕の木ラジオで５万投げてたニキじゃねーか……
「こらこら！スパチャは嬉しいけどそういう使い方しないの！上限ニキさんは特に自重しなさい！生歌に関しては……まぁ、いつか機会があれば……？」
コメント：セカライのライブ参加しないの？
コメント：あれは登録者数上位のライバーが優先だからなぁ
コメント：#もっと伸びろシルトマイヤー

「あはは……まぁ、いつかは他の先輩や同期の皆と一緒に出たいかな？」
コメント：応援してます！
リコリス：ステージで待ってるぞ！
夕日飛鳥〈夕の木ラジオ〉：一緒に出ようね！
コメント：リコリスパイセン！
コメント：ゲテモノ先輩きとるやないかい
コメント：先輩と同期もよう見とる
リコリス：（＊Φωφ）ニ、ィー　ゲテモノじゃないぞ
コメント：ヒェッ

「あ、リコリス先輩！飛鳥ちゃんもいらっしゃーい。そうだねぇ……みんなでライブとか絶対楽しいだろうなぁ。今日一緒にカラオケに行った友達もすごく喜んでくれてたし」

コメント：そういえば友達ってどういう子？
コメント：学校の友達？
「ん～学校ってわけではないんだけど……その娘とは昔トレセン学園を受験した時に知り合った娘なんだ」
コメント：てことは同年代？
コメント：でもトレセン学園は入学する年齢が結構ばらけてるはず
コメント：年下？
「あ～……多分同年代かなぁ？」
コメント：てことはまだ走ってるのかな？
コメント：さすがにトウインクルシリーズ現役ってことは無いだろ？
コメント：てことは引退してるかドリームトロフィってことか
コメント：ドリームトロフィ行ってるならかなり強いウマ娘ってことになるが？
コメント：あそこは上澄みのさらに一滴が集う魔境
「うん、その友達は今もドリームトロフィで走ってるよ……思えば受験を受けた頃から他の娘達とは違ってたなぁ」
受験会場で出会ったのは今と比べるとまだ体はしっかり出来上がっていなかった頃のトウカイテイオーさんだった。
それでも他のウマ娘達と比べても抜きんでた存在感だったし、番号が一つ違いということもあって試験会場で隣にいた私とは月と鼈と例えても月どころか鼈にさえ失礼、もはやウマ娘とアオミドロほどの差があった気がする。
実際筆記試験を受けた時なんて私は最後まで問題を解くのに必死だったのに、隣で受けてたトウカイテイオーさんは何一つ迷う雰囲気を感じなかったんだから、その差は歴然だったんだろう。
その後の試験レースでは周りの重圧に負けて結果１３人中１１位。
受かると思ってなかった私も流石に落ち込んで、試験会場になってる芝レース場の観客席に向かうと、丁度トウカイテイオーさんの試験レースが開始されるところだった。
スタートしてゲートが開くと一斉に飛び出して来るウマ娘の中で、

トウカイテイオーさんは絶好の先行位置をキープしながら終始落ち着いて走っていた。
そして最後のカーブで一気に順位を上げて結果は２位に４バ身差をつけての圧勝。
その走りがあまりに綺麗で眩しくて……「あぁ……こういう娘がここで活躍してくんだなぁ」って思ったら、なんだか腑に落ちちゃってさ。
結果そこで吹っ切れた私は最後の試験ライブには「せめて記念受験だと思って悔いなく思いっきりやっちゃおう」って挑めたんだよなぁ。
まぁ歌い終わっても全然反応がなかったから……きっとダメダメだったんだろうけど。
私にとっては今に繋がる一つになっているいい思い出だね。
「どういうわけかその娘は受験の時に出会っただけの私を覚えててさ……ほんと、なんでだろ？」
コメント：マイヤーちゃん……
コメント：この娘また言ってる……
コメント：俺知ってる、こういうのが「また俺何かしちゃいました？」ってやつだ！
コメント：はいはいまた俺また俺
「……どういうこと？」

＃０１　その歌声は今も誰かの心に残っている

＃０２

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶　▶ー　・ライブ

チャット〉

『新作ウマ娘カートやっていくよー！目指せ優勝！（難易度ＥＸ）』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　　メンバーになる
　チャンネル登録
チャンネル登録者数　７．６万人

「はーい皆こんまいや～。セカンドライフ３期生のシルトマイヤーです」
コメント：こんまいやー！
コメント：こんまいや～
コメント：っよ！紺舞屋！
コメント：っよ！
コメント：っよ!!
コメント：こんまいや～
コメント：こんまいやー！
「今日はこちら、ＵＲＡ協賛トレセン完全監修スーパーウマ娘カート３やっていきます！」
コメント：改めて言われると冠ワードの強さ半端ないな
コメント：これ企画した奴は間違いなく狂人だろ
コメント：これよくＵＲＡも許可出したよな
コメント：コラボゲーのはずなのに本家顔負けの出来栄えってやばない？
コメントを見る限り反応は上々といったところ。
このゲームはとある配管工が主役のレースゲームがウマ娘とコラボする形で発売されたレースゲームの３番目のタイトルなのだ。
初代が発表された当時は任〇堂のご乱心だとかＵＲＡによるゲーム業界への侵略だとかなんとか言われてきたのだが、いざ発売されればその出来栄えの良さとウマ娘要素をうまく取り入れた内容から瞬く間に人気商品となり、コラボタイトルとしては異例となる続編の開発が決まったほどだ。
そして今回やるのはその最新作、あまりの人気に公式予約サイトは

アクセス殺到でサーバーダウン。
取扱店舗も予約開始が始まるや否や一瞬で討滅されるなど、もはや社会現象かと言いたい。
私も公式サイトと近くの取扱店舗での予約を試みるもあえなく全滅、泣く泣くダウンロード版での購入となった……っく、初回特典パッケージの裏面にある登場ウマ娘の寄せ書きサインが欲しかったのに!!!
「ご本家さんも昔から遊ばせてもらってましたし、このシリーズも初代からやり込んでますからね、期待していきましょう!」
コメント：ウマ娘がカートで走るってやっぱ違和感すげえな
コメント：まぁカート乗らないと話にならないしな
コメント：モデルがぱかプチっぽくてかわいい
コメント：流石にリアルなモデリングじゃカートと対比が合わんからな
スタート直後のメニュー画面ではサーキットのゴール前でわちゃわちゃと動き回るぱかプチのウマ娘が映っている。
皆それぞれ特徴的な動きが多いから起動してこの画面を眺めているだけでも結構楽しい……。
「さてさて、どのキャラを使おうかなぁ～」
コメント：今回もスズカが環境を荒らすんだろうか
コメント：2の初参戦時はやばかったからな
コメント：一時期オンラインでスズカを見ないことがなかったしな
コメント：ランキング上位全員スズカだったときは絶望した
そう、このゲームは割と性能がピーキーだったり飛び抜けているところがあったりとばらつきが多いのが特徴と言えてしまうんですよね～。
前作である2では初参戦したキャラの中でサイレンススズカがダントツのぶっ壊れ環境破壊モンスターだった。
なにせトップスピードに乗るまでの加速がやたらめったら早く、そのせいでドリフト後のコーナーの立ち上がりも非常に速い。
レース開始時の位置取りもなにも無くスタートダッシュでトップ

に立たれると手の付けようがないほどの壊れキャラだったんですよね……なにもこんなところでまでリアル再現しなくてもいいでしょ……？

「まぁ、スズカはシーズン中盤でがっつりナーフ入りましたけどね」

具体的にはステアリング性能の低下とドリフト性能の弱体化。

もっともそれもレート上位ならテクニックでカバーできるのでランカー御用達であることに変わりはなかったんですがね。

なんならいい意味で癖が出たせいで余計使用率が上がってたし、スズカを使いこなせてこそ上級者みたいな空気感があったなぁ。

ちなみにシーズン終盤で環境キャラの地位を得たのは順当に強化され続けた同じく初参戦のスペシャルウィークと1から安定のシンボリルドルフだった。

他にも初参戦だった黄金世代のセイウンスカイやグラスワンダーも人気があった、キングヘイローやエルコンドルパサーはちょっと癖が強すぎたのか一歩及ばずだったけど。

ちなみに公式サイトのファン投票で一番支持されていたキャラはハルウララだったとか。

「さてと……初参戦のキャラもいいですが……初日ですからね、前から使い慣れたキャラで行きましょう」

そこで私が選んだのは……ナイスネイチャ。

コメント：おお！

コメント：渋い

コメント：初代からやってる感すごいある

コメント：ネイチャ！きちゃ！

「ふふふ、どんなコースでもどんな相手でも安定して戦えるのがナイスネイチャの魅力ですからね。新しいコースの練習にもってこいですよ」

早速オフラインモードでゲームをはじめ、まずは初心者練習用のコースで操作感の確認。

シリーズごとに前作を踏まえた調整などが入っている場合もありますからね、まずはこういうシンプルなコースで頭と指の動きをきっ

ちりと調整しておかないと！
　その後キャラをいくつか変えながら3で加えられた調整分の動きや癖を確認していく。
「ふむふむ、体感としては2よりもちょっとスピードが上がった気がしますね。その分ステアリングの感度があがり緩やか気味な感じです。これはカーブの時に前よりもスティック操作をしっかりしないと曲がり切れないかもしれません」
　コメント：昨今のレースゲームどれも速くなりすぎて辛い
　コメント：やっぱ速いと爽快感あるからなぁ
　コメント：年を取るとスピードに目と反射が付いていかない……
　コメント：おじいちゃん、免許はちゃんと返納するんだよ？
　コメント：おいこら誰が爺か？
「さてさて、操作感の確認も終わったので早速プレイしていきましょうか。オンラインと視聴者参加型についてはまた今度にして今日はオフのストーリー編をやっていきます」
　このゲームはオンラインマッチングでフリー対戦やカスタムマッチをするのがメインではあるが、オフラインもしっかりと作りこまれている。
　ストーリーとしてはウマ娘の新たな可能性を云々と語る秋川理事長の下でなぜかカートを使ったレースを行うことになるというもので、3となった今作はワールドツアーカップと称してゲーム世界の色々な場所でレースを行い優勝を争うという内容みたい。
「さてさて、ネイチャさんで頑張っていきますよー」
　コメント：ネイチャの真似で芝
　コメント：微妙に似てて芝
　コメント：ダウナーな感じがちょっと似てる
　コメント：特徴掴んでて大ターフ不可避
　コメント：マイヤーちゃんさてはネイチャ大好きだな
「いやぁ～さてさて……どーなんでしょーね～？」
　コメントとの会話を楽しみながら早速ゲームを進めていく。ネイチャは1から登場しているキャラではあるけれど、作品通してそこま

で過度な調整をされてきたことが無い。
　そのせいで他のキャラと比べると地味な印象が強く使用率も高くはない。
　でもネイチャの強さは1からずっと組み上げられ、微調整され続けてきた完成度。それに裏打ちされた万能性能。
　平凡？凡庸？言うことなかれ！あらゆるレース、あらゆる相手、あらゆる状況。そのすべてに対処できる事こそがナイスネイチャの強みなのですよ！
「ふっふっふ、今こそネイチャ使いとしてこの世界に宣戦布告して見せましょう！器用貧乏なんて言わせない、3着？むろん狙うはキラキラ輝く優勝でしょ！」
　コメント：マイヤーちゃん燃えとるｗｗｗ
　コメント：マイヤーちゃん本気だ……！
　コメント：これが、古参ネイチャ使いの本気……!?
　コメント：さんざんっぱらレビューでぼろくそだった鬱憤が相当きてますねぇ……
　コメントと一緒に盛り上がりながらゲームは進む、最初は日本、次にアメリカ・フランス・イギリス・香港・ドバイ・エジプト・宇宙（なぜ!?）とまぁ、着実に勝利を重ねつつ迎えた最終レース、場所は一回りしてきて日本。
　ここまで私が操るネイチャは2着を何回か取りつつも合計ポイントでぎりっぎりの1位。他の出場キャラは毎度ＣＰＵがランダムで選ぶのだが今回は一番警戒していたトウカイテイオーが居ないし、もうこれは勝ちは揺るがないでしょ！
「さてさて、この最終レースは本来は1戦目と同じサーキットになるんですが……難易度ＥＸでここまで来た時に1位且つ合計ポイントが一定以上だと特別ステージとしてのコースが用意されているんですよ」
　コメント：まじか!?
　コメント：知らんかった
　コメント：オフラインってあんまりやらないからなぁ

コメント：最近はオンライン対戦がメインになる流れだからねぇ～
コメント：このゲーム難易度ＨＡＲＤＥＳＴまではまだ普通なのにＥＸになった途端鬼畜仕様に切り替わるからな……
「というわけで、最終決戦は……なんとなんと、東京レース場芝５８００改！」
コメント：おいｗｗｗｗｗ
コメント：東京レース場……？
コメント：もはや客席スタンド以外面影ねえｗｗｗｗ
コメント：芝（アスファルト）
コメント：もう普通のサーキットじゃねえかｗｗｗｗ
コメント：なぜＵＲＡはここまで本気出してしまったんだ……？
コメント：これがわからない……
コメント：納得の狂気
「いやぁ、これ実は2から密かに実装されていた要素なんですよねぇ……でも公式も宣伝も明言してないし、唯一それらしい情報がストーリーをクリア後に出るスチル1枚というね……隠し要素にしても隠しすぎでしょ？」
しかも難易度ＥＸを出すにはまず最初に選べる難易度ＨＡＲＤをクリアし、さらに次に出てくる難易度ＨＡＲＤＥＳＴをクリアしなければならないんだから、そりゃ知らない人が多くて当たり前だよ、しかもオンラインだと登場しないし。
ちなみに、メニュー画面でぱかプチ達がわちゃわちゃしているのが実はこのステージだったりします、さすがに公式も開発も前回隠しすぎだと思ったんですかね？
「さてさて、それじゃ早速プレイをしてきましょう。目指せ優勝！」
コメント：おー！
コメント：おおぉぉぉぉぉ！
コメント：がんばれマイヤーちゃん！
コメント：頑張れネイちゃん！
コメント：がんばれー！
コメントの応援をその背に受けていざ始まった最終レース。

序盤は順位が高いせいかアイテム運が悪いなどのアクシデントがあったものの、コインの代わりの蹄鉄（これを集めておくと後ろからの妨害アイテムの被害が最小限で抑えられるから大事）をしっかり集めつつ、アウト・イン・アウトなんてやってる余裕はないからコーナーを最速で抜けるインベタ走行で後ろの猛追を躱していく。

コメント：このゲームでインベタとかガチやん

コメント：走り方がもう峠のあれ

コメント：ユーロビート流れそう

コメント：狭くて息苦しい……っ！

コメント：けど負けたくないっ！アクセルは踏むっ！

「ふふふ、鍛え抜かれた私のテクにかかればこれくらい……っ!?」

余裕余裕と言おうとしたその瞬間、画面が青白く光り稲妻が鳴り響いた。

「あ、これ……やばばばばば!?」

コメント：あ

コメント：あ

コメント：あ……

コメント：これは!?

コメント：やつがきた

エフェクトと同時にとあるＣＰＵ以外の速度が若干落ちる。

それを見てそいつが一気に中盤から速度をつけて順位を上げてくる。

「し……シンボリルドルフうううぅぅぅぅぅ!?!?!?」

そう、このゲーム本家には無い一つ特殊な仕様が追加されているのです。

それこそが今画面に映る現象……「ＺＯＮＥ」。

本家にあるスターとサンダーを合わせたような物で、排出率は驚異の２％。

カジュアルに遊んでいたプレイヤーの中にはついぞ手元に来なかったことも珍しくないほどのレアアイテム。

その効果は大体が他プレイヤーに対するデバフと自身の加速・速

度・ステアリングの向上といったもの。
中にはもっとえげつないものがあったりするんだけど……今回使ってきたのはＣＰＵが操るシンボリルドルフ。
その効果は速度の若干の低下とステアリング低下のデバフ、そして自身の速度の上昇。
「やばいやばいやばい追いつかれる!!!」
急いで立て直すも４位から一気にまくり上げて、最終コーナーでインベタする私の隣を悠々と抜けて行きやがりましたよこの皇帝様!?
「っく、でもコーナー抜ければ効果時間は終わるはず！そこからの立ち上がりと最終直線があれば捲ることは出来る……は……ず？」
コーナーを抜ける直前、立ち上がりの加速に合わせてカートのヘッドの位置を直線に合わせようとした直後……今度は地響きとともに地面が割れて爆発するような音が響き渡った。

《ｆｏｎｔ：ｕ８７》「ナリタブライアアアアアアアアアアンンンン!!??」《／ｆｏｎｔ》

ここでまさかのＣＰＵナリタブライアンのＺＯＮＥが発動、その効果はステアリングとドリフト性能の大幅弱体化。
その結果コーナーからの立ち上がりに失敗した私はそのままコースを外れてコースアウト。そのそばを続々とＣＰＵが通り過ぎていく。
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「あ……あ、ぁ……」《／ｆｏｎｔ》
コメント：あ
コメント：これは

コメント：おいおい
コメント：2％の排出率のアイテムを一度のレースで2連続で使われるってどういう確率よ
コメント：もうわけわかんねえ
コメント：確率は3より高かった2でも見たことねえぞ……？
コメント：また一つ伝説が生まれてしまったな……
その後なんとかレースに復帰するも順位はダントツのビリ。
その結果取得ポイント数でトップだった私は1ポイントも入らず、2位と3位がそのまま順位を上げてしまい……最終結果は3着。
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「……お、おなじみさんちゃくぅ……な、なんちゃって……」《／ｆｏｎｔ》
コメント：お、おぅ
コメント：マイヤーちゃん……
コメント：これは……かける言葉が見つかりませんね
コメント：ある意味撮れ高はとれたな！
コメント：おぅポジティブぅ！
「……《ｆｏｎｔ：ｕ２０》スゥ――――《／ｆｏｎｔ》……え～、それでは、本日の配信はここらへんで終りたいと思います」
コメント：立ち直った！
コメント：これ立ち直ったのか？
コメント：完全に心折れてて芝
コメント：芝通り越して焼け野原やん
「だ、だってだってこんなのあるぅ!?どうやったら2％のレアアイテムを最終コーナー前後でぶち込まれるんだよおおぉぉぉぉ!?」
コメント：芝
コメント：芝
コメント：芝芝の芝
「単芝生やすなちくしょぅ!?」
その後は慰めのコメントが流れたり、レースの感想や私のプレイン

グを思い出しながらあれこれ雑談して配信は終了した。
最後ハプニングはあったものの、皆で楽しめたから配信としては満足した……が、次は必ずリベンジしてやるからなぁ!?
後日、前半のイキり倒す所と最後のＺＯＮＥ２連続でボロボロになって瞳孔かっぴろげて発狂しているシーンの切り抜きが上がり、プチバズりしていた……。

＃０３　楽しみは皆と共有できてこそ
価値有るもの

＃０３

いつも通り雑談配信を終えた私はベッドで配信内容の振り返りを行っていた。
するとウマホにマネさんから通知が来た、どうやら明日の午後に事務所に顔を出してもらいたいらしい。
「ん～……なにかあったっけ？」
最近は配信にも慣れてきて昔のようなポンはしなくなってきたはずだし……案件の打ち合わせとかは聞いてないからなぁ……なんだろ？
「ん～～～……あ、グッズ！」
そこで思い出したのがセカンドライフが公式に出しているファン向けのグッズだった。
ＣＤやボイス、ぬいぐるみにポスターやキーホルダー等々色々なグッズが作られているのだが、そういえば近々その見本品が会社に届くから一度確認してほしいって連絡が共有メッセージで届いてたっけ？
私のグッズなんて売れるのか怪しいけど……まぁ、作ってもらって嫌というわけじゃないし、むしろ光栄に思うっていうか……私も一応それなりのバーチャルウマチューバーになれてきたのかなぁって朧気ながらに実感してしまう。
「……ふふふ、どんなグッズになってるのかな～」
まだ見ぬグッズを思い浮かべながらベッドに潜り込んでライトを消す。楽しみ半分恐れ多い半分な気持ちでその日は眠りについた。

～＊～＊～＊～

翌朝、お気に入りのキャスケット帽にゆったりサイズのパーカーという、いつもの出で立ちで家を出る。
最近は快晴続きで綺麗な青空が多いので、私は気分も上々に事務所

へと向かった。
事務所は府中から電車で東京方面にちょっと行ったところにある駅前の雑居ビル。なんと1フロアではなくビルを丸々一つ使っているのだ。
中には社員が仕事をしている事務フロアだけでなく、配信も行える完全防音の個室が並ぶ配信フロアもあり、なんと地下にはある程度の人数が入れる録音ブースと調整室も備わっている。
他にも社員がくつろげるスペースとか、小さいけどレッスンを行えるレッスンルームまでそろっている。
人によっては配信のほとんどをこの事務所に来て行っている人もいるし、突発的な機材トラブルの際に利用したりできるようになっている。
もっとも、私はバーチャルウマチューバーになる前にあれこれと興味を持ったものに手を出していた時期があり、その時ゲーミング用PCの作り方とか、実況配信の仕方や機材の取り扱いについても調べて試していた時期があったので、今のところ利用したことは無い。
「……おはよう……ございます」
なんで事務所とか会社って、午後でもおはようございますって言っちゃうんだろうね？
事務フロアに顔を出すと、何人かの社員さん達が仕事をしたりモニターを見ながらあれこれ話し合いをしているのが見えた。
そのうちの一人が私が入ってきたことに気が付いてぱたぱたと近づいてくる。
「お待ちしてました、マイヤーさん」
「マネさん、おは……こ、こんにちは」
「ふふ、おはようございます。早速ですがこちらに」
「は、はい！」
彼女は私がデビューした頃から、いやデビュー前からお世話になっているマネージャーさん。
クールビューティーという言葉がよく似合う、綺麗に整えられた黒髪を一つに束ねてスーツをきっちり着こなしたお姉さんだ。

一見とっつきにくく見えるけど、とても優しくて人見知りでコミュ障な私にも嫌な顔一つしないできちんと向き合ってくれる。それは他の人にも同じみたいで彼女は社内でもとても慕われるマネージャーさんなのだ。
「ご足労ありがとうございます、すでに他の二人も来ていますから」
「は、はい……他の二人？」
「ええ、マイヤーさんを含めた3人のグッズが出来上がったので。ただあの二人のマネージャーが今日は打ち合わせで都合がつかないので、今日は私だけの立ち合いとなっています」
「あ、は……はいぃ」
「……いい加減、そろそろ慣れましょうよ？同期ですよ？」
私の反応に呆れた顔で反応するマネさん、そんなお顔もクールで素敵ですぅ……。
「はぁ……私の顔を見て現実逃避しないでください」
「あぅ……ご、ごめんなしゃ……」
「はいはい、さっさと行きますよクソ雑魚ナメクジ」
「ひ、ひどい!?」
マネさん、すごく優しいしクールビューティーなんですけど……こう、毒舌というか……昔はほんと頼れる優しいお姉さんだったのになぁ……。
なんて昔の思い出で現実逃避しているうちに、気が付けば会議室に到着したらしく、私は背中を押されて部屋の中に連れ込まれていた。
「お、マイヤーちゃん。やほー」
「あ、マイヤーちゃん。お疲れ様です」
「は、はい……その、きょ……今日はお日柄もよく！」
「お見合いか！」
「ひぅっ!?」
「こらこら楓、マイヤーちゃん怖がってるでしょ？」
「あはは、めんごめんご」
「大体楓は」
「あ～ほらほら飛鳥！今日はグッズの確認があるからさ？」

「まったく……」
開幕からかっ飛ばしているのは私の同期で同じバーチャルウマチューバーの楠楓（くすのき　かえで）さんと夕日飛鳥（ゆうひ　あすか）さんの二人。
彼女たちはそれぞれ活動しつつ二人で夕の木ラジオというユニットを組んでいる。
配信もそのまま夕の木ラジオというタイトルで行っており、色々な企画やアンケートを使ったラジオ番組風の配信をしているんだ。
なんでも二人とも幼馴染で、バーチャルウマチューバーになる前はＷｅｂラジオを自分たちで作って配信していたんだって……すごいなぁ。
「お待たせしました、こちらが今回出来上がった皆さんのグッズとなります。手に取って確認をお願いしますね」
そう言ってマネさんが持ってきたのは両手に抱えた段ボールいっぱいに詰め込まれた私たちのグッズ。
３人分でこれとなると、他の同期の人達の分も合わせたらかなりの量になるんじゃ……？
「は～こりゃまたいっぱいだぁ」
「へ～こんなにあるんだ……あ、この人形の楓かわいい」
「うわぁ……私こんな顔したことあるぅ？」
段ボールから出てきたのはすごくかわいい笑顔の人形の楓さん。デフォルメされてるけどキャラクターの特徴がよく再現されている。
私も試しに段ボールからグッズを取り出してみた、キーホルダーにアクリルスタンド、缶バッチにプラ製の栞等々……ふわぁ……こうして実物になってるのを見るとちょっと恐れ多いです。
「わぁ～マイヤーちゃんの可愛い！」
「ほほう、見事な出来ですな～」
「ひゃう!?」
ついついグッズに夢中になってたらいつの間にか飛鳥さんと楓さんに挟まれていました……はぅ、いい匂い……。
「あはは、急にごめんごめん。でもよく出来てる人形だよね」

「そそそ、そう……ですね」
「でもな～……こうグッズを見ててもさ……やっぱマイヤーちゃん本人もめっちゃ可愛くない？」
「あ、それボクも思った」
「でしょでしょ～？これはなかなかに卑怯というものですな～飛鳥さんや」
「そうですね～？グッズもこんなに可愛いのに、中の人もこんなに可愛いなんて……罪なものですね～楓さん」
「は、はぅ……わわわ、私はそんにゃ……べ、べしゅに……」
「ほらほら！揶揄うのもほどほどにしてグッズの確認をしてください。これでＯＫなら来週には生産を開始するんですから」
　マネさんが二人に挟まれてふにゃふにゃになってた私の首根っこをひっぱりあげて救出してくれた……なんだろ、猫にでもなった気分だね。
「あはは、ごめんなさい。マイヤーちゃん可愛いからつい」
「そーだそーだー！マネさんばっかり可愛がってないで私たちにも愛でさせろ！私もマイヤーちゃんのお耳触ってみたいぞ！」
「ぴぃっ!?」
「触ってません！まったく……あ、そうだマイヤーさん。こちらの確認もお願いします」
「は、はい……えっと、これは？」
　それは段ボールに入っていた人形と同じような人形……なんだけど。
「あのぉ……こんな衣装、私持ってませんよ？」
　そう、マネさんから渡されたグッズは私の人形で間違いなのだが……その人形が身に着けている衣装は私のママ（バーチャルの体を描いてくれている絵師さん）が用意してくれた物ではなかったのだ。
「ええ、実はそれは我が社が発注した物ではないんです」
「え？じゃあどこが……？」
「今回発注している企業にウマ娘のぱかプチを作っている会社がありまして。そこの営業から是非作らせてほしいと連絡が……衣装につ

いては勝負服というのでしたね？マイヤーさんのアバターを担当している五月雨先生に相手企業が発注したもののようです」
「え……えええええええ!?」
まさかの本家本元のぱかプチ!?
あのトウカイテイオーさんとか！シンボリルドルフさんとか！ミホノブルボンさんとか！他の名だたる名ウマ娘さん達のぱかプチとこんなちんちくりんな私のこれが!?並ぶっていうんですか!?
「見本品が届いていましたので、ついでに……ですが、これはセカンドライフ並び株式会社クルセラから出す物ではありません」
「は、はい……」
「ですので、もしマイヤーさんが嫌ならばこの件は断って頂いても構いません。社長からもマイヤーさんの気持ちが最優先だと承ってますので」
「あ、いえ……その」
「え～!?没にしちゃうの？これめっちゃいい出来じゃん」
「そうだね、ぱかプチってどれも作りが丁寧で綺麗だし……この人形も勝負服とかすごくよく出来てるし」
「そうは言いましても、これで後々何か問題があった時に一番困るのはマイヤーさんなんですから、本人の意向が一番大事なのは当然です」
「……私の、ぱかプチかぁ……」
改めてサンプルとして届いたぱかプチを手に取って眺めてみた。
きっとシルトマイヤーが本当に居て、レースに出るとしたらこんな勝負服を着るかもしれない……そう思わせてくれるくらい、そのぱかプチは素晴らしい出来だった。
「その……私なんかのぱかプチを作ってもらえるなんて思ってなかったので……う、嬉しいです……」
「それならいいのですが……では、相手企業には生産ＯＫのゴーサインを出しておきますね」
「よよよ、よろしくお願い……しましゅう～……」
とはいえ、恐れ多いのは間違いなくて、嬉しい反面恥ずかしいとい

うか……レースに出ていないどころかトレセン学生ですらない私のぱかプチなんて……ど、どこに需要が？
「はぅ……きっと出しても売れ残ってワゴンにならんだりクレーンでも最後まで取られることなく倉庫の隅に置かれますよね……そうだ、きっとそうに違いない……」
　ふふふ、そうなったら私がちゃんと買ってあげますからね……お部屋いっぱい私のぱかプチで埋め尽くすんだぁ……。
「あ～ぁ……またマイヤーちゃんぐるぐるしとる」
「あはは……こうなるとボク達の声も届かないからなぁ」
「まったく……もう少し自分の評判をしっかり認識してもらいたいものですね、このクソ雑魚ナメクジ」
「……マネさんってたま～にお口わるわるになるよね」
「《ｆｏｎｔ：ｕ２１９》あ《／ｆｏｎｔ》？」
「ぴぃっ!?」
「あはは……」

～＊～＊～＊～

ｓｉｄｅ：マネージャー

　自分の世界にすっかり入り込んでしまったマイヤーさんを飛鳥さんと楓さんに任せて帰らせた後、私は早速グッズの生産のゴーサインを出すために関係企業にメールで連絡を入れた。
　それにしても……マイヤーさんの人見知りやコミュ障気味なのもあれだが、自己評価の低さもどうにかしないとならない問題です。
　マイヤーさんは現在チャンネル登録者数７万人越え、今のペースなら１０万人も確実だと私も社長も考えている、この伸び率はまだまだ箱としては小さいセカンドライフとしては上々といったところです。
　他社と違ってそこまで箱が大きくないセカンドライフでは新人がデビューしても大きなブーストは期待できません。
　そこに関しては会社が一丸となって努力を重ね、少しでも箱を大き

くするべく邁進していくつもりですが……そんな中彼女の伸び率は我々の希望であり、皆が期待を寄せています。
もしこのままのペースで順調にチャンネル登録者数を増やしていけば１０万、２０万、いやそれ以上だって十分射程圏内。
彼女がセカンドライフの新しい顔としてその座を確かなものにするのは間違いありません。
ただまぁ正直……彼女がスカウトされた当初はどうなることかと大分不安でした。
彼女は自社のスカウトが見つけてきたわけではない、社長が偶然彼女が出演した町内会のライブイベントで歌っていたのを見つけ、その場で勢いに任せてスカウトしたのです。
当初は今以上に自己評価が低かった彼女でしたが、押しの一手が大得意な社長がどうにか話し合いの約束を取り付けました。
……あの時は大変でしたよ、彼女じゃなくその周りのヒト達が彼女を護ろうとクルセラの事務所に押しかけたりして、他の３期生のデビュー準備を進めていたマネージャーやスタッフには大分顰蹙をかったものです。
まぁ、見る目とセンスだけはある社長のすることだからとそこまで問題にならなかったのはさすがですが。
結局彼女とライブ参加をお願いした責任があるからと、彼女の住むマンションの大家さんが一緒に事務所まで来て話し合いの場が持たれました。
我が社の理念とウマチューバーという活動について真摯に語る社長の話を受け、最終的には大家さんも背中を押す形で彼女の所属とデビューは決まりました。
社長曰く「将を射んとする者はまずウマ娘を射よっていうでしょ？」ということでしたが……たしか昔の武将が敵将を倒すためにその友であったウマ娘を懐柔するって話でしたか……言いえて妙ですね、大家さんはヒトでしたが。
まぁそうして外堀を埋めて彼女の人見知りとコミュ障を考慮した結果、素顔を出すウマチューバーではなく、アバターを用いて活動を

行うバーチャルウマチューバーとしてデビューすることとなりました。
ちょうどウマ娘のバーチャルウマチューバーの企画があったのでそれをそのまま採用、ちょうど魂の選定を始める前だったのが幸いしました。
アバターもウマ娘なのに魂もウマ娘なのか？という声もありましたが、その方がリアリティがあって良いという社長の一言で無事に採用。
その後は人見知りコミュ障がたたって初配信では隠しておくはずだった魂もウマ娘であることを本人が暴露したり、3期生コラボを組んだら微動だにせず挨拶しようとしたら過呼吸起こして放送事故起こしたりと、色々やらかしを繰り返したものの視聴者からはむしろ好意的に受け入れられたのは嬉しい誤算と言えました。
結果チャンネル登録者数は順調に伸びており、他の3期生と比べれば頭一つ抜けている状態です。
「とはいえ、無意識な自己評価の低さについてはまだ改善の兆しは見えませんか……」
勿論。それがマイヤーさん自身と幼少期の家庭環境にあったことは社長とマネージャーである自分は把握している。
というのも、彼女はデビュー当時は通信制の高校に通っている最終学歴中卒の未成年。
親からの承諾と契約については父親から彼女を通じて受けることが出来ましたが、今後活動していくうえで家族からのサポートが必要になるのは明白です、一人暮らしをしているというのならばなおさらです。
そこで、私は社長に掛け合って一人で彼女の実家に挨拶に向かいました。
契約の際に受け取っていた履歴書に書かれていた実家の連絡先と住所を頼りにたどり着いたそこは、極々普通の一軒家でした。
チャイムを押してしばらく待つと、伺う旨を事前に連絡していたからか彼女の両親が出迎えてくれました。

事前に買っていたお菓子を渡して居間に上がらせてもらうと、小豆色のジャージを着た少女が一人座っていました。
「貴女は……？」
「は、はじめまして！クラウハーゼンっていいます。茉莉おねーちゃんの妹です！」
「そう……妹さんがいたんですね、知りませんでした」
「あはは……おねーちゃん、あんまり家族のことは話したがらないから」
クラウハーゼンと名乗った少女は、聞くと地元の小学校のウマ娘用陸上クラブに所属しており、すでに中央トレセンからのスカウトの話も来ているらしい、来年卒業後はトレセンに進学するつもりだとか。
しばし彼女のことや姉であるマイヤーさんの話を聞いていると、お茶をもって彼女の両親も居間に入ってきました。
そこでマイヤーさんから最低限の話は聞いているだろうが、改めてマイヤーさんのバーチャルウマチューバーとしてのデビューとその活動内容についての話、そして今後の活動においていざという時、家族のサポートが必要になる時が来るという話をさせてもらいました。
父親は終始黙って聞いており、母親はところどころ言葉に詰まりながらもマイヤーさんの活動についての質問をしてきました。
一通り話を終えたとき、彼女の母親はたった一言「……よかった」と呟いたのです。
「よかった……ですか？」
「あ、はい……私は……あの子にとって良い母親じゃありませんでした。私は……自分の憧れを押し付けてばかりで……身勝手な想いであの子の人生をめちゃくちゃにしてしまったんです」
そういいながら涙ぐむ母親の肩を父親はそっと抱き寄せました。クラウハーゼンも心配そうに母親を見つめていました。
それから彼女の幼少期の話や、トレセン受験に失敗した話、その後進学をするも上手くいかず家族と距離を取った話も伺いました。
正直あまり気分のいい話ではありませんでしたが、それでも母親の流す涙には色濃く後悔がにじんでいることは理解できました。

「ですから……あの娘が自分の道を決めて歩けるようになったのが……嬉しくて、親としてはなにもしてあげれなかったから……」
そう言って母親は涙で化粧が崩れてみっともないからとお手洗いに向かいました。
「マネージャーさん……娘のこと、よろしくお願いします」
「私からも！おねーちゃんはすっごいおねーちゃんだから！」
「……ええ、任せてください」
私がそう言うと、父親も妹も安心したように笑顔を浮かべていました。
結局戻らなかった母親を残して玄関まで見送りに来てくれた二人に見送られて、私は会社に戻りました。
それからはデビューと様々なやらかしの後始末に追われながらも無事活動は軌道に乗り、本人も他の3期生や先輩である1、2期生と人見知りのコミュ障なりに関係を築けてはいるようです。
聞いた話では母親とも妹を介して話をしているらしく、昔ほどギクシャクした関係性ではなくなってきているらしいですが。
「まぁ、彼女もまだまだこれからでしょうか……ふふ、支え甲斐のある担当ですね」
こっそり確保していたもう一つのサンプル品である私服バージョンのぱかプチを眺めながら、もうひと踏ん張りと気合を入れ直すことにしました。

…　ｓｉｄｅ：マネージャー　ｅｎｄ

～＊～＊～＊～

まもなく開始すっから、もうちっと待て

▶ ▶ ▬ ・ライブ

チャット〉

『夕の木ラジオ第２８回：お前ら準備はいいか？私は出来てる』

楠楓〈夕の木ラジオ〉メンバーになる　チャンネル登録

チャンネル登録者数　４．３万人

「は～……」

「どしたの楓？」

「いや、まじマイヤーちゃん可愛すぎんか？」

「それには至極同意するけど、突然何？」

「いや、今日一緒に買い物行ったじゃん？」
「そだね、新作のアクセとか見てきたね」
「ウマ娘用の耳に着ける、あれなんだっけ……」
「あぁ、イヤーキャップ？そういえば新しいの欲しいって選んでたね」
「そうそうそれ！色々デザインあって面白いな～って思ってたけどさ、試しにって試着してたマイヤーちゃんがさ、もう可愛いのなんのって！」
「あ～たしかに。ちょっと敏感なのかな？はめる瞬間《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「っんぅ」《／ｆｏｎｔ》とか言うの、すごくかわいかった」
「照れた顔して「こ、ここ……これ、どうですか？」とか聞いてくるんだもん。もう楓さんのハートきゅんきゅんよ！」
「そうだねぇ、そういえばその後にボクが」
「あ、ジングル終わった。ラジオ配信夕の木ラジオ」
「始まりまーす」

コメント：相変わらず前枠ぶった切りで始まるの芝
コメント：俺たちは毎度何を聞かされているんだ……。
コメント：普通に話の続きが気になる
コメント：お前ら、続きが気になるならボイスのセット購入特典の夕の木ラジオ特番編を手に入れるんだ！
コメント：でもアンケ次第では内容に入らない場合があるからアンケもしっかり答えるんだぞ！
コメント：相変わらずコメントで宣伝と誘導をするリスナーの鑑
「はいはい、そういうわけで始まりました夕の木ラジオ。この配信はセカンドライフ所属バーチャルライバーの楠楓と～」
「同じくセカンドライフ所属の夕日飛鳥でお送りします」
「そういうわけで、今回はまず大事な告知があるので先にそっちから、飛鳥さんどうぞ！」
「なんと！セカンドライフ３期生のボクと楓、それからさっき話に出ていたバーチャルウマ娘のシルトマイヤーちゃんの３人のグッズが、３期生グッズ第１弾として発売が決定しました！」

「どんどんガンガンぱふぱふ～！」
コメント：まじか！
コメント：ついに来るのか！
コメント：何が出るの？
「ふっふっふ、さっそく内容が気になってるみたいだねぇ……というわけで、はいドーン！」
「こちらが今回ボク達のグッズの写真だよ。ちなみに写真はまだサンプル品だから製品版ではちょっと変わってるかもしれないけど、そこはご了承ください」
「いやぁ～色々あったからねぇ、君達のお財布をまた薄～くしてしまうねぇ？」

コメント：むしろ本望よ
コメント：このために日々節約してますから
コメント：にしても、本当に色々あるな
コメント：人形可愛い！
コメント：アクリルスタンドは全身とＳＤの２パターンか
コメント：ポスターのラジオブースで夕の木の二人に絡まれておろおろするマイヤーちゃんとか解釈一致ですわ
コメント：このポスターには教官役も思わずニッコリ
コメント：久々のコラボがまさかのグッズのポスター
「あはは、まぁコラボについては追々ね」
「いやぁしかし……諸君よ、まさかこれで終わるとお思いかね？」
「え、ちょっと……楓？」
「ふふふふふ、はいドーン！」
コメント：こ、これは!?
コメント：これって……ぱかプチかな？
コメント：マイヤーちゃんの……ぱかプチ……だとぉ!?
コメント：やばばばばばばば
コメント：これは良いものだ
コメント：いい匂いしそう

コメント：はい通報した
「なんとね、マイヤーちゃんのぱかプチをグッズ製作を担当した企業様からのご厚意で作っていただくことになったみたいなんだよ！これすごくない!?」
「……いや、すごいけどさ……楓？」
「どったの飛鳥？」
「これ……この写真と情報、マネさんからちゃんと許可貰ってるよね？」
「……」
「……」
「……てへっ！」
「……ボク知らなーい」
「だだだ、大丈夫だって！マイヤーちゃんだって前向きだったし」
セカンドライフ公式：楓さん、あとでお話があります
コメント：あ
コメント：あ
コメント：お
コメント：ヒェッ
コメント：あ～あ
コメント：おいおい
コメント：こいつ死んだわ
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「あ、あ……あ」《／ｆｏｎｔ》
「……ボクは関係ないからね～」
「ちょ!?私らコンビでしょ!?」
「今日で夕の木解散でーす」
「ひどぅい?!」

＃０３　その背を見つめる瞳は優しくて

#04

事務所でマネさんとの定期打ち合わせがあった日、私はいつものように事務所を訪れていた。
すると、いつもは私たちライバーやウマチューバーの事が書いてある雑誌や最新のゲーム雑誌、ゴシップ系週刊誌が置かれているテーブルに大量のインスタント食品が並べられているのが目に入った。
「なんですか、これ？」
「あぁ、そちらは案件用のサンプル食品です」
「案件？」
「はい、今日はちょうどその話をしようと思っていました。どうぞこちらに」
「あ、はい」
マネさんに案内されて会議室に入ると、さっき見たもの以外にも色々な食品がテーブルに並べられていた。
手に取ってみると日本でも有名な食品メーカーのカップスープをはじめ、お味噌汁やパスタ入りのスープ、他にも栄養補助食品やサプリメントなんかもある。
「本日はこちらの食品メーカーグループからの案件の説明になります」
「えっと、具体的には何をすれば……？」
「特には何も」
「え？」
「普段と同じように配信をしていただいて、その間に食べる軽食としてご利用ください。その際に商品名と簡単なレビューをしていただければ案件は成立します」
「へぇ～……食べるだけでいいんですか？」
それはまた随分と簡単というか……もっとこう、配信枠を取って通販番組みたいにやるのかと思ったけど違うみたいだ。
もっとも、そんな配信なら私には来ないか……？

「はい……ただ」
「ただ……？」
　そこでマネさんは言葉を区切ると、大層困ったといった様子で頬に手を添えた。
「この案件のせいで皆さんの夜更かしと夜食が増えて不健康生活が促進されると思うと、頭が痛いのです」
「あぁ……あはは」
「貴女も笑いごとではありませんよ？」
「へぅ……ごめんなさい」
　マネさんの指摘に心当たりがありすぎてキャスケット帽の中の耳がへにょりとしおれる。
　思えば最近は夜更かし配信して夜明け近くに寝て、昼過ぎに起きて配信準備してまた夜に配信っていうサイクルが続いている気がする……。
　おかしい……デビュー当時はちゃんと朝起きて夜寝る習慣があったはずなのに……。
「真夜中の配信は安定はしますがコアなファン層が定着するだけで新規の取り込みは難しいのです、昼から配信しろとは言いませんが、せめて他の層が見る夕方などの時間帯の配信も心掛けるようにしてください」
「はい、ごめんなさい……」
「ふぅ……まぁお説教はこれくらいにして。それでマイヤーさんにはインスタントのカップスープと、こちらの補助食品をお願いしたいのです」
　そういってマネさんが持ってきたのはいくつかのカップスープと……なんかやたらでっかい箱。
　なんだろ、まるでゲーム機が入ってそうなくらい大きい。
「あの、これは？」
「こちらはウマ娘向けのプロテインです。流石にこれを普通のヒトが飲むわけにはいきませんから」
「あぁ～……確かに」

ウマ娘用ともなればその燃費を考慮してるはず、それをヒトが飲もうものなら……ね？
ウマ娘が摂る分の栄養を普通のヒトが摂ればトップアスリートでもあっという間に体調を崩すだろう、というか太るだろうな、消費よりも摂取のほうが圧倒的に過多だ。
「そもそも、ヒト用でもマイヤーさん以外には預けられません」
「それはまた、なんで……？」
「皆さん運動なんてしませんから」
「……あぁ」
バーチャルライバーをはじめウマチューブの配信者というのはほとんどの場合部屋の中で椅子に座って配信するのが一般的だ。
となると、当然動かない時間は増える一方で……。
思えば少し前に流行りに乗ってセカライのライバー達がこぞって始めたリン○フィット○○ベンチャーの配信時は、それはもう阿鼻叫喚の地獄だった……私はウマ娘ということでヒト用のメニューでは軽すぎるし、そもそも機材がウマ娘の力に耐えられないから見送ったけど。
「ところで、これ他の人もやってるんですか？」
「ええ、1期生は葵さんとリコリスさんが、2期生はシーラさんとライナスさんが担当します。3期生に関しては基本的には全員どれか一つは受け持ってもらう予定です」
「なるほど」
「ちなみに、先ほど夕の木の二人が来て大量のカップ麺とパスタを持っていきましたよ」
「あはは……お二人らしいですね」
「ええ、ですからこっそりと……こちらを仕込んでおきました」
そういってマネさんが取り出したのはおどろおどろしいくらいに真っ赤なパッケージ、なんか蓋に劇物指定みたいなマークが描かれてる気がする。
「えっと……これは？」
「マイヤーさんにはまだ早いです」

「いや早いとか遅いという問題じゃ」
「マイヤーさんにはまだ早いです」
「いえ、あの」
「マイヤーさんにはまだ早いです」
「……ッス――――あ、はい」
「はい、それではこちらの案件をお願いできますね？」
「は、はい……了解しました」

～＊～＊～＊～

　そんなこんなで食品のいくつかとプロテインを持って帰った私は早速雑談配信をしながら試食をしてみたのだけど、流石日本が誇る食品グループが作っているだけあってどれも美味しい。
　中にはインスタントとは思えないクオリティもあって、ご飯は基本的に自炊していたからあまりこういった物に頼ることは無かったのだけど、たまにはいいかもしれない。

「そんなこんなで、いやぁすっかりインスタントの便利生活に染まってしまったのですよ」
　コメント：あぁ
　コメント：マイヤーちゃんがまた一層不健康な生活に
　コメント：健康生活して〈１０００円〉
　コメント：ナイスパ！
　コメント：マイヤーちゃんが病気にならんといいけど
「あ、スパチャありがとうございま～す。いやぁ美味しいご飯を食べてお金ももらえるなんてすばらしいですね！」
　コメント：マイヤーちゃん……
　コメント：そんなにパクパクで大丈夫なの？
　コメント：ウマ娘なんだからそれくらい食べなきゃ
「大丈夫ですよ～、ちゃんとその分バイトで体動かしてますし……あ、コーンクリームスープ無くなった。それじゃ次のカップスープ作り

ますね～」
コメント：本当に大丈夫なんだろうか……？

心配する視聴者である教官役の皆さんのコメントを横目に私はカップスープを飲んでは味の感想を述べたり、皆が好きな味を語り合ったりと配信は大盛り上がり。
マネさんからもメーカー側から好評をいただいているとのことで、その後もゲーム中の夜食や朝活の雑談配信などで案件商品のレビューを行った。
そんな中で最後に残ったのが……プロテインだ。
「ううん……さすがにこれはしっかり体動かさないとまずいかなぁ」
パッケージの内容を見るに運動後の栄養補給を目的としたもので、しかもそれがウマ娘用と来た。
おそらくレースを走るようなウマ娘では無く、あくまで個人の趣味として運動を楽しんでいるくらいのウマ娘向けの商品なんだろうけど……それでも運動せずにパクパク、いやこの場合ゴクゴク？しちゃったら……もっちりぷっくりになるのは目に見えている。
「ん～……よし！せっかくの機会だしランニングでもしようかな？」
そうと決まれば早速ランニング用のシューズを見に府中駅前にあるウマ娘用品が並ぶショッピングモールに向かうことにした。
久しぶりに訪れたそこにはそこかしこにウマ娘がいて、中には今レースで世間を賑わせているウマ娘も少なくはない。
「ふっふっふ、でもここで詰め寄って困らせていてはファンの名折れ、ここはプライベートを尊重して……横目に見るくらいにとどめましょう」
きゃっきゃと賑わうウマ娘たちを横目にガン見しながらいそいそとレースで使うシューズ等を扱っているお店に入る。
そのお店はブランド品ではない一般流通商品を主に扱っていて、レースで使う蹄鉄を嵌め込む靴以外にも普段の外出やちょっとしたランニングに使えるシューズも結構な数がそろっている。
何よりも高級ブランドじゃないからお値段リーズナブル！お手頃

価格で買えるからついつい色々見てしまう……っく、これがおされな靴の吸引力かっ!?
パーカーの中でそわそわと動く尻尾を宥めながら目的の商品を見て回る。
「ん～、機能美……でも可愛いほうが気分が上がるし……」
随分と見ないうちに色々な商品が出ているみたいですね……私が子供のころなんてデザインなんて二の次で白と黒の２色しかなかった気がする……。
ウマ娘が進歩を続けるように彼女たちの使う道具も日進月歩で変わっているらしく、色々知らない新機能が盛りだくさんです、エアってなに？え、この靴底頑丈さが蹄鉄並みなの!?どういうこと……？
あれやこれやと手に取っては眺めてを繰り返していたら、もうどれが良いのかわからなくなってきました……もういっそのこと店員さんに聞くかな？
「あの、もしかして……茉莉ちゃん？」
「ほぇ？」
そんな時に突如後ろから名前を呼ばれて慌てて振り向くと、そこに立っていたのは綺麗な栗毛のウマ娘さん……あれ、もしかして？
「あ……す、すすすスズカしゃ！んぐっ……スズカ、さん？」
「やっぱり、久しぶりね茉莉ちゃん」
「は、はひ!?お、おお……お久しぶりですぅ」
そう、そこに立っていたのはサイレンススズカさんだった。あれでも確か……。
「スズカさん……た、たしか海外に……いたんじゃ？」
「ええ、実は次のドリームトロフィーで走らないかってオファーがあって……それに、約束があったから」
「ほえぇ……そ、それじゃ……今度のドリームトロフィでスズカさんの走りが見られるんですね！」
「ええ、まだ予選があるけど……きっと決勝まで行って見せるわ」
「わぁああ！それは楽しみです！……なら今から観戦のスケジュールを押さえないと」

「ふふ、応援してもらえると嬉しいわ」
「はぅ?!……おおお、お任せくだしゃい！かにゃらずテレビで応援しましゅ!!」
「あら……レース場まで来てはくれないんですか?」
「ふぇ?!えぇっと……その～……そうしたいのは山々なのですが、あのぉ～……やむにやまれぬ事情というものがありましてぇ～……」
「……ふ、ふふ……ふふふ！」
「す、スズカさん?」
「ごめんなさい、少し……困らせてしまったみたい。茉莉ちゃんは出会った頃からそうだったものね……でも、いつかはレース場に来てあなたの声で応援してくれると嬉しいわ」
「は、はい！」
スズカさんと出会ったのはそう……私がまだクルセラの社長と出会う前、バイトをしつつ興味が湧いたことをあれこれとやって、何となく過ごしていた時のことだった。

「……どうしましょう」
道の真ん中でトレセン学園のジャージを着たウマ娘さんが一人、困った様子であたりを見渡して……というか、なぜか回ってます、盛大にぐるぐると左回りしてます。
すでに日は沈みきっていて、このあたりは街灯がまばらなため大きな道をそれると真っ暗になってしまう場所が多々あるから……。
普段だったら素通りするところですが、人見知りコミュ障とはいえこんな真夜中の薄暗い道で困る学生を見捨てるわけにはいきません、ここは……頑張って声をかけましょう！
「あの……どうか、しま……したか?」
「え、あ……その……道が、わからなくなってしまって」
「なるほど……えっと、サイレンススズカさん……ですよね……たしか」
顔をよく見るとどこかで見た覚えが……と、そこで彼女がサイレンススズカだと気が付いた。

大逃げが得意なウマ娘ということで出場するレースを大きく賑わせていた娘だったけど、確か去年の秋の天皇賞でレース中に骨折していた気がする。
その時は私も画面の前で驚いてモニターに掴みかかってしまったほどだ……ちょっと思い出しても恥ずかしい……。
「あ、はい……わたし、サイレンススズカです……その、リハビリのトレーニングでランニングしていたら……ここに来ていて」
「えぇ……リハビリのランニングで？」
「は、はい……そうですけど？」
「……ここ、もう府中の中でも端っことというか……学園とは正反対ですよ？」
そう、私の住んでいるアパートのある場所は府中市の中でも端の端ですぐそばの道を越えたら隣の市に入るくらいの場所だ。
そしてトレセン学園はここから府中市を横断した向こう側……どういうことなの？
「え、そう……なの？どうしましょう……」
「いったいどれだけ走ってきたんです……？」
「その……風が」
「え？」
「いい風が……吹いていたから」
「風？」
「それに、ほら！星がね、凄く綺麗で……だから、その」
なんかこの娘いきなり詩人みたいなこと言い始めたんだけど……しょうがない。
「えっと……りょ、寮はどっちですか？」
「え？」
「す、住んでいる寮……です、確か……美浦と栗東が、ありましたよね？」
「り、栗東……です」
「ということは……フジキセキさんか……えっと」
「あ、あの……？」

「ここからじゃ寮もと、遠いし……門限も過ぎてます、よね？」
「……あ、あぁ！……ど、どうしましょう？」
「なので、今から連絡を入れて無事なのを伝えて、今日はわ、私の家に泊まって……それで朝一で寮に帰ってちゃんと謝ること。いいですね？」
　さすがにここまで話して連絡はしておくから野宿して帰ってねなんて言えませんからね……あれ、お部屋……片付いてるかな？
「は、はい……あの、でも連絡は」
「しないわけにはいかないでしょ……それに、ランニング中でウマホ……持ってるようにも見えませんし？」
「ご、ごめんなさい……」

～＊～＊～＊～

ｓｉｄｅ：サイレンススズカ

　なんだか不思議な出会いだった、あとになって私はそう思った。
　秋の天皇賞の第４コーナーで骨折した私はスペちゃんをはじめチームメイトやトレーナーさん、今まで戦い共に駆け抜けてきたライバル達の励ましもあって、必死のリハビリを続けていた。
　そのかいもあってか年明けにはギプスもとれ、徐々に松葉杖が無くても歩けるようになり、やっと一人で走れるようになった。
　もちろん全力ではまだ無理だけど、軽いランニングなら問題ないくらいまでには回復した。
「……風が、気持ちい」
　久しぶりのランニング、ケガをしてから献身的に私の身の回りのことをしてくれていたスペちゃんが心配そうだったけど、私は一人でランニングに出た。
　仲間と一緒に走るのも楽しいけれど、たまには一人風を感じながら走りたかったから。
　想いのままに走った……肌を撫でる風、髪を揺らす風、尻尾を巻き

上げる風……私は久しぶりの一人の景色を思う存分楽しんだ。
「……はぁ……はぁ……ふぅ……良い風、それに星も……綺麗」
あの秋から遠ざかっていた久しぶりの景色に私は確かな満足感と心地よさを感じていた……の、だけど。
「……あら、ここ……どこかしら？」
あたりは既に日が落ちて暗く、覗いた路地は真っ暗で先が見えないほど。
確かに今自分が走ってきたはずの道なのに、気が付けばどっちに行けば帰れるのか私は判らなくなっていた。
「……困ったわ、道がわからない」
さすがにこれには私も焦ってポケットを探ってみたけど、そういえばウマホは机のスタンドで充電中、そもそも学園の外周を軽く流すだけにしようと思っていたはずなのに……その、風です、風が悪いんです。
「……どうしましょう？」
どうすれば寮に帰れるかを考えていた時だった、暗がりの向こうから女性が歩いて来て声をかけてくれた。
「あの……どうか、しま……したか？」
「え、あ……その……道が、わからなくなってしまって」
困っていた私は素直に道に迷った、ランニングしてたらいつのまにかここに居たと答えるとここはトレセン学園とは正反対だと言われ呆れられてしまった。
それからはあれよあれよと事が進んで気が付くとその女性、立華茉莉ちゃんの家に一晩泊まることになった、連絡は全部茉莉ちゃんがしてくれた。
最初は道さえ教えてもらえれば走って帰れると伝えたんだけど、さすがにこんな真夜中の暗い道を女の子一人で帰すわけにはいかないって言われて……。
通されたのはマンションの一室で、どうやら一人暮らしをしているみたいだった。
「狭いですけどどうぞ、布団は……たしかベッド買う前のやつが……

あったあった」
「その……なにからなにまですみません」
「ん？あぁ……えっと、気にしないでください。その……なんとなく似てたんです」
「似てる？」
「その、うちの妹に……あの子も私のランニングの後ろをくっついて走って、でも直ぐに置いてかれて、道に迷って泣きながらその場をぐるぐる回ってて」
「ぐるぐる？」
「あ、あぁ～～……なんでもないです」
「は、はい……」
「えっと……そうだ。汗かいてますよね？シャワー浴びちゃってください！これタオルで、着替えは……ごめんなさい、たぶんサイズ合わないかも」
「あ、いえ……お気になさらず」
「……っく、私もあと背が１０……あっても足りないだろうけどぉ」
「えっと……しゃ、シャワー借りますね」
「えぇ……ごゆっくりぃ」
シャワーを借りて、結局着替えは比較的大きいＴシャツだけ借りることにした。
それからは寝るまでの間にお互いのことを話して、茉莉ちゃんが実はウマ娘だったこと（ずっと帽子かぶってたからわからなかった）や実は年齢がそれほど変わらないことを知った。
その後私は久々のランニングの疲れから、茉莉ちゃんはバイトの疲れで眠気が訪れたことでそろって就寝、翌日は簡単な朝ご飯までごちそうになってから家を出ることになった。
「まったく、あまり心配させないでおくれよ？」
「ご、ごめんなさい……ところで、フジ先輩はその……」
「ん？あぁ……茉莉ちゃんのこと？」
「は、はい……お知り合いなんですか？」
そう、昨日から疑問だったんだけどなんで茉莉ちゃんはフジ先輩の

電話番号を知ってたんだろう？
「彼女はたまに配達のバイトでトレセン学園に来ていてね、寮の方にも配達で顔を出すことがあるから、その時に。それに確か誰かがバイト仲間だとも言っていたかな？」
「そ、そうなんですか……」
「……ふふ、気になるのかい？」
「え、いえ……んぅ……どうなんでしょう？」
「あはは！それを私に聞かれてもねぇ？」
その後スペちゃんやスペちゃんから話を聞いてあちこち探してくれていたチームの皆にも謝って、私のプチ行方不明事件は幕を閉じた。
その後フジ先輩に頼んで連絡先を教えてもらった私は改めてあの日の事のお礼を伝え、それからは歳の近い友人として過ごすようになった。
私が海外に改めて挑戦することを伝えればとても喜んでくれて、帰国したらこっそり会いに行って驚かそうかと思っていたんだけど……まさか街中で会うなんて思わなかったなぁ。
靴屋さんでランニング用のシューズをあれこれ探していたようだったから、私が以前使っていたメーカーの靴を勧めてみると、茉莉ちゃんの予算で買えるみたいなのでそれに決めていた。
でも、いつか一緒にランニングしましょうね？って誘ったんだけど……なんだか微妙な顔をされたのだけど、なんでかしら……風にあたるの、苦手なのかしら？

…　ｓｉｄｅ：サイレンススズカ　ｅｎｄ

～＊～＊～＊～

思わぬ出会いがあった私はスズカさんと一緒にお買い物なんていう某ウマ娘オタクさん昇天グッパイ来世で会おうぜ！な展開に浮かれつつ、お勧めされたシューズを買うことに決めました。

買ったのは白と若草色のランニングシューズ、もちろんウマ娘用だからよほど無茶な走りしない限り長く使える特別仕様です。
早速お会計をして、ついでだからとランニングウェアも新調した私はスズカさんと別れ、ルンルン気分で自宅に戻りました。
とりあえずウェアをハンガーにかけてその下に靴を並べて写真をパシャリ、ウマッターに載せると早速ウマいね！がついていく。
「さてと……そういえばあのプロテインどんな味なんだろ？」
パッケージにはバニラ味って書いてあるけど……試しに作ってみますか！
早速箱を開けると作り方を書いた紙と袋にパンパンに詰まった粉、それからメーカーのロゴが入ったシェーカー、これで作って飲むってことなのかな？
まずはシェーカーにお水をいれる、好みで豆乳や牛乳でもいいらしいけれど今回はとりあえずミネラルウォーターで作ろっと。
最後に付属されてるスプーンでキッチリ量を計って入れる、あとは……ひたすらシェイク！
「ふふふ、まさかこんなところで私のバーテンの技術が試されるなんて……ね」
といっても興味が湧いてネットでシェーカーの振り方調べてたら、同じマンションに元バーテンのおじいさんがいたからちょっと教わった程度の話なんだけどね。
無心でシェーカーを振り続けて程よく混ざったところで今回はコップに移す、シェーカーから直に飲めるみたいだけど混ざり具合が判りづらいからね。
「それじゃ、いただきまーす！……ん、んまあああ！」
なにこれ、めっちゃ美味しいじゃん！まったりしてるのかと思ったけどさらさらしてて飲みやすい！
「バニラの香りもそれほどキツくないし……これなら牛乳とかで作ったら美味しいかも！」
こんなに美味しいのなら運動した後もゴクゴクですわー！これを楽しみにできるなら毎日ランニング頑張れそう！

そんなこんなでなぜだか始まった私のランニングは思いのほかやる気に満ち溢れ、次第に走る距離も速さも増していった。
なるほど、確かに肌を撫でる風は心地よい……これはスズカさんの言葉もあながち戯言と切り捨てることもできないのでは？
トレーニング後には美味しいプロテイン！運動後ということもあってとっても美味しい！さらに牛乳や豆乳で作るとまた違った味が楽しめてすばらしいじゃないですか！これは、さっそく雑談放送で皆にお勧めしないといけませんね！

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶ ▶ ▬ ・ライブ

チャット〉

『雑談配信：もう不健康なんて言わせないんだから！』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる
チャンネル登録
チャンネル登録者数　７．６万人

「こんまいや～。セカンドライフ３期生のシルトマイヤーです」
コメント：こんまいやー！
コメント：こんまいや～
コメント：こんまいやー!!
コメント：っよ！紺舞屋！
コメント：っよ！紺舞屋!!
コメント：っよ！
コメント：こんまいやー！
コメント：っよ！
コメント：っよっよ!!
「いやぁこんな時間に配信するのっていつぶりだろ、まだお外が明るいよ～」
コメント：確かに
コメント：マイヤーちゃんのお声を夕方聞くとか久しぶり
コメント：深夜配信しか知らない教官もおるやろな
コメント：ここにいるぜ！
コメント：逆に新鮮に感じます
「あはは……実はマネさんにもあまり不規則な生活と配信はやめるように言われてたんだぁ……」
コメント：あぁ……
コメント：マネさん有能

コメント：マネージャーから苦言が入るレベル
コメント：そらセカライだからなぁ
「でもね、これからはまた規則正しくしていくからね！さらに運動なんかもしちゃうもんね！」
コメント：運動？
コメント：お？
コメント：レースに出るの？
「いやいや、レースには出ないけど……ほら、案件で貰ってた食品の中にプロテインがあったでしょ？それを飲むならいっそのことランニングくらいはしようかな～って」
コメント：なるほど
コメント：セカライで運動できそうなのマイヤーちゃんだけだもんな
コメント：フィジカルつよつよ勢
コメント：マイヤーちゃん以外だと誰よ？
コメント：同期なら夕の木の二人も体力だけはあるぞ？
コメント：1期は群雲くらい？2期は……お察しだな
コメント：ウマ娘であることを差し引いても動けるの実質マイヤーちゃんだけ説
コメント：リン○フィットが流行った時は阿鼻叫喚だったからな
コメント：まさかあれで葵ちゃんの連日配信記録が途絶えることになるとは……
コメント：他のライバーも軒並み筋肉痛で配信休んでたからなぁ
コメント：セカライ伝説の沈黙の一週間
「まぁ皆配信で忙しいからねぇ……でもやっぱり運動は良いね！案件でもらったプロテインもすっごく美味しいからゴクゴク飲めちゃうし、体を動かすとご飯も美味しいし！」
コメント：それは良かった
コメント：マイヤーちゃんが健康に近づいているようで何より
コメント：ん、ご飯？
日本一のウマ娘：同じプロテイン試してみたけど確かに美味しかっ

たです！
コメント：ウマ娘用だから量には気を付けるんやで？
日本一のウマ娘：私ウマ娘ですよ!?
「私からもおすすめだよ！運動した後の一杯とか格別だからね！最近はすっかり運動するのが楽しくてさ、美味しいプロテインとご飯のおかげだね！」
コメント：おや？
コメント：あれ……これ……
コメント：マイヤーちゃんそれただの飲み物ちゃうぞ？
コメント：もしかして……
コメント：あ
コメント：おいおい
コメント：こいつ……
「ん？みんなどうしたの？」
コメント：パッケージよくみて！
コメント：今度からは説明書もよく読もうな……
コメント：いやいやウマ娘の燃費ならワンチャン……
コメント：そう思うなら最近のマイヤーちゃんのウマッター見てみ
コメント：あ……ふーん
コメント：パッケージ裏側の右下の適切な飲み方をよく読もう
「え～なになに？パッケージの裏？」
手元にあるパッケージを手に取ってよく見る……どこにもおかしいところなんて……あれ、あれれ？
「……」
コメント：お、止まったか？
コメント：ＴＭＴ
コメント：いや、これはマイヤーちゃんが固まっただけかな？
コメント：気が付いてしまったか……己の過ちに
コメント：まぁ、美味しいからね、仕方ないよね
コメント：もちもちマイヤーちゃん
「……ッス――――みんな、ちょっと……まっててね」

私はヘッドセットを急いで外して洗面台に向かい……洗面台の横に置いている体重計の前に立つ。
いやいやそんな……まさかまさかぁ……そりゃ確かに？最近ちょぉ〜〜〜…………っと顔がふっくらしたといいますか？運動して規則正しい生活だから血行が良くなって色つや毛艶がよくなったのかなぁ〜なんて？
まさかねぇ……そんな、あるわけが……。

ツピ！

《ｆｏｎｔ：ｕ８７》「ミャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?」《／ｆｏｎｔ》

日本一のウマ娘：あれ、これってご飯の代わりに飲むものでした？
コメント：無制限にごはんパクパクしちゃったか……

＃０４　いいじゃない、ウマ娘だもの　　しるとまいやー
いやよくないが？

＃05

その日、アタシは一人で古巣であるチームカノープスの練習に顔を出していた。
本当はターボとタンホイザも来たがっていたんだけどさ、ターボが来月の大阪のレース、タンホイザは3週間後の中山のレースに出場するということもあり、二人には大人しくそれぞれ調整をするようにと言い含めてきたわ。
もっとも、ターボは最後まで行きたい行きたい！と駄々をこねていたんだけどね……。
「おぉ～！やっぱりG1を走るような娘達は皆キラキラしてるね～」
トゥインクルシリーズを引退して、その後はおふくろのお店でも手伝おうかと考えていたネイチャさんだったけど、ターボやタンホイザ、イクノ達からの説得もあってドリームトロフィーでもうしばらく走ることを決めていた。
まぁ？未だ勝敗数では大きく負けてるあの不屈の帝王様もいますし？今度こそは勝ちたいなぁ……なんて、トレセン学園に入ったばかりの頃には考えもしなかった想いを抱いていたりもするのだが……それを本人に言うと絶対「ネイチャ勝負だー！」って突っ込んできそうだから絶対言わないけどね。
「貴女も、そんなキラキラしたウマ娘の一人だったじゃないですか？」
「あらら、ネイチャさんはそこまでじゃないですよ～……久しぶり～トレーナーさん」
「ええ、お待ちしていましたよナイスネイチャさん」
トレーニングを眺めていたアタシに声をかけてきたのはカノープスのトレーナーである南坂さん、私のいた頃は「妥当スピカ！（ターボが字を間違えたんだけど、結局皆気に入ってそのままスローガンになってた）」を掲げていたのに、今じゃすっかりトレセン学園を代表する強豪チームの一つになるまで育て上げた名トレーナーだ。
もっともトレーニングの時以外何をしているのか未だに謎で一時

期は「トレセン学園七不思議」にもなったくらい謎が多いトレーナーでもある。
「ターボさんやタンホイザさんはよく顔を出していますよ、ありがたい事です」
「あはは……アタシはレース以外にも休みの日はおふくろのお店の手伝いもあるからねー」
「ふふ、後輩たちも寂しがってますから、暇があったら顔を出してあげてください」
「おやおや、そんな寂しがりは～……お前たちかぁ!!」
　背後にある用具室の陰からこっちを覗いていた数名のウマ娘の方を向くと「きゃー!」とか「わー!」とか言いながらグラウンドのほうに戻っていった。
「まったく、強豪とは思えない緩さは今も変わらないねぇ～」
「あはは……面目ない」
「……でも、なんだか久しぶりに帰ってきたって気がしたわ。トレーナーさん!」
「なんです?」
「久々に走るから、タイム計測よろしく!」
「……えぇ、任せてください。後輩たちにもいい刺激になるでしょう」
　そう言ってほほ笑むトレーナーは、やっぱりちょっと何を考えているのか読めなかった。
　その後は後輩たちとの併走や走り方のアドバイスを自分なりに行った後、一緒に食事をとか遊びにとかあれこれ引き留めにかかる後輩たちをぶっちぎって帰路に就いた。
「いやぁー慕われるのは嬉しいんだけどねぇ……今日は外せない用事があるんですよね～」
　うきうきと家に帰るとルームシェアしているタンホイザはターボとトレーニングに出ているらしく、隣室でターボとルームシェアしているイクノから帰りは遅くなると伝言を受け取った。
　ネイチャは荷物をベッドに投げていそいそとパソコンを立ち上げる、実家でおふくろが経理で使っていたお古のノートＰＣだが目的の

ためなら十分なスペックがある。
「ん～、いっそゲームもできるＰＣにすれば一緒に……いやいや、それはないか」
　なんとなしな思い付きに苦笑いしつつ立ち上がりを待つ、時計を見れば時間は開始１０分前。
「おっと、もうだいぶ待機してますねー」
　お気に入りから指定したページに飛び、そこに表示されているアイコンをクリックすれば、自分と同じ目的で同じようにＰＣや携帯端末の前で待機している人たちがいた。
「え～っと……待機、間に合った……と」
　自分もその列に加わったことをチャットに打ち込めば、同じように待っていた人たちから反応が返ってくる、こういうちょっとしたやり取りがあると一体感が感じられていいんですよね～。
「お、そろそろかな？」
『皆～こんまいや～。セカンドライフ３期生のシルトマイヤーです』
「こんまいやー！」
　モニターに映った可愛いウマ娘の挨拶に私も返す、もちろんそれに反応なんてするわけがないのだけど、アタシはすることにしている……一度実家に帰った際は部屋でこっそり見てたのに、呼びに来たおふくろが急に部屋に入ってきて……見られたときはめっちゃくちゃ変な目で見られたわ。
「いやぁ……やっぱりマイヤーちゃんはキラキラしてて可愛いなぁ」
　でへへ、とあまり人様に見せられないような顔で笑うけどここは自室だから問題ない。
『今日は雑談枠ということで、近々あるドリームトロフィリーグの予選レースについて皆とお話ししていくよ！』
　マイヤーちゃんの発言で一気にコメントが加速する、それを慣れた様子で眺めながら適度にコメントを拾っては返す様子に、随分と様になったなぁなんてちょっと後方腕組気分。
　思えばアタシが初めて彼女を見たときは、流れるコメントの量も今よりもずっと少なかったけど、流れてくるコメントに右往左往して

たっけ……。

～＊～＊～＊～

当時の、トレセン学園に入ったばかりのアタシは、ありていに言えばあまり褒められたウマ娘ではなかった。

選抜レースに出てもよくて3着、まるで3着を取り続ける呪いかなんかがあるのかと、一時期本気で考えて神社やご利益のあるパワースポットを巡るくらいには軽いノイローゼになっていた。

周りでは誰が勝っただの、誰がチームに入っただの、そんな話題ばっかり。

もちろんそれが正常で当たり前、アタシみたいに勝手に僻んで落ち込む方がどうかしてる……そう思っても、耳も尻尾も立ち上がる元気が私には無かった。

「あぁ～ぁ……まぁ、所詮この辺りがネイチャさんの限界なんですかねー……」

なんとなく周りと話も合わなくなって、自然と一人になる時間が増えていったアタシはただ漫然とトレーニングと選抜レースを繰り返す毎日を送っていた。友人付き合いは途絶えることはなかったけれど、でもどこか空虚な感じがしていた。

そのうち地元や近所の商店街の人たちからの応援にも答えづらくなって、最近じゃ避けてばっかり。

このままで良いのかという諦めたくない思いと、このくらいが分相応なんだと諦める思いでアタシの心がギシギシと音を立てて歪んでいく。

そんな心から目をそらし、耳をふさいでアタシは所詮こんなものだったんだ～……って逃げるばかりの毎日。

いっそどうにでもなれと思って、初めて学校までサボって近くの土手でぼんやりとしていたある日、なんと気なしにウマホでウマチューブを開いたその瞬間。

ただの偶然に過ぎないのだろう、でも……それでもやっぱりこうい

うのが運命なのだと、アタシは思う。
「ばーちゃる……うまむすめ？」
聞き覚えのない単語、サムネールには見覚えのないウマ娘の女の子……そりゃそうか、その女の子は作り物の絵なんだから。
普段だったらきっと笑って見ずに終わるだけ、それよりももっと面白いチャンネルの配信がいっぱいあるし、興味がある動画だってたくさんある。
でも、その時アタシはなにも考えずにその配信を見に行った……別に何かあった訳じゃない、本当にただの気まぐれだった。
『あーあー……あ、配信乗ってる？えっと……こ、こんにちは！あ、いや……は、はじめまして～』
どうやらこの配信が初めての配信らしく、画面では挙動不審気味な女の子が喋っていた。
『きょ、今日から……セカンドライフの３期生としてデビューしましゅ……ッス――――しま、す……シルトマイヤーと言います』
喋りはボロボロ、目線も定まっていないようであっちを見たりこっちを見たり。バーチャルウマチューバーを知らないアタシでも苦笑いを浮かべてしまうくらいその配信は酷かった。
『わ、私は、その……えっと、こ……これから、レースにいっぱい出るためにトレーニングしてるんですけど、やっぱりファンとの交流も大事かなぁ……なんて、思ってですね』
しどろもどろになりながらも自己紹介する彼女に、コメントで色々な人がアドバイスを送ったり、茶々を入れたりしている。
『……ふぇ？ウマ娘のフリが痛々しい……？違うもん！私ウマ娘だもん！み、耳だってほら！動くんですから！』
「……ちょっと、ふふ……必死すぎでしょ」
必死に否定しようと耳をピコピコと動かして見せる姿が滑稽で思わず笑ってしまった。コメントも数は少ないけどその反応を面白がってさらに茶化す。
『もー！本当にウマ娘なんです！ちょっとまってて！』
そう言うとなにやらごそごそと何かを動かす音がしたと思ったら

突然画面が真っ暗になって、次に映ったのはどこかのオフィスの様な場所、それとドアップになったウマ娘の頭部。
『ほら、見てください！立派なウマ娘の耳でしょ!?』
そして先ほどから喋っていた少女の声が聞こえてきた……って、この娘何してるの!?
『ふふーん、これでわかったでしょ？私がウマ娘だって……あれ、マネージャーさん？え、あの……あ』
そこでやっと自分がしたことを理解したのか慌ててカメラから姿を消し、それと同時に画面が静止画になり音声も途切れた。
それから5分くらい時間が経過してまた画面が先ほどの少女が映る画面に戻った。
『え～……ッス――――え～、先ほどは、その……取り乱してしまい大変申し訳ございませんでした』
この5分で何があったのかは判らないけど、声からでも耳としっぽが萎れているのが感じられる様子に、コメントの方もさすがに悪乗りが過ぎたと謝りだす始末。
その後は終始静かなまま予定されていた時間になったことで配信が終了した。
「あはは、もう……可笑しい……はぁ」
結局最後まで配信を見ていたアタシは彼女のチャンネルの登録とウマッターのフォローを済ませた。
あれだけ色あせて見えていた世界が、ほんの少しだけ色づいて見えた気がした。

それからの日常は、今までと変わらないトレーニングと選抜レースの日々だったけど、その中に少しだけ違う時間が増えるようになった。
どんなにトレーニングが辛くても、レース結果が芳しくなくても、不思議とマイヤーちゃんの配信を見るだけで元気が湧いてきた。
まぁある日のゲームの実況配信で、最近発売されたアタシ達ウマ娘のぱかプチがカートに乗ってレースをするゲームをやった時があっ

たんだけどさ。
　その時使うキャラにナイスネイチャが選ばれた時は嬉しいやら恥ずかしいやらで思わず布団の中で悶えちゃって、あとでマーベラスに何かあったのかと珍しくまともに心配された時は大変だったけどね。
「ネイチャ、なんか最近いいことあった？」
「……どしたのテイオー？」
　お昼ご飯を食べながらウマホでマイヤーちゃんのウマッターを眺めていると、向かい側の席にテイオーがお昼ご飯をもって座ってきた。
「なーんか怪しい」
「えー？別に、なにも無いって」
「最近よくウマホ見てる」
「そりゃウマホくらい見るでしょ？」
「むぅ……それになんか楽しそう」
「なに？日々つまらなそうにしてるよりいいでしょ？」
「そりゃそーだけどぉ……」
「変なテイオー」
　何となくテイオーに知られるのが嫌でアタシはさっさとご飯を食べて教室に戻った。
　その後教官からのトレーニングメニューをこなして急いで寮に戻ったアタシは同室のマーベラスに気を使ってイヤホンをつけてマイヤーちゃんの配信を見る。
　その頃には配信でコメントを打つようになっていたアタシはいつも通りコメントで挨拶した。
　万年3着：こんばんは～
『あ、万年3着さんこんばんは～、また配信に来てくれてありがとう』
　早速コメントを読まれて思わず顔がにやける、それをクッションで隠しながら配信を見続けた。
　その日はマシュマロっていう匿名でお便りを送れるツールを利用した配信で、アタシのような視聴者（この配信では教官役って呼ばれてる）が送ってくれたお便りを読み上げる配信だった。

『それじゃ次のマシュマロ、〈最近ご飯が美味しくね？　それな〉勝手に一人で完結しないでくれない？』
「っぷ、くく……」
『次……〈最近クソマロ代筆の相場が低いです、何とかしてください〉
　知らんがな、しかも代筆なの？』
「ふふ……そりゃ知らないわ」
『次……〈カラス　何故なくの　それは鳥という生体において命題というもので〉長い長いあと興味ないし』
「あはは……」
『は～もう……君らクソマロ送り過ぎでしょ？知ってる？同期の中で私のマシュマロ数ダントツなんだよ？』
「流石だねぇ」
『あぁ～……もう、次で最後にします。ランダムピックの最後は……あぁ』
　そこで軽快にマシュマロを捌いていたマイヤーちゃんの手が止まった。
『ん～、まぁ……出ちゃったし、この機会にいいか』
　そう言って画面に張り出されたマシュマロを見て、アタシは背筋がっすぅっと寒くなるのを感じた。
『最近多いんだよね、こういうの……私がウマ娘だからかな……』
　画面に表示されたのは短い文章。

〈レースで全然勝てません、もうレースに出るのも辛いです、どうすればいいでしょうか〉

『まぁその……せっかくの機会だし今後こういうのが増えないために一度しっかりとお答えしておきますね、申し訳ないけど次同じような

ものが来ても取り上げないと思うから、ごめんね？』
「……」
『それで、そう……ウマ娘にとってレースってさ、やっぱ憧れじゃない？走る皆がキラキラしててさ』
　そうだね、皆主人公みたいにキラキラ輝いてて……アタシも子供の頃におふくろにレース場につれていってもらってたっけ。
『だからさ、私もトレセン学園を受験したんだけど、見事に不合格で……一緒に受験していた人たちを見てさ、身の程を知ったって言うかさ』
　うん、そうだよ……アタシの周りも凄い娘ばっかりだ、アタシみたいなモブと違ってキラキラ輝く……主人公がたくさんいる。
『だからさ……その、そう言う風に思っちゃうのもわかるんだ。どうしたって周りがすごく見える事って一杯あると思うし』
　そうなのかな……今アタシが思ってること……他の誰かも感じてるのかな？
『う～ん……そのね、だったら辞めればって話になるかもだけどさ……そう言うときはちょっと、自分の胸に手を当ててみてほしいんだ』
　胸に、手を？
『そして、じっと自分の心の中を覗いてみてさ……探してみてほしい』
　探す……何を？
『もしそこに、燻る何かが……レースに勝ちたいでも良い、誰かに勝ちたいでも良い、三冠でもレコードでもなんでも……もし、それがあるのなら……それを全力で燃やしてみなよ』
　燻る何か……そんなもの、アタシになんて。
『中学の頃の私には、もうそんな燻る何かも無かったからさ……全部がどうでもよくなって斜に構えて……所詮私はこの程度だったんだぁって勝手に限界決めつけて……必死に応援してくれた家族の事も見ないようにして』
　どうでも……いい……本当に、そうなのかな？アタシは……地元や商店街の皆を……テイオーやクラスの皆も……。

『そうだね……あぁ……そっか、私……悔しかったんだ。レース結果じゃなくて……そうやって勝手に決めつけて諦める自分にも、斜に構えて見ないフリする自分にも……』

悔しい……あぁ、そうだね。悔しいよ……アタシも悔しい。

『家族の応援にも答えられない自分が何より悔しくて、惨めで……そして怖かったんだと思う、いつか応援してくれてる家族の皆が私に失望するんじゃないのかって……そう思っちゃったから、足が前に出なくなっちゃったんだと思うんだ』

わかるよ、その怖さ……みっともないとか似合わないとか、勝手に自分を蔑んで予防線はって……小さな子供みたいに縮こまってさ。

今のアタシに絶望したくなかったし、応援してくれた皆に失望してほしくなくて……。

『だからさ、その……私が言えた義理じゃないかもだけど、このマシュマロをくれた誰かも一度ちゃんと考えてみてほしいんだ。自分の心のなかに何があるのかを、後悔する前に』

アタシの心にあるもの……アタシの気持ち、アタシの理由。

『……って、あぁもう！私なに一人で語ってるの!?もう恥ずかしいなぁ……まぁほら！ドロップアウトした私だけどさ、こうしてバーチャルウマ娘として皆の前に立ってるし、まだ始まったばっかりだけど……こうして皆と一緒の時間を楽しめてる。今を選んだ自分に後悔なんてしてないよ……だって皆の応援が今の私の心にある頑張る理由なんだから!!……ってまた恥ずかしい事言っちゃってるぅ!?』

「ふ、ふふ……あはは」

気がつけばアタシは笑っていた、その声に同室のマーベラスがこちらを見る。

「あれ、どーしたのネイチャ？」

「え？」

「泣きながら笑うなんてきよーだねっ☆」

「え、あ……」

「なになに？そんなに泣ける動画でもあった？あれ？でも笑ってるし……んぅ～～なんかわかんないけど、それはきっととってもマーベラ

スなんだねっ☆」
「……あはは、もう……マーベラスったら……」
恥ずかしくなってうつむいて涙をぬぐう、そういえばこんな風に泣いたのいつ以来かな……？
そうだ、アタシは悔しくて……怖かったんだ。勝てない自分に絶望したくなかった、そんな自分を応援し続けてくれる皆に失望されたくなかった。
心を守るために斜に構えて勝手に限界決めつけて、諦めてたアタシをそれでも見限らずに居てくれたテイオーやマーベラス、クラスの皆に答えられない自分が何よりも悔しくて……それを知られるのが怖かったんだ。
「……ふふ、でもよかった！」
「え？」
マーベラスの声に顔を上げるとどこかホッとした顔のマーベラス。
「最近のネイチャは楽しそうだけど、どこか元気の無い目をしてたよ……でも、今のネイチャは私が出会った頃のネイチャとおんなじ目をしてる、それってきっとすっごくマーベラス☆★」
「……っぷ、あはは！もう……だから、それじゃ意味がよくわからないって」
「えー？マーベラス★マーーーベラァス☆★」
「いやいや、ほんと……マジで意味わかんないですわー、あは……あはは！」

アタシの胸に燻るなにか、アタシが走る理由。まだ立ち直ったなんていえないけれど、マイヤーちゃんの言葉で今の自分ときちんと向き合えたような気がした。
それからのアタシはたぶん他の人たちから見ても今までと違って見えたかもれない。
アタシ自身世界が違って見えるし、今まで散々走って知っていたはずのターフがずっと広く感じられる。
我ながら現金なもんだと呆れるけれど、今のアタシにそんな暇なん

て無いし許されない。
散々周りの期待から斜に構えて目を背けてきたんだから、これからはちゃんと胸を張って答えられるようになりたい。
地元や商店街のおっちゃんおばちゃん達、マーベラスやクラスの皆、それに……。
「最近良い感じだねーネイチャ！」
グラウンドでトレーニング前のストレッチをしているとテイオーが近づいてきた。
「そう？」
「うん、タイムも良くなってきたからスカウトも注目し始めてるってトレーナーが言ってたよ？」
「そっか……てか、テイオーってトレーナーいたっけ？」
「んーん、いないよ？最近よく話してるトレーナーさんが言ってた」
「いやいや……どういう状況よ？」
「まーまー、それよりトレーニング前のアップ一緒にやろうよ！」
「はいはい……ねえ、テイオー」
「んーなに？」
「……ありがと」
「んぇ？どういう事？ボク何かしたっけ？」
「……ふふ、なんでもないよ、ただ言ってみただけ！ほらさっさと行くよ！」
「あ、待ってよネイチャ！もう……変なネイチャ」
とまぁ、そんな前向きになれたアタシだったけどその後の結果はお察しの通りで……選抜レースに出ても3着に入るのが関の山、やっぱしなんか呪いか何かがあるのかね？もしくは運命みたいな？
それでも拾う神もなんとやら、どういうわけかアタシをスカウトしたいだなんて言う稀有な物好きが現れたわけで……その後みっちり積んだトレーニングの成果も結局3位で担当である南坂トレーナーと一緒に悔しがって。
そんなアタシたちがチームを立ち上げるって話しになって、あれこれ勧誘したりポスター作ったり……最初はうまく行かなかったし、体

験で入ってくれた娘も結局別のチームに入っちゃったりして。
　でも、そのうちアタシも結果を出せるようになって……気がつけばマチカネタンホイザがチーム部屋に居座ってそのままチームに入ったり、トレーナーに確認もとらずにターボが勝手にチームに入ったりでさ……あれ、まともにチームに入ったのってイクノだけなんじゃ……？
　賑やかな毎日だったトゥインクルシリーズを終えて、もういいかと実家に帰ろうとしていたアタシをターボが泣きながらしがみついて止めるし、タンホイザとイクノも珍しく萎れてる始末だし、しまいにはチームに入ってきた後輩連中まで説得に現れるもんだから……さすがのネイチャさんもこれには降参だったわ。
　そうして今はトレセン学園に在籍したままドリームトロフィリーグに参加して、新しく入学する後輩たちのために寮を出たら何故か一緒にくっついて来た3人とあれこれ物件を探して、これまた何故だか颯爽と現れた南坂さんの薦めで見つけたマンションにルームシェアしながら住んでいるわけで。
　アタシは別に一人でもよかったんだけど、まぁ……寮も二人部屋でしたし？ターボとかが寂しがるかなぁとか……レースに関しては万全なのに私生活が意外とズボラなイクノも心配だし、てかタンホイザなんて気がつけばなにかしらぶつかって鼻血出してるし……。
『なので、次の予選レースで大注目はやっぱりツインターボさんだね！今回は参加を見送ったナイスネイチャさんとイクノディクタスさんは残念だったけど、マチカネタンホイザさんのレースも注目度高いですよ皆さん！』
「いやぁ……ほんとよく見てるねぇ。アタシらなんて注目度低いでしょうに」
　とはいえ、推しに注目されているというのも悪い気分はしないもので、配信を見終わったアタシは気分上々に軽く走るかと棚から最近買ったランニング用のシューズを取り出した。白と若草色のランニングシューズは有名なメーカーの品のわりにはお値段リーズナブルな新商品。

……別に、推しが買っていたから自分も買ったとかそういうわけじゃない、決してない……でもこれがお店にあった最後の1足だったのはまぁ……うん。

合鍵はタンホイザが持ってるはずだからとしっかり施錠して家を出ると、ちょうど隣のイクノもトレーニングウェア姿で出てくるとこだった。

「あれ、イクノ？」

「おや、ネイチャもトレーニングですか？」

「ん～まぁね。イクノも？」

「はい、昨年の調整不足を踏まえ、今年は1年じっくりと構えるつもりですので」

「あはは、それでも入着してるんだからたいしたもんだけどね……それじゃ軽く走ろっか」

「はい」

二人でマンションを出る、思えばこのマンションも中々絶妙な立地だなぁ……駅にはほどほどの近さで周りにはウマ娘御用達の業務用スーパーと大きな商店街があるし、軽く運動するなら外周がジョギングコースになってる公園があるし、なんならジムや坂路代わりにできそうなトレッキングのコースまであるなど至れり尽くせりだ。

唯一の難点でいえばトレセン学園がかなり遠いってところかな？いやウマ娘の足なら……いやいや無理だわ、こんな距離走るのなんてステイヤーかスズカさんくらいだわ。

まぁそんな立地だからこのあたりにトレセン学園生は住んでなくて見かけるのはそれ以外の一般ウマ娘くらい、そういえば……最近たまに見かけるウマ娘がアタシと同じランニングシューズ履いてたな……あの娘も教官役かなぁ？

「どうしました、ネイチャ？」

「あ、いや……あはは、なんでもないよ」

「そうですか、では公園まで軽く流しましょう」

「おっけー」

そう答えて走り出した私たちの後ろで、同じ白と若草色のシューズ

を履いた少女が自転車に乗った女性に追いたてられながら慌てて逆方向に走ってった。

#05　人は人知れず誰かを救っているもので

＃06

ウマチューバーとして活動していても、それだけで生活が成り立つほどの収入となるかと言えばそうでもありません。

生活できるレベルのヒトなんてトップ層の中でも極わずか、ほとんどのウマチューバーは本業が別にあったり、バイトを別にしていたりというのがほとんどです。

私の場合グッズやスパチャの取り分はしっかり貰ってはいますが、ウマ娘ですからね……食費がですね……その、普通のヒトよりはどうしてもかかってしまうと言いますか……。

一応心配してくれている両親からの仕送りもあるにはあるのですが、それには手を付けずにバイトをするようにしています、もしもの時の貯金はしっかりとしておきたいですからね。

将来についてはまだ特になにか考えがあるわけじゃないですけど、何があっても良いようにしっかりしていかないと！

「よし、今日も一日頑張ります！」

そんな気合十分な私が今いるのは住んでいるアパートからほど近い場所にある一軒家を改装して作られた喫茶店の前。

近所では美味しいコーヒーと静かなひと時を過ごせると評判で、マスターさんはとてもかっこいいお爺さんです。

店の雰囲気やマスターさんの落ち着いた佇まいは私のクソ雑魚ナメクジな人見知りさえも落ち着かせてくれるようで……最初こそあれこれやらかしてしまいましたが、今では立派な店員さんが出来ています。

なんでも昔はウマ娘のお嬢さんが住んでおられるお屋敷に勤めておられたとか……かっこいい執事さんだったんだろうなぁ。

ここだけの話、実はそんなマスターさんを目当てに通っておられる奥様方やＯＬさん、あと近所の女子高生さんもいらっしゃるのを私は知っています……さすがです、マスターさん！

さて、今の時間はまだ朝の７時。

営業時間は8時から19時までで、シフトは調整可能で朝からお昼過ぎまでとかお昼から閉店までとかその時々で相談させてもらっています。
今日は夕方過ぎに配信をする予定ですので、お昼を過ぎて少ししてからあがらせてもらう予定です。
早速店内に入るとマスターさんがキッチンで準備をしていましたのであいさつしました。
「おはようございます！」
「おや、おはようございます茉莉さん。まだ開店までは時間がありますよ？」
「あ、いや……あはは、なんだか早く起きちゃって」
「そうですか……ではこちらに、コーヒーでもお淹れしましょう」
「あ、ありがとうございます！じゃ、じゃぁ着替えてきますね！」
私はキッチンの奥にある休憩室に入ってロッカーからお店の制服を取り出した。
制服と言っても白いワイシャツと黒のスラックス、あと深い緑色のハーフエプロンとなっています。
鏡で身だしなみを確認して休憩室から出ると、コーヒーの香りが漂ってきました。
「ふわぁ……いい香りですぅ」
「ふふ、もう出来上がりますよ？」
「は、はい！」
キッチンの隅にある従業員が休む用の小さい椅子に座って待っていると、マスターさんがじっくりとドリップして淹れてくれたコーヒーを持ってきてくれました。
「さぁ、どうぞ？」
「ありがとうございます！ふわぁ……やっぱりマスターさんの淹れるコーヒーは良い香りですね」
「はっはっは、ウマ娘の茉莉さんにそう言っていただけるのなら何よりですね」
「いえいえ、味もすっごく美味しいですし……はぁ、至福ですぅ」

「ふふふ、お客さんが入られるまでまだ時間もあります、ゆっくりと召し上がっていてください」
「は、はい！」
　私はマスターさんの淹れてくれた美味しいコーヒーを飲みながらのんびりと店内を見渡します。
　窓から差し込む朝日に照らされた店内は落ち着いた趣で、使われてる家具もとても上品で日々の手入れがしっかりと行き届いているのが見ただけでわかります。
　席はカウンターに１０席と二人掛けのテーブルが４つですが、私がバイトを始めるまではカウンターのみだったそうで……マスターさんお一人でやってきたのでそのくらいが丁度良かったそうです。
　お店に来た人からは「このお店に来ると時を忘れてしまう」と言われるくらい静かで穏やかで、のんびりと寛ぐことが出来るお店です。
　そこでふと、前にバイトで入った時には見かけなかった物があったのでマスターさんに聞いてみました。
「マスターさん、その鉢植えって……前はありませんでしたよね？」
「あぁ、これですか……知り合いの方から贈り物で頂きましてね、オリーブの鉢植えですよ」
「オリーブ……って、あの、オイルとかの？」
「ええ、これは鉢植えの幼木ですね……オリーブの花言葉には平和や知恵の他に安らぎというものもあり、これは商売繁盛を願う贈り物として頂いたものですよ」
「ほえぇ……安らぎ、このお店にぴったりですね」
「ええ、お客様にそう思って頂けているのなら本望ですね」
「きっと皆そう思ってますよ！私が保証します！」
「ふふ、それは頼もしいですね……では、そろそろ準備を始めましょうか？」
「はい！今日も一日よろしくお願いします！」
　飲み終わったカップを片付けてから布巾でテーブルを拭いたりお店の前の掃除をしていると、午前中から近所の奥さまやモーニング目当てのサラリーマンの方々がお店にやってきます。

「マスターさん、モーニング二つとブレンド一つ、あとチーズケーキ一つです」
「かしこまりました」
　マスターさんはキッチンで料理を作り、私はホールで注文を取ったり出来上がった料理を配膳していきます。
　バイトを始めた当初はもたついたり注文を間違えたりとやらかしてばっかりでしたが、どの方にも温かく見守っていただき今では立派にホールを任せていただけるくらいにはなりました。
「っよ！茉莉ちゃんは今日も可愛いね！」
「え、あ……えっと、ありがとうございます」
「かー！その奥ゆかしさ！うちの娘にも見習わせたいくらいだよ」
「あ、あはは……えっと、ご注文は？」
「あぁ、いつものね！」
「かしこまりました。マスターさんモーニングをブレンドで、あとゆで卵です」
「わかりました、それと常連だからと言ってうちの看板娘を困らせないでくださいね？」
「かかか、看板むしゅめぇ……ふえぇ」
「はっはっは！困らせているのはマスターもじゃないか？」
「おやおや、そうでしたか？」
「うぅぅぅ～……マスターさぁん！」
「はっはっは！茉莉さん、奥からたまごとサラダを取ってきてください」
「もぅ……わかりましたぁ」
　私は真っ赤な顔をお盆で隠しながら奥にある冷蔵庫にたまごとサラダを取りに行きました。
　マスターさんも常連さんもすっごく良い人なんですけど……たまにこうして私をからかってくるのはちょっと困ると言いますか……うぅ。
「は、恥ずかしぃ……」
　もう冷蔵庫に顔を突っ込んで冷やしたい衝動に駆られますが、ここ

は我慢我慢……そんな奇行に走ればまたからかわれるのは目に見えてます、私だって成長してるんですから！

～＊～＊～＊～

ｓｉｄｅ：マスター

私は府中の住宅街の隅で小さな喫茶店を経営するしがないマスターです。

元々はウマ娘のお嬢様の住んでおられる、さるお方のお屋敷で執事をしておりましたが寄る年波と申しましょうか……ちょうど後任の育成も終わっておりましたので、旦那様に申し出てお暇を貰った次第でございます。

その後は貯金と退職金を使い一軒家を買い取り、趣味と実益を兼ねてこうして喫茶店に改装して営んでおります。

店は幸いにも近所で評判となり、今ではモーニングを求めるお客様や静かなひと時を楽しむお客様で順調に繁盛しております。

そんな私とウマ娘の少女、立華茉莉さんとの出会いはそう……喫茶店の経営が軌道に乗り、一人でホールと調理を兼任するのに苦労するようになったころでしたか。

「あのぉ……その」

「はい？」

お店の奥、勝手口から声が聞こえて来てみれば帽子を目深にかぶったウマ娘の少女が荷物を抱えて店内を覗いていました。

ずっと店内に居たせいか気がつきませんでしたが、どうやら少々雨が降ってきていたらしくその少女の耳と尻尾もしっとりと濡れておりました。

「その、えっと……お、遅く……なってしまって、ご……申し訳、ありません……でした」

「あぁ、配達の方でしたか」

老いた私一人で切り盛りしているため、食材などはいつも商店街に

あるスーパーから配達で届けてもらうようにしていました。本来でしたら自分で出向いて商品をその目で確かめるべきなのでしょうが……いやはや、よる年波には勝てませんね。
「配達ご苦労様です……おや、いつもの方ではなかったのですね」
「あ、はい……えっと、担当のヒトが、その……お休みで」
「そうでしたか、何はともあれありがとうございます……おや？」
　私は荷物を受けると、そこでその少女の右ひざに擦りむいたような傷があるのに気が付きました。よくよく見れば着ている配達業者の上着も泥で汚れたりなどしている様子。
「ケガをしていますね」
「あ!!その!?……だ、大丈夫ですから！」
「いけません！ウマ娘の足というのはとても繊細なものです、ちょっとのケガも見過ごしてはいけません！」
「っひぅ!?」
「……失礼、そうですね……こちらにどうぞ、治療いたしましょう」
「え、あ……いえいえ!?そんな悪いですから……」
「まぁまぁ、そうおっしゃらず」
　私は遠慮する少女の肩を押して店内に入れると休憩室の椅子に座らせました、少々強引だったかもしれませんが……かつてウマ娘のお世話を任されていた身として、眼前でケガをしている少女を見過ごすわけにはまいりません。
　遠慮がちに椅子に座る少女の前に救急箱を置いて消毒液と絆創膏を取り出し、手当てを始めます。
「しみますよ」
「は、はい……ふぎゅ!?」
「はっはっは！少し我慢してくださいね」
「は、はいぃぃぃ……」
　消毒液で丹念に消毒して、絆創膏を貼って差し上げました。
　さすがに年若い少女ですので無遠慮に触るわけにはまいりませんが、見る限り足の状態は問題ないようなので……きっとどこかでぶつけてしまったのでしょう。

「はい、もういいですよ」
「あ、ありがとう……ございます」
「いえ……ふむ、そうですね。少々お待ちいただけますか？」
「え、はい……？」
　私は少々不用心かとも思いましたが、あの様子の少女が物を持ち出すとも思えなかったのでその場に少女を待たせてキッチンへと向かいました。
　それから作り置きのコーヒーを小鍋に移してミルクを注ぎ……少し温めに温めてから角砂糖とリンゴの花を使ったはちみつを1さじ、それからカップに注いで極少量のシナモンを加えた物を持って戻りました。
「こちらをどうぞ、温まりますよ？」
「え、いえ!?そんな悪いです!?」
「大丈夫ですよ、それにこれはあなたに淹れたものですから……飲んでいただけなければ私も困ってしまいます」
「えぅ……あ、うぅ……じゃ、じゃぁ……いただきます」
　そう言っておずおずとカップを受け取った少女は一口飲むと、よほど美味しかったのかこくこくと飲み始めた。
「……あふぅ」
　あっという間に飲み干してしまったカップを見てちょっと残念そうにため息を漏らす様子に、私は満足しながらも少し懐かしい思い出が頭をよぎりました。
　思えば、お嬢様が上手く行かずに落ち込んでいる時もこうしてカフェオレを淹れて差し上げていましたね。
「ふふ、お粗末様でした」
「あ!?その……ご、ごごごちそうさまでした！とっても美味しかったでしゅ！」
「いえいえ……元気が出たようで何よりです」
「……ほぇ？」
「いえ……少し、元気がなかったご様子。何があったかはわかりませんが……今の貴女のように落ち込んでいたお嬢様にもよくそれを淹

れて差し上げていたものです」
「あ、えっと……お嬢様、ですか？」
「ええ。今はこうして小さな喫茶店の店主をしておりますが、以前はさるお方のお屋敷に勤めておりました。そこに住むお嬢様もウマ娘でしたが……お嬢様も今貴女に淹れて差し上げたカフェオレがお気に入りだったご様子でした」
「えと、その……なんだか、わかる気がします。カフェオレ……すごく美味しかったですし、なんだか……元気も出てきました」
「そうですか、それはなによりです」
「……えと、その……ケガの手当て……ありがとうございました」
「いえいえ、老婆心故の事。世話好きなおじいさんのお節介とでも思っていただければ」
「いえ、そんな！……あ、えっと……あ、ありがとうございました。私……そろそろ戻ります」
「ええ、今度はぜひお客様としていらしてください」
「は、はい！」
そう返事をした少女は、配達に来た時よりも耳も尻尾も元気になっていました。
そんな少女が次に店を訪ねてきたのはそれから数日たっての事でした。
開店前にお店の前の掃除をしていると、ジャージを着た少女がこちらに走って来るのが見えました。
「あ、あの！マスターさん！」
「おや、貴女は……そう、確か配達をしていただいた」
「は、はい……その、あの……」
「どうかしましたか？お店は８時からの開店ですので」
「こ、ここ……ここで働かせてくだしゃい！」
「……おや」
話を聞いてみると、どうやら喫茶店の常連客の一人に彼女のアパートの住人が居たらしくその方から私のお店を勧められたそうで。
そういえばつい最近もお店の忙しさにそろそろ人を雇うべきかと

常連客の何人かと話をしていましたね。
話を聞くとどうやら先日の配達のバイトは辞めてきたとのこと、とりあえず開店前のお店に案内してカウンターに座らせた私は、彼女から受け取った履歴書に目を通しました。
学歴や経歴で決めるようなお店ではありませんでしたが……ウマ娘を雇うとなると、色々と気を付けなければならない点が多いのも事実です。
一般男性と比べてもその力の強さは言うに及ばず、ウマ娘さんの中には力の制御が苦手な方もいると聞き及んでおります。
このお店は私の趣味で集めた海外のアンティーク家具などを置いておりますので……とはいえ、老いた身一つで喫茶店を営むのも中々骨の折れるもの。
部屋の模様替えなどは常連客の皆様方のご厚意でお手伝いをいただくこともありますが、それ以外にはなかなか手が回らないことも多いのが現状です。
それに……目の前で不安そうに尻尾を振る少女、立華茉莉さんでしたか……彼女が粗暴な方に見えるかと言われれば、答えは否。
どうやら、私はお屋敷を辞した今でもなにかとウマ娘さんとご縁があるようですね。
「そうですね……」
「あああ、あの！お皿洗いでも、外の掃除でもなんでもしますから！」
「ふむ……いつから入れますか？」
「なんでしたら買い物でもなんでも……ほえ？」
「シフトです、見たところ通信制の学校に通っているご様子ですし……そうですね、しばらくは週1か2で入っていただくのがよろしいかと」
「あ、あのぉ……いいんですか？」
「ええ、ですが……一つだけお聞かせ願いますかな？」
「あ、はい！その……ど、どうぞ！」
「ええ、では……なぜ、この喫茶店に？」
この辺りには他にも飲食店もそれなりにありますし、若いお嬢さん

ならもっと似合いのバイト先もあることでしょう……それなのに、彼女はこんな老いぼれが営む喫茶店を選んだ。
　純粋にその理由に興味が湧きました、履歴書に震える文字で書かれているありきたりな言葉ではなく、この少女自身の言葉として聞いてみたくなりました。
「あ、えっと……そのぉ」
「どんな理由でも構いませんよ？」
「えと、その……お、美味しかった、から……」
「美味しかった？それは……あの時のカフェオレがでしょうか？」
「は、はい！私……その、ウマ娘ですけど、レースとか全然で……今は高校通いながらバイトして生活してて……でも、バイトでも失敗ばっかりで、その……配達のバイトもほんとはクビに……なっちゃって」
「それは……」
「あの日が最後で……でも、あの日も荷物持ったまま転んじゃって……その、お客さんに迷惑かけてばっかりで」
　少女にとっては苦い思い出なのでしょう、耳も尻尾も萎れてしまい今にも泣きだしそうになっていました。
「それで、これからどうしようって思ってたら……その、マスターさんの美味しいカフェオレに出会って……ダメダメな私なんかのために淹れてくれて……それが、凄く美味しくて……元気が湧くみたいで、だから……私も、そんなお店で働けたら……私も、誰かに元気をあげられるようになるかな……って」
　すんすんと鼻をすすりながら語る少女を見ながら、その姿が在りし日のお嬢様にどこか似ているように見えました。
　あぁ、この少女もきっと誰かのために一生懸命になれる、そんな素敵な少女なのだと思えました。
「あの、すみません……こんな、話……」
「……いいえ、とても立派で素敵な理由です。あのカフェオレが貴女のことも元気にしてあげられていたのなら、それは喫茶店を営む者としても、とても喜ばしい事です」
「あ、えっと……はい」

「では、採用ということで……そうですね、制服の用意もありますから来週の月曜日にまたいらしてください」
「は、はい！あの……よよ、よろしくお願いしましゅ!!」
「ふふ……よろしくお願いしますね、茉莉さん」
それからは、ただ静かなだけだったこの喫茶店に少しずつ色がついていくようでした。
茉莉さんも中々慣れない仕事に四苦八苦し、ホールという仕事に右往左往することもありましたがこの店を訪れる客は皆様開店当初からの常連客ばかりですので、どなたも温かい目で見守っていただけました。
私自身も日々の仕事の中で徐々に常連客のあしらいにも慣れて、立派にホールを任せられるようになっていった姿には孫娘の成長に似た喜びを覚えたものです。
老いた私の代わりに買い物や掃除も率先して受け持ってくれていますから、今では新しいメニューや珈琲豆の配合などの時間も増え、それがまたお客様にご好評を頂けております。
さらに彼女が勤め始めた頃から、どうやら彼女目当てで店に足を運んでくださるお客様もちらほらと現れているようで……もっとも茉莉さんが働き始めてしばらくたった頃に、当時はまだ制服が白のシャツにややタイトなスカートだったためか、少々よからぬ目を向ける輩がいた時は己の至らぬ点を痛感させられたものです。
「まったく、茉莉ちゃんはほんといい娘ねぇ」
「あはは、ありがとうございます」
「ほんと、うちの息子の嫁にこない？」
「よよよ嫁ぇ!?」
「あらあら、それならうちの子なんてどう？都内で立派に公務員を務めてるんだけど」
「あ、あぅあぅあぅあぅぅぅぅ」
「あらもう顔を真っ赤にしちゃって！」
「こんな娘が息子の嫁になってくれたらいいのにねぇ」
「ふ、ふぇぇぇ～～……」

「……ふぅ」
とはいえまだまだ茉莉さんも年若い乙女、日頃井戸端会議で鍛え上げられた百戦錬磨の奥様方の前では形無しといったところでしょうか？
妙なおせっかいを焼きたがる常連客をコーヒーのおかわりと日替わりのケーキを出して黙らせ、その後はいつも通り静かで落ち着いた時間が続いた後。
「それじゃマスターさん、お疲れ様でした」
「はい、お疲れ様でした。次もよろしくお願いしますね」
「はい！あ、あと賄いもありがとうございました！マスターさんのホットサンド楽しみです！」
「ええ、お家でゆっくりと召し上がってください」
今日は夕方から用事があるとのことで、賄いにといつも用意しているホットサンドを持って帰る彼女を見送ってから私は店に戻りました。
一人になった店内は、昔と変わらず静かで落ち着いていて……ですが最近少し物足りなくも感じてしまうあたり、私もすっかり彼女に絆されてしまったようですね。
そんな自分の変化を楽しみながら閉店までの時間を過ごしていると、珍しく夕方に一人お客様がいらっしゃいました。
「いらっしゃいませ……おや」
「やぁ……爺や、久しぶりだな」
「ええ……いらっしゃいませ、ルナお嬢様」
「ルナ……はよしてくれ……」
そう言って照れた様子でカウンターに座るのは私が以前勤めていたお屋敷に住んでおられたウマ娘のお嬢様。
シンボリ家にてその名を轟かせる最強の皇帝シンボリルドルフ、もっとも私からすれば今も昔も悪戯好きで使用人を連れまわしては困らせていたルナお嬢様ですが。
「本日もお一人で？」
たまにルナお嬢様の話に出てくるトウカイテイオー様でしたか？

楽しそうにその少女の事を語るルナお嬢様はとても生き生きとしていらっしゃいます。
私としましても、そんな少女をこの店に迎えるのもまた老後を生きるひとつの楽しみなのですが……いやはや、まだ難しいようですな。
「……私だって、たまには一人でゆっくりと……爺やの淹れてくれるカフェオレを楽しみたいと思う時もあるさ」
「さようでございますか……では、準備いたしましょう。たっぷりの角砂糖とリンゴのはちみつもご用意してありますよ？」
「やれやれ……爺やにとっては私はまだまだ子供らしい」
「ふふふ、ええ。今も昔も私にとっては少々悪戯好きでやんちゃなルナお嬢様ですよ」
「まったく……」
どうやら少しからかい過ぎてしまったのでしょうね、そっぽを向かれてしまいました。
さて……本日はこれにて閉店のようですね、私も久しぶりの再会を喜ぶと致しましょう。

ｓｉｄｅ：マスター　ｅｎｄ…

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶ ▶ ━　　・ライブ

チャット＼

『雑談配信：賄いホットサンドうまぁ』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる

チャンネル登録

チャンネル登録者数　７．９万人

「ほあぁぁぁぁ～～……おいしゅういいい～……」

コメント：唐突な飯テロ乙

コメント：ウマッターで告知があったからむしろ予告飯テロなのでは？

コメント：おかしい、簡単な説明であとはただマイヤーちゃんの食レポ未満を聞いているだけなのに

コメント：いま、俺の口は猛烈にホットサンドを欲している!!

コメント：俺もなにか作ってくるかなぁ……

「んんんうぅぅぅ〜〜……いいよぉ、みぃんなも〜なにか〜たべればいいよぉ〜……」
コメント：やだこの娘すっかり脳みそとろけてる……
コメント：こいつ、ホットサンドキメてやがる
コメント：それだけ旨いホットサンドなんやろな
コメント：どこのホットサンド？
コメント：マイヤーちゃんのバイト先の賄いって言ってた
コメント：その喫茶店気になる！
コメント：さすがに身バレするからアウトやろ
「んぅぅぅ〜〜……んぐ。ほんとこの美味しさを皆に紹介できないのが残念だよ〜」
コメント：そんなに美味しいの？
コメント：ホットサンドって出来立てが美味しいイメージ
「そんなことないよ！いい？厚切りにされたふっわふわのパンに、炒めたハムと玉ねぎピーマンそしてチーズ！さらに半熟目玉焼きが入っていて、極めつけはお店オリジナルのデミグラスミートソース！複雑で濃厚な味わいがひとつに解け合ったそれをホットサンドメーカーでしっかりプレスしながら焼き上げてあるんだよ！外はカリカリなかはふっくらジューシー！ソースは冷めても美味しく食べられるように調整されてる絶妙な塩加減！もうね……一口食べてみなよ、飛ぶよ？」
コメント：お、おう……
コメント：特有の早口やめてもろて
コメント：お腹空いてきた
コメント：久々のメシテロ配信たすかる
コメント：でもお腹空きすぎて夕飯食ったのにまた食いたくなるからたすからない
コメント：こうしてまた一人の教官が肥えていくのであった……もとからだって？そりゃ失敬
コメント：おうだれがデブや？
コメント：俺がデブや

コメント：俺もデブや
コメント：みんなデブやないかーい
コメント：ここまでが一連の流れ
「はふぅ……しぃあわしぇぇぇ～……わたし、ライバー引退したらあのお店に就職しゅるぅ」
コメント：あかん、この子
コメント：帰ってきてマイヤーちゃーん!?
コメント：まぁ、推しが幸せなのは良いこと……か？
コメント：南無三

＃０７　安らぎと幸せ
それが居場所を彩る

#07

ライバーたるもの体が資本です、そしてその体をしっかりと鍛えていかなる配信でも案件でも万全に対応するために維持するのも立派な仕事です。

そんなわけで今日はボイストレーニングを受けに事務所のレッスンルームまで来ています。

まだ3Dのアバターを持っていないので先輩たちのようにダンストレーニングなどはしていませんが、歌動画を出しているのでボイストレーニングを定期的に2～3日の期間で受けています。

「あ～♪あ～♪あぁ～♪」

「……うん、さすが筋がいいわね」

「えへへ、ありがとうございます」

一応ウマ娘として恥ずかしくないくらいにはライブの練習とかもしていましたからね、一人暮らしを始める前は妹と一緒に録画のライブ映像を見たり、庭で妹と一緒にマネをしたり……。

お母さんとお父さんを観客に見立てて二人で歌った事もありました、まだ私が競技シーンを目指していたころですけど。

「マイヤーさんは歌も上手いし、他のトレーナーも気になってるのよ？」

「え、そうなんですか？」

「ええ、教えたことは素直に吸収してくれるし教え甲斐がありそうだって」

「あ、あはは……」

なんだか凄いことになってますね……でも、昔から頑張ってきたことでこうして評価されると嬉しいものですね。

「声も綺麗だし発声も素直で伸びがあって……まさに歌うために生まれた喉をもってるわ、羨ましい限りね……ほんと、ウマ娘ってすごいわ」

「あ、はは……どうなんでしょうね？」

ウマ娘として……私は本当に凄いんでしょうか？そりゃヒトと比べれば私は足も速いし歌も踊りも上手いかもしれませんけど……トレセン学園に通うようなウマ娘なら、私なんかよりももっと上手に出来るんじゃ……。

「もって生まれたものは変える事も捨てる事も出来ない物よ？ヒトもウマ娘もそう、それを活かすも殺すも自分次第……マイヤーさんは自分の良さをちゃんと伸ばせているわ、自信を持ちなさい」

「は、はい！」

「はぁ……マイヤーさんみたいな素直さが他の子にもあればいいのだけど……それじゃ今日はこれくらいにしましょうか。喉のケアは忘れないようにね？」

「は、はい！ありがとうございました」

「そういえばマイヤーさんは近々新しいボイスの収録ね、がんばって」

「はい、頑張ります！」

片付けと掃除をするトレーナーさんに見送られて私も更衣室で着替えて事務所を出ました。

今日はボイトレ以外に用事もないので、このまま家に帰ってもいいのですが……。

「……お腹、すきましたね」

いっぱい声も出しましたし、それ以外にも声を出すのに必要な筋力のトレーニングなどもしましたからね。

時間もお昼時を少し過ぎたところ、お家に帰ってご飯も良いですがこの空腹を我慢して帰るのもちょっと……なので、今日は近場でご飯を食べて帰りましょう。

そう決めた私は早速事務所の最寄りの駅前まで来ました。

この駅前はほどほどの飲食店が軒を連ねていて、商店街というにはやや物足りなくかといって住宅街と言えるほどでもない雰囲気がかえってホッとします。

その中にある小料理屋が今回の目的地です。

小料理屋あずささん、このお店は私以外にもセカンドライフのライバー達やクルセラの社員さん達御用達のお店で、お昼はボリューム満

点！栄養満点！それでいてお値段手ごろ～な定食メニューがずらりと並び、夜は美味しいお酒とおつまみが疲れた社会人を癒す憩いの場なのです。
　そして女将さんは美人で気立ての良いウマ娘さんで近所では中々評判のお店です。
　聞いた話ではうちの社長さんとは長い付き合いなんだとか……どういうご関係なんでしょうね？
「こんにちは～」
「あらぁ～いらっしゃ～い」
　ゆったりと間延びした挨拶に和みながらカウンターの一番奥の席に座ります、こういう時って無性にお店の奥の席にひっそりと座りたくなりません？
　時間がお昼時を少し過ぎただけとはいえ今日は休日ということでお店に他のお客さんはいませんね、今だけはお店と女将さんを独り占めです！
「今日はどうしますかぁ～？」
「えっと……ん～」
　このお店のランチメニューはかなり豊富でお肉・お魚だけじゃなく野菜中心のメニューもありますし、ご飯も麺物のある充実ぶりです、むむむ……いつもの事ながら悩みますねぇ
　置いてあるメニューを見ながらあーでもない、こーでもないと悩んでいるとお店の扉がガラリと開きました。
「女将さーん、また来たで！」
「こんにちは」
「あらぁ、タマモちゃんにオグリちゃんもいらっしゃ～い」
「……ふへ？」
　女将さんからの思いもよらない言葉に顔を上げると、なんとそこにいるのはレジェンドウマ娘さんであるオグリキャップさんとタマモクロスさんじゃないですか!?ななななんで!?
「いやぁオグリに美味い店があるいうて連れてこられてからすっかり女将さんの味にハマってもーたわ！」

「うむ、ここのご飯はすごく美味しい。毎日食べたいくらいだからぜひ学園のカフェに来てもらいたいくらいだ」
「あらあら、ありがとうねぇ～？でもぉ、私はお店が有るからぁ～」
「せやでオグリ？あんま無理言ったらあかん！それに女将さんとこのお店があってこそ美味しくなるんやろうが」
「うむ、すまない……女将さん、今日も美味しい料理を楽しませてもらうよ」
「うふふ、それじゃぁ腕によりをかけて作るわねぇ～。そういえばクリークちゃんは今日は一緒じゃないのぉ？」
「あぁ、クリークの奴は再来週のレースに向けて追い込み中やからな、今日はお留守番や」
「あらあら、それじゃ今度応援にいかなきゃねぇ～」
「うん、そうしてくれるとクリークも喜ぶ」
「それじゃ、注文が決まったら呼んでねぇ～？」
　席に着いたお二人は早速メニュー片手にあれでもないこれでもないと言っていますが……まさかオグリさんもこのお店の常連さんなんですか？タマモさんも？え？この感じだとクリークさんもいらっしゃるんです!?え……？
「茉莉ちゃんは決まったかしら？」
「……っは!?ももも、もう少し……」
「うふふ、落ち着いて決まったら声をかけてねぇ～？」
「は、はいぃ……」
　ダメですダメです！今日は私もご飯を食べに来たんですから、レジェンドなお二人に気を取られている場合ではありません！
　ランチメニューの書いてあるお品書きを手に取ってっと……むむむ、今日の日替わりランチはサバの味噌煮定食ですか……むぅ、美味しいですが今の空腹にはもっとがっつりといきたいですね。
「女将さーん！うちは日替わりに野菜の煮っ転がし、あと～メンチカツ一つや！」
「ふむ……私はかつ丼セットをギガ盛で」
「おいオグリ、自分も来月のドリームトロフィーの予選に出るんやろ

？大丈夫なんか……そんなに食べて？」
「む？これくらい大丈夫だ……ちゃんと調整している」
「ほんまかぁ？予選当日になって太り気味で調子が出ませんでした～なんて言い訳は聞かんで？」
「っふ、そうならないようトレーニングはしっかりするつもりさ、タマこそ栄養不足でスパートできなかったなんて言うんじゃないぞ？」
「あほか、どんだけ昔の話しとるんや……まったく、女将さん！こっちご飯だけギガ盛りでいっちょ頼むわ！」
　お、お二人ともギガ……メガ盛のさらに上のギガ盛ですか……うぅ、さすがの私でもギガ盛はむりぃ……っは？いけませんいけません、またあっちに気が……えっと、ランチセット……それとも単品詰め合わせ……ううむ、よし！
「あ、あの」
「は～い？」
「えっと、唐揚げ定食でお野菜たっぷりお味噌汁に変更でお願いします」
「はい、では少々お待ちくださ～い」
　無事に注文は済みました、女将さんの料理はどれもお勧めですがその中でも唐揚げも絶品です。
　丁寧に二度揚げされた唐揚げは外はカリカリ中はジューシー！噛めば零れ落ちそうなくらいの肉汁があふれ出る素晴らしい出来栄えなんですよ！
　女将さん秘伝のタレに付け込まれたお肉は中までしっかり味がしみ込んでいて何個食べても飽きないですし……あぁ、もうよだれが止まりましぇん！
　カウンターの向こう側ではタマモさんとオグリさんのご飯が調理されていますね……あ、メンチカツ美味しそう……うぅ、やっぱりサバ味噌も鉄板ですよねぇ！あの香り、そしてじっくり煮込まれてるのが見ただけでわかる照り！うぅ……他の人のご飯ってどうしてあんなに美味しそうに見えるんでしょう？
「は～い、日替わりランチご飯ギガ盛りとメンチカツに煮っ転がし、そ

れと……よいしょ」
　どどん！とオグリさんの前に置かれたメガ盛のかつ丼セット……
いやいや多すぎですって!?
　すでにかつ丼が丼じゃない!?真っ白な山盛りご飯におせちとかが入ってそうなお重にぎっしりと詰まったカツとじ煮ってどういうことなんです!?
　あとセットメニューのうどん……もうおわんとかそういうのじゃなくて土鍋って……ええ？
「もぐもぐ……あんなオグリ……ほんまに大丈夫なんか？」
「む？これくらいは大丈夫だ」
「あ、そう……ん？どうしたんや姉ちゃん？」
「はひ!?」
「ん、どうかしたかタマ？」
「いやな、そっちの姉ちゃんがこっちをじ～っと……あぁ」
　そこで何かに納得したように腕を組んで頷くタマモさん、なんかすっごいドヤ顔なんですが……ほっぺたにご飯粒ついてますよ？
「あれやろ？オグリの飯の量に驚いたんやろ？わかるでわかるでぇ～……普段見慣れてるウチでも呆れる量やからなぁ」
「そうだろうか？タマも同じくらいご飯の量はあるだろ」
「ウチはご飯だけや！ええかげん自覚せえよ、ほんま……堪忍な姉ちゃん！ウチらの事は気にせんと旨い飯食ってってくれや！」
「そうだな、ここのご飯はどれも美味しいからな。女将さんご飯おかわりだ」
「せやろせやろ……ってもう食ったんか!?」
　嘘でしょ？タマモさんが喋ってる間にいつの間にかお茶碗山盛りだったご飯がなくなってる。
「あらあらぁ～今日は一段と食べるわねぇ……おひつで持ってきた方がいいかしらぁ？」
「女将さんもオグリを甘やかしたらあかんって……」
　さ、さすがはレジェンド級のウマ娘であるオグリキャップさんです……わ、私じゃあんなに食べられません！きっとその丈夫な胃袋が強

靭な肉体を作り上げているんですね……！
「はい、茉莉ちゃん。唐揚げ定食よぉ～」
「あ、ありがとうございます」
お二人の食事にあっけに取られているうちに私のご飯も出来上がったみたいですね。
からっとこんがりきつね色に揚がった唐揚げ、薄い衣に閉じ込められた鶏肉から漂う芳醇な香り！もうこれだけでご飯食べられちゃいそうです。
さっそく一口……カリッとした歯ごたえに柔らかく仕上げられたお肉！噛めば零れ落ちそうな肉汁とつけダレの旨味！
「んぅ！……ほふ、あふっほふ！」
これはもう白いご飯がもりもり進んじゃう奴ぅ！箸休めには職人技で細く切りそろえられた千切りキャベツ、シャキシャキでありながらどこかふんわりと仕上げられていて次の唐揚げを食べる前に口の中をリセットしてくれます。
「ずず……むふぅ」
お野菜たっぷりお味噌汁はその名前に恥じることのないくらい具沢山なお味噌汁です。
人参に白菜大根それにごぼうやレンコン小松菜とお野菜一杯具だくさんで、ちょっぴり濃い目の赤味噌の汁に野菜の旨味が溶けだして、もうこれだけでもご飯が食べられちゃうくらい美味しいんですよ！
「はむ……ずずずぅ……ほふぅ」
小鉢に入ったお漬物を挟みつつ次の唐揚げは味変タイムですね！まずはキャベツと一緒にお皿に添えられたマヨネーズ、禁断のマヨトリですよ～……うん、マヨネーズのコクがさらに唐揚げを美味しくしつつも酸味がそれを脇から支えて……はぁ、美味しいですぅ～。
そして、もう一つはレモン！古今東西ありとあらゆる場で議論される唐揚げにレモンかけてもいいですか？問題ですが、私はまったく新しい回答があるんです！
まずは小皿にレモンを絞り、そこにたっぷりと黒コショウを入れる

んですよ！唐揚げをそこにちょちょっとつけて食べる！
「……んふぅ」
　香ばしい唐揚げとレモンのさわやかな酸味、そして黒コショウのぴりっとした刺激が合わさってもうたまりません！ご飯がもりもりと進んじゃいます！
　さらにマヨネーズを付けた唐揚げに七味唐辛子をちょちょっと……マヨ七味唐揚げとかもう最高です、世界で初めてマヨネーズと七味を合わせる事を考えた方に私は感謝します、これは美味しいです！
「あ、女将さん！こっちご飯のおかわりと～あと焼きそば一つや！」
「それとカレーライスを頼む」
「まだ食うんか!?」
「タマもだろう？それとギガ盛で頼む」
「は～い、ご飯のおかわりと焼きそば、カレーライスギガ盛りねぇ～？タマモちゃんもギガ盛かしら？」
「いや、ウチはさすがに普通でええわ……」
　凄い……オグリさんほどじゃないけどタマモさんも日替わりメガ盛をぺろりと平らげたのにご飯と焼きそばを頼むなんて……あれ、主食と主食じゃないんですかそれ？
「はい、焼きそばお待ちどう様ぁ。タマモちゃんは濃い目の味付けがよかったわよねぇ～？」
「おう！女将さんの焼きそばはほんまに美味いからなぁ！これをこう……ご飯にのせて～一緒にかっこむ！……ん～んまい！いくらでも飯が入ってまうわ！やっぱ〆はこれに限るで！」
「うふふ、本場の人に喜んでもらえて嬉しいわぁ」
「この味は大阪のおばちゃんでもそうそうでーへん味や！女将さんはほんまに料理が上手いで！」
「うむ、この味は見事なものだな」
「せやろせやろ～……ってオグリ!?ウチの焼きそば食うなや!!」
　はへぇ～焼きそばをおかずに……そういえば関西の人は焼きそばやお好み焼き、たこ焼きもおかずだって言っていた気がしますし、考えても見れば焼きそばパンも主食と主食ですね……ううむ、あれも美

味しそうです……。
「んうぅぅ……女将さん！」
「は～い、どうしたの茉莉ちゃん？」
「えっとやき……う……あ、うぅ……小ライスとハムカツください」
「は～い」
　危ない危ない……思わず私も焼きそばを頼むところでした、さすがに一人前を食べる余裕は私にはありませんからね！お残しは許されないのです。
　女将さんに注文してお味噌汁でほっと一息ついた私はさて残りを……と考えた時にふと気が付きました。
　あれ、私追加注文しちゃったけど……焼きそばとかそういう以前に食べ過ぎでは？
　脳裏ににこやかに笑顔を浮かべながらも目だけが笑っていないマネさんの顔が浮かびました……あわわ、ち……違うんですマネさん！ほら、美味しそうに誰かが食べてるのを見るとついつい食べちゃうって事あるじゃないですかぁ!?
「はい、ハムカツとご飯のおかわりよ～」
「あ、ありがとうございます」
　受け取ったお皿を目の前に……うん、こんなに美味しそうな物を食べないなんておかしいですよね？うんうん大丈夫大丈夫、今日はいっぱいトレーニングしましたから結果プラマイゼロですカロリーゼロなんです。
　さて、出てきたハムカツは薄くて衣がしっかりとついた昔馴染みというやつらしいです。こういうのは遠慮がちじゃなくどばっとソースをかけてかぶりつくのが私流。
「はむ……んぅ～」
　衣の香ばしさと濃厚な自家製ソースが合わさって口の中が幸せですぅ……ハムは香ばしい衣に包まれつつもしっかりと存在を主張していてサクサクと食べる口が止まりません！
　ここで付け合わせの中にあるトマト、これをハムカツの上に乗せて、ちょっとお行儀が悪いですけど箸で崩してしまいます。

そこにソースと黒コショウをたっぷりとまぶして～っと……。
「んぅ……んふぅ～」
ハムカツの香ばしさにソースと黒コショウの刺激、そして酸っぱくてさわやかなトマトの酸味が合わさって素晴らしいです！揚げ物でしつこくなってしまった口に新たな新鮮さが飛び込んできました！
よぉし！この調子で残りも一気に食べちゃいましょう！唐揚げ唐揚げハムカツハムカツ……んぅ～香ばしい揚げ物の２大共演でおかわりした分まで残さず食べちゃいました。
「はぁ……ごちそうさまでした」
「ふふ、お粗末様でしたぁ」
「えへへ……美味しかったです！」
「それはよかったわぁ。またいつでもいらっしゃ～い？」
「はい、また来ます！」
今日も美味しいご飯が食べられました……さて、家に帰って明日の配信の準備をしましょうか。

～＊～＊～＊～

Ｓｉｄｅ：女将さん

時間は夜も更けてもうそろそろ日付が変わる頃。
窓から見える商店街というにはいささか寂しい駅前は帰宅する人もちらりほらりといる程度で、既に他のお店は店を閉めているのか外を歩く人の足取りは早い。
そんな中で暖簾を下ろした店内にいるのは昔馴染みの友人たちだけ、勝手知ったる店内で好きなお酒を片手に語らっているわね。
「それで、茉莉の方は？」
「順調にトレーニングできていますよ、さすがはウマ娘ですね……吸収が早くて理解度も高いですから教えていて楽しいくらいですよ」
「トレーナーがそこまで言うなら安泰だ」
「とはいえ、そろそろ私専属っていうのも難しいですね……他のト

レーナーから独り占めするなって怒られました、どうしますか社長？」
「まぁ……仕方ないわ、ウマ娘の扱いは難しいから」
「まぁそうなんですよね……それにしても、いきなり社長がスカウトしてきた時は驚きましたけど……あんな娘をどこで見つけてきたんですか？」
「それはまぁ……こう、偶然見かけてティンと来たってだけよ」
とぼけた様子でお酒の入ったコップを傾けているけれど……あらあら、誤魔化そうったってそうはいかないわよぉ？
「うふふ、あの娘に頼まれたのよねぇ？」
「梓！」
「あの娘？」
「……あ～まぁ……テスに頼まれたんだよ、一度でいいから見てくれって」
「テス……って、もしかしてノーザンテーストさんにですか!?」
トレーナーさんが驚いて大声を出す。
ノーザンテースト……それは私たちがまだ学園にいた頃に共に過ごしたもう一人の大事な友人。
当時は留学から戻って学園に所属しながら理事長の後継となるために勉強していたけれど……今ではその夢の通り学園を束ねる存在になっているのよねぇ。
「そうよぉ～？この娘が一人でここで飲んでいる時に来て、頭まで下げてたんだから」
「へぇ……あの娘が」
「うふふ、あの娘も茉莉さんのこれからを心配してたみたいだからぁ」
「トレセン学園を受験したことは聞いてましたけど……そうだったんですね」
「口を開けば喧嘩ばかりしていたのにねぇ？」
「……うっさいな、あいつが一々こっちがすることに口出ししてきたからだろ」
「もぅ、それは貴女がルールを破っていたからでしょぉ？」

「あはは……それじゃ、あの娘が茉莉さんをうちに紹介してくれたんですね？」
「ちーがーう、私はただあいつの話を聞いただけだ。採用出来たのは私の手柄だ。何が「教職者としてこの才能を埋もれさせることこそが恥」だよ……まったく、名前だけ教えられて探したこっちの苦労も考えてほしい」
　ふふ、よっぽどその苦労を根に持っているのねぇ……でも、それくらい必死になって探していたみたいだし……きっとこのひねくれ者の友人の事だから採用の経緯も適当に誤魔化しているんでしょうし。
「でも、見つけられてよかったわねぇ……ウマ娘が生きるにはまだまだ辛い世界だから」
「まぁ、な……トレーナーも知ってるだろうけど、ウマ娘が生きるには今の社会はまだまだ難しい事ばかりだ」
「そうですね……」
「茉莉だけじゃない……学園を辞めていった娘達は外の世界に適合するために必死になってる。もちろんウマ娘が必要とされる場所はある、けどそのどれもがレースの世界で活躍しているウマ娘が基準だ。そこに満たない娘もいるっていうのに……」
「そうねぇ……世間のウマ娘の基準はやっぱりレースに出ているウマ娘だから……私は貴女に料理の道もあるって教えてもらえたけど、それが見つからない娘もいっぱいいるわ」
　そう、私が料理の道に進んで今ではこうして立派なお店を持てるまでになれたのはこの友人のおかげなのだ。
　当時レースに出ても勝つことが出来ず、デビューすら出来ないまま所属していたチームから脱退勧告を受けた私は途方に暮れてしまっていたわ。
　レースで活躍できると楽観していたわけじゃなかったのよ、必死に練習したしチームの先輩に教えを受けたことも一度や二度じゃないわ。
　それでも……私には1位の座は遠かったわ、遠すぎた……だからチームを抜けるしかなかったのよねぇ。

諦めずに地方に行く道もあったけれど、当時の私はもうレースに向き合えるだけの気持ちがなくなってしまっていたわ。
だから荷物を纏めて学園を去ろうとしていたのだけど……そんな私の前に立ったのはこのひねくれ者で学園のルールを破っては方々から叱られてばかりの友人だったわ。
部屋に来るなり飯を作れだなんてどういうつもりかと驚いたし怒ったりもしたのだけれど。
それでも友人として付き合う中で何度もご飯を作ってあげていたこともあったし……最後の機会と思って料理を作ってあげたのよ。
それをこの友人は美味しそうに食べて、気にしていた他の娘達にもわけたりして……気が付けば寮の食堂の皆が私の料理を食べて……笑顔でお礼を言ってくれた。
その中には私のチームメイトだった先輩や同期もいたし、後輩の娘なんてお茶碗片手に泣き出したりなんかして……。
それを見てあっけにとられた私にこの友人は言ってくれた。
『お前の料理はこれだけ皆の心を動かせる、ならその道を目指せばいい』
そう言われて、今までどこか色あせていた世界が綺麗に見えた気がしたわ……あぁ、あの先輩はこんな良い笑顔をしていたんだ、同期達はこんなに美味しそうに食べてくれてたんだ、後輩たちはこんなにも私と私の作る料理を好きでいてくれたんだ……って。
だから私は料理の道を進むことを決めた、もちろん周囲の目はあったけれど……それを跳ね飛ばす勇気と元気を私はあの食堂でもらっていたから頑張れた。
「茉莉みたいにレースじゃない別の世界で輝ける娘も居るんだ……レースの結果だけに縛られないで、もっと大切なことに気づかせてやりたいんだ、私は……」
「社長……だから、会社を作ったんですもんね」
「あの娘には梓や私とも違う魅力がある。でもそれはレースの世界じゃ決して輝けない……そんなの勿体ないしつまらないじゃないか……だから茉莉が……いいや、うちにいるライバー含めた社員全員が

お天道様の下を俯かずに、前を向いて歩いて行ける場所を作りたいんだよ。世間のものさしなんかじゃなく自分自身の事を胸張って行けるように……」
「社長……」
「レースの世界にはテスが居る、あいつは一々うるさいけど……まぁ、ウマ娘の事を真剣に考えられる奴だ、だから……そこから零れ落ちた分を私が引き受ける……なんて、まだまだ小さいクルセラじゃ言えたセリフじゃないけれどさ……あぁ～ぁ、なんか語り過ぎた、ちょっとお手洗い行ってくる」
「はぁ～い……ふふ、照れちゃったのかしらねぇ？」
「……梓さん」
「ん？なぁに？」
「……社長は、まだ引きずっているんでしょうか……あの人の事」
「……そうねぇ、あの娘にとってはきっと原点みたいなものなのでしょうし……あの娘にとってフライトさんは特別だったのよ……たとえ、血の繋がりが薄くても」
決して悪くはない成績だった、あの当時はどのウマ娘も輝いていた。
でも一度の敗北が、ほんの些細なずれが、謂れのない悪評が……フライトさん達を苦しめた。
フライトさんはそれでも走り続けたが、その結果足を壊して引退を余儀なくされた……あの娘はそれが悔しくて、何より最弱の名に囚われてレースを走りながら壊れていくフライトさんを見ていられなかったのよねぇ。
「社長は遠い分家なんでしたっけ？」
「えぇ、幼いころからずっと姉として慕ってたって言っていたわぁ……だからこそ、きっとあの娘は証明したかったのよ、自分の力で……でも、それはあの娘にとっては荷が重すぎたのよ」
「……ごめんなさい、それを支えるのが先輩や私たち……トレーナーの役目だというのに」
「いいのよぉ、もう過ぎたことだし……どんなに才能があったとして

も、決して超えられない壁がある……名のないウマ娘には特にね」
「……認めたくはないですけど、ね」
「フライトさんのように壊れてしまう前に、もっと違う世界で新しい自分を見つけられるように……それがあの娘のお節介の原点かもしれないわねぇ」
「……ままならないものですね」
「ふふ、そうねぇ……でもね、私はこう思うの」
　確かにあの娘にはレースで走れる力はなかったけど、会社を作っちゃうような才能があった。
　私にも料理の才能があったし、茉莉ちゃんにはきっともっと違う才能がある。
「皆それぞれ向き不向きがある、やれる事とやれない事がある。ただ単にあの娘には走る事が向かなかっただけなのよ……そこからどう頑張るかが大事なんだと私は思うの」
「……そうですね、私もそう思います」
「ふふ、それにねぇ……実は今日茉莉ちゃん以外にタマモちゃんとオグリちゃんがお店に来たの」
「あのお二人がですか？」
「ええ、それでね……茉莉ちゃんがご飯を食べて帰った後、タマモちゃんが「あの姉ちゃんも常連なんか？」って聞いてきたの。どうしてだと思う？」
「どうしてですか？」
「ふふ……「あまりにも美味そうに目の前で飯をくってて、ついつい自分も食べ過ぎてもうたから」ですって。次に来たときは一緒に飯を囲んで食べてみたいって言っていたわ」
「あはは……確かに、茉莉ちゃんは美味しそうにご飯たべますよね」
「言葉はないけどその表情が雄弁に語ってくれるから、作るこっちも嬉しくなるくらいよぉ？……でも、それがきっと茉莉ちゃんだから出来る事なんじゃないかなぁって思うの」
「……そうですね」
「そうやってその人だから出来る事をこつこつとやっていけば……い

つか皆が幸せになれる世界に近づいて行けるんじゃないかって思うの」
「……はい、私もこれからも頑張ります！クルセラのトレーナーとして……そうですね、まずは……茉莉ちゃん、今日はここでご飯いっぱい食べたんですよね？」
「ええ、いつもよりもいっぱい食べてくれたわよぉ？」
「そうですか、そうですかぁ……明日はまず体重計に乗せるところから始めるとしましょう」
「あ、あらあらぁ～……ほどほどにしてあげてねぇ？」

＃０８　誰だって、その人だから出来る事を
見つけ歩むものだから

＃０８　前編

ウマ娘は何かとお金がかかるものです……なんだか最近お金の事ばっかり考えている気がしますが、きっと気のせいです。

食費は普通のヒトよりも多いですし……っていうかウマ娘の中には１人で１家庭分の食費が発生する娘だって珍しい話じゃありません。

私はそこまで健啖家というわけじゃないですが、やっぱり一般男性よりは食べちゃいますし……。

そして、それ以外にも色々と物入りなのがウマ娘なのでして……特にあるのが美容ケアに必要な数々の品。

まぁ私も腐っても女の子、日頃から髪やお肌のケアだって人並にはしています。

そしてウマ娘たるもの尻尾のケアだってもちろん欠かせません！ちゃんとブラッシングしたり専用のシャンプーやトリートメントできっちりケアをしているんです。

なにせそれをしないとぼっさぼさのかっさかさになってしまって、服に引っかかるし座った時の座り心地も悪くなるんですから、手を抜けません。

ただまぁ、最近はコンビニや１００円ショップにもいい品質の商品が出ていたりしますからね……最近はそういった物に頼ったりしています。

「でもお高い奴は良いんですよねぇやっぱり」

コメント：そんなに違うものなの？

コメント：髪の毛がゴワゴワするとかはわかるかも

コメント：っく！俺にも尻尾があれば共感できるのに！

コメント：おっさんの尻尾とか需要無いんですがそれは

「だってお高い奴とか髪も尻尾もさらっさらのつやっつやになるんですよ？手櫛でもさらさら～ってＣＭみたいになるし、尻尾も手触りと座り心地が全然違うんですから」

コメント：男なんて石鹸で十分だぞ
コメント：流石に石鹸はちょっと……
コメント：今のご時世男でも気にする時代だぞ？
コメント：気にしないと禿げるぞ……俺みたいに
コメント：また髪の話してる……（´・ω・、ミ）
「はぁ……やっぱりちょっとお高いけど良い奴使おうかなぁ……なんか尻尾のゴワゴワが気になっちゃって」
コメント：ウマ娘だとどこのメーカーがいいんだろ？
コメント：調べてみたけど色々なメーカーでウマ娘用も出してたんだな
コメント：普通に大手のメーカーでいいんじゃない？
コメント：合う合わないもあるしなぁ
コメント：そいや最近メジロが新ブランドの宣伝してなかったっけ？
コメント：あぁ、なんか色々な業界のウマ娘に使ってもらって感想を聞くやつだっけ？
コメント：メジロ家の専用チャンネルでマックイーンちゃん出演だからおすすめ
コメント：メジロ家のチャンネルってライアンちゃんの筋トレ動画くらいしか見たことないわ
コメント：ブライトちゃんの紅茶講座もいいぞ！
「メジロ家さんのチャンネル！私もよく見てるんですよ！ライアンさんの筋トレ動画とかはボイトレのトレーナーさんと一緒に参考にさせてもらってます！ケア商品の配信も見てますけど、あれは～……その、お値段的にね？」
コメント：確かに
コメント：コンビニや百均商品に頼るくらいだからなぁ
コメント：あの企画は色々な業界から選んでるんだからマイヤーちゃんもワンチャンあるんじゃね？
コメント：どうなんだろ、一応バーチャルだしなぁ
コメント：でも魂がウマ娘なのは初配信でばれてるやん

コメント：これはコラボのチャンスなのでは!?
「コラボは流石に……庶民には色々な意味で高嶺の花ですよぉ……高値だけに」
コメント：あ、はい
コメント：ほーん
コメント：で？
コメント：で？
コメント：で？
コメント：うん、それで？
コメント：おう
「君たちほんとダジャレに厳しいなぁ!?もぅ……あ、もうこんな時間かぁ。それじゃ今回の雑談配信はここまでにしますね。チャンネル登録とウマッターのフォローをまだの方はよろしくです！それじゃ皆、おつまいや～」
コメント：おつまいや～
コメント：っよ！乙舞屋！
コメント：っよ！
コメント：っよ！
最後はちょっとぐだぐだになっちゃいましたけど、まぁ雑談配信はいつもこんな感じですしいいでしょうか？
今日もいっぱい喋ったし、程よい疲れとまどろみに任せてすやーっと眠ることにしましょう。
な～んて、その日はのんきに布団に入った私でしたが……まさかこの配信が切っ掛けになるなんて思いもしなかったわけで……。
数日後、いつも通り夜中に配信に使う素材をコツコツ作っていた私のウマホにマネさんから連絡が入りました。
「もしもし？」
『あぁ、マイヤーさんですか？夜遅くに申し訳ありません……』
「いえ、大丈夫ですけど……なんだかお疲れですね？」
『え？えぇ……まぁ。それよりも明日なんですが、なにか予定は入っていますか？』

「いえ、特には……一日オフの予定なのでちょっと夜更かしして今度の配信で使う素材を作ってたくらいですから」
『そうですか……いえ、準備も大切ですが夜更かしはほどほどにしてください』
「あ、はい……ごめんなさい……それで、えっと？」
『あぁ、すみません……ふぅ。実は案件の話がまわって来まして、それをマイヤーさんにお願いできればと思ったんですが』
「わ、わたしに……ですか？えっと、そのぉ……私なんかでいいんですか？」
『ええ、むしろ相手側は貴女を指名していますから』
「わ、私を指名!?……な、なんでぇ？」
『……マイヤーさん、先日の雑談配信は覚えていますか？』
「え、あ……はい、覚えてますけど……？」
『そこでシャンプーの話をしましたよね？』
「あ、はい……えっと、それが？」
『実はその配信をご覧になった先方から是非自社の商品を使ってもらいたいと……そういう話が来たんです』
「あ、あぁ～……な、なるほど……？」
『どうでしょう？明日は顔合わせの打ち合わせとなるのですが……そこに同席しませんか？』
「えっと、そのぉ……それに同席したら、やっぱりやることになるんでしょうか？」
『いえ、明日の打ち合わせに同席したとしてもマイヤーさんが無理そうならば断わる方向で動かします』
「い、いいんですか？」
『ええ、社長からも問題は無いと承ってます』
「えっとぉ……そのぉ……そ、それなら参加、します……」
『……わかりました、では明日のお昼前には事務所に来てください』
「はい……あ、あの」
『なんでしょう？』
「えっと、その相手の企業ってどこの企業なんですか？」

『あぁ……メジロです』
「……はぇ？」
『ですから、今回オファーをくださった企業はメジロ家傘下の企業です』

～＊～＊～＊～

「本日はお時間をいただきありがとうございます、私はこの度商品の宣伝を任されましたメジロマックイーンと申します」
「あたしはその、付き添い？……の、メジロライアンです」
「これはご丁寧に……株式会社クルセラのマネジメント部の白石です」
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「……はひゅ……ほひゅ……」《／ｆｏｎｔ》
「……あの、そちらの方は？なんだか顔色が悪いようですが……大丈夫なのでしょうか？」
「あ～……ええ、問題ありません。それとこの娘がオファーをいただいているシルトマイヤーです」
「あ、はあ……そうでしたか。よろしくお願い致します」
　昨日のマネさん（白石さん）の電話でまさかのメジロ家傘下の企業からのオファーということで舞い上がるどころかあれから一睡も出来ずに朝を迎えて、いてもたってもいられずに事務所に来た私ですが……なんで!?なんでマックイーンしゃん!?ライアンしゃんまじぇ!?
「え～……それで、先日弊社に頂いたオファーについて改めてお話を聞かせていただければと思うのですが」
「はい、今回我がメジロ家が出資した新しいウマ娘用のケア商品について、宣伝活動の一環として様々な分野で活躍するウマ娘の皆様にこの商品を使っていただき、その使用感などを配信で述べていただくというものです」
「なるほど……となると、今回のオファーは出演依頼ということでしょうか？」
「ええ、そうなります。主な宣伝媒体としてはウマチューブとウマス

タとなっています。ウマチューブについては以前からこちらで活用しているメジロ家の専用チャンネルを使用する予定となっております」
「そうですか……あの、不躾で申し訳ありませんが……なぜ、弊社に？」
　そそそ、そうですよねぇ……さすがの社長もメジロ家と繋がりなんて……え？ないですよね？何かと謎が多すぎるうちの社長さんですがさすがに……え？
　そもそも繋がりがあったとしてもなんで私なんでしょう……こんなクソ雑魚ナメクジな私じゃなくてもっと有名な方に頼まれた方が……。
「えぇ、それについては……ライアン？」
「えっと、そのぉ～……実はマックイーンにマイヤーちゃんを勧めたのはあたしなんです。その……えっと」
「……こちらのライアンがシルトマイヤーさんの大ファンなのです」
「ままままックイーン?!」
「ふぎゅ!?ふぁふぁふぁ……ふわぁぁぁ!?」
「うわぁ！……本当にマイヤーちゃんの声だぁ」
「……ライアン？」
「あ……ごほん、失礼しました」
　恥ずかしそうに居住まいを正すライアンさん……そ、そんな!?ライアンさんが私のふぁ、ふぁふぁふぁ……ふぁぁぁぁ!?
「え～……それで、今回の宣伝についてシルトマイヤーさんを採用してはどうかと勧められまして」
「そうでしたか、それはありがとうございます……マイヤーさんもいい加減再起動してください」
「ふひゃ!?……あ、あああありがとうございましゅ!?」
「え～……内容は承知しました。ただ弊社の……特にこちらのシルトマイヤーについてはご存じの通りバーチャルウマチューバーです。そのあたりについては？」
「ええ。それについてはこちらでスタジオを用意し、そこに大型のモ

ニターを設置して出演していただくという形をとろうかと考えております。どんな形であれ今社会に出て活躍をなされているウマ娘を対象としておりますので、そこのところは配慮させていただきます」
マックイーンさんが持ち込んで来られたサンプル商品とプレゼン資料によれば、色々な業界で活躍するウマ娘さんを対象としているらしいです。
私もウマ娘のバーチャルウマチューバーとして依頼されたみたいで……確かに私は知ってる範囲では初めてのウマ娘のバーチャルウマチューバーですし……魂がウマ娘であることを公表しているのって私以外いませんしね……あれ、私ってもしかして希少価値高い？
「なるほど……わかりました。お話をいただきありがとうございます、返答につきましては社内で一度検討させていただいても？」
「ええ、構いません……ただ、できれば早めにご返答をいただければと思いますわ」
「わかりました。では本日はお越しいただきありがとうございました」
「いえ、いいお返事を期待しておりますわ」
なんだか私があわあわしているうちに話が進み、お辞儀をして出ていくマックイーンさんとお願いされてサインを入れた私のぱかプチを大事そうに抱えて帰るライアンさんを見送った私達。
「はうぅ……緊張しました」
「それは見ていればわかりましたが……どうしますか？」
マネさんが今回参考までにと持ち込んで来られたサンプル商品を手に取って眺めながら聞いてきました。
私も試しに手を……うひゃぁ、このシャンプー私の使ってるやつより桁が1つ違う奴ぅ……あ、この櫛なんて一つで二日はご飯食べられちゃうぅ……。
「配信ならこっちのやり方で行えますが、モニターでの出演となるとあちらに出向いての配信になると思いますし……不慣れな現場はまだ貴女にはハードルが高い気がします」
「えっと……その……」

確かに、初対面とはいえたった二人の前に出ただけで喋ることすらままならない私じゃ、とてもじゃないですけど知らないスタッフさん達が大勢いる現場となるとどうなることか……。
「その……私も、そう思います……」
「……そうですか、では今回のオファーについては」
「で、でも！」
「マイヤーさん？」
「あの、その……でも私にって……私だからって……そう言ってもらえたんですよね？だったらその、期待には……応えたいです」
「……本当ですか？メジロ家からの話とはいえ断ることは出来ますよ？」
「いえ、その……そういうんじゃなくて、その……嬉しかったんです。ライアンさんにファンだって言ってもらえて……ぱかプチも大事にしてもらえてて……マックイーンさんだって私ならって……思ってもらえているのなら……その期待に応えたいです」
「……わかりました、貴女がそう考えるのなら私達は貴女を支えるだけです。ではこの話は受けることにしましょう」
「は、はい！よろしくお願いします！……あのぉ～ところで」
「他に何か？」
「あ、いえ……そのぉ……これ、貰ってもいいですか？」
「……ええ、いいですよ」
なんだか微笑ましい顔のマネさんに見送られて私は事務所を後にしました。
だ、だってだって！普段使えないお高い奴なんですよ!?私だって気になるに決まってるじゃないですかぁ!?
私だって女の子なんですぅ！なんですかあの「あぁ、貴女も女の子だったんですね」みたいな顔!?
そりゃ我らがセカライのライバー女性陣は揃いも揃って女子力不足がＳＮＳで話題に上がることも多いですけど……。
なんだか最後は釈然としない気持ちを抱えながら家に帰った私は、ちょっと早いですが早速頂いたサンプル商品を試してみることにし

ました。
あ、ちなみに後日私が試す新製品は改めて貰えるみたいです……わぁ～これでしばらくは私もセレブ気分を味わえるんですね！勿体ないですしちょっとずつ使うようにしましょう……あれ、セレブとは？
さて、私たちウマ娘のお手入れ方法にはちゃんとした作法というものがあります。
まずは洗う前にはしっかりとブラッシングをします、そのための専用のブラシまであるくらいですからね！
そうして髪や尻尾に絡まったゴミやほこりをきっちりと落とします、それにするとしないとではシャンプーした時の泡立ちや指の通りが段違いです。
「ふんふふーん」
脱衣所で衣類を脱いでバスルームに入った私は早速頂いたブラシで髪と尻尾をブラッシングします……はわぁ！やっぱりいいブラシは通りが違いますねぇ……私の尻尾はちょっと癖っ毛なんですが、すんなり通っていきます。
ちなみに温かい時期は良いんですが寒くなってくるとこの工程はサボりがちです……だって服を脱いでブラッシングしないと服にごみやほこりがついちゃいますから……寒いと、ちょっと……ね？
それが終ったら温めのお湯でしっかりと流してさっそくお高いシャンプーの出番です。
「おぉ～泡あわ～あわわ～」
やっぱり良い物は泡立ちからして違うものですねぇ～。
上機嫌に泡まみれになってからしっかりと濯ぎます、泡が残ったりしてると傷んだりする原因になりますからしっかりとです。
それが終ったら改めてブラッシング、それもさっきのブラシとは違って細い櫛を使います、洗いたての毛は傷つきやすいですから優しく丁寧にやります。
これは私がまだお母さんと一緒にお風呂に入っていたころに教わったもので、実家にいた頃は妹にもしてあげていました……妹はそ

れが嬉しかったのか、一緒に入る時はいつもせがんで来てましたねぇ。
あとはゆっくり湯船につかって体を温めて……お風呂からあがったらしっかりと髪と尻尾を乾かします。
特に耳はしっかりやらないと痒くなったり、耳の病気の原因になることもありますからしっかりと水気をふき取っておきます。
乾かし終わったら軽くブラッシングして毛艶をよくするためのスプレーを吹きかけて馴染ませれば終了です！
「ふっふっふ、これで私も一流のウマ娘ですねぇ～」
さらっさらになった尻尾を撫でながらひと心地、やっぱりお高い物は満足感が違いますね！

～＊～＊～＊～

side：メジロマックイーン

有馬で奇跡の復活を遂げたテイオーのその姿に背を押され、長いリハビリの末に復帰したトゥインクルシリーズ。
テイオーやライアン、それ以外にも沢山のライバルたちとのしのぎを削るレースを繰り返した私は、その活躍が認められて強豪たる先達が集うドリームトロフィリーグへの参加が認められました。
そこでも同じように移籍を決めたテイオー達と勝っては負けてのレースを繰り返しながら、私はメジロのウマ娘としてのこれからを考えておりました。
まだまだ続くドリームトロフィリーグでの競技生活はあるものの、それだっていつかは終わらなければならないもの。
そうなった時、私はメジロのウマ娘として何ができるのか……最近では常々そのことが頭をよぎります。
同じメジロのウマ娘であるライアンは同じメジロの子供達の指導を行っておりますし、ドーベルやブライトは趣味としている紅茶やアロマを広める活動などを行っているみたいですね。

最近ではテイオーでさえ将来について考えている様子……ライバルたる私も後れを取るわけにはまいりません。
とはいえ後進の指導となるとすでにライアン達がおりますし、そもそもお抱えのトレーナーや教官が既におります。
ウマ娘に関する事業として被服関係がありますが、それもウマ娘の勝負服を手掛けるラモーヌ姉さま達がおりますし、なによりその……私はあまりそういった方向性は向いていないようで……。
メジロのウマ娘として、これからのウマ娘の世界をより良いものにしていく手助けを出来れば……そう思っていた時でした。
「新ブランドのケア商品ですか？」
「ええ、そうです」
おばあ様に呼ばれ執務室を訪れた私におばあ様が提案してくださったのは、ウマ娘たちが使っている髪や尻尾のケアをする商品の開発協力でした。
なんでもメジロ家が出資して新しいブランドを立ち上げたらしく、そこで出す新しい商品の開発のための協力を行うということでした。
「私に務まるでしょうか……」
「何も一からというわけではありません。まずはテスターとして商品を試し、貴女なりの意見を開発者に伝えれば良いのです」
「は、はい……わかりました、そのご提案受けさせていただきます」
そうして始まった新商品開発は思っていたよりも刺激的で楽しい日々でした。
開発を請け負っていたのはメジロ家が懇意にしている企業で、開発者の中にはウマ娘の方もおりましたので忌憚のない意見交換が出来たと思っております。
そこですっかり意気投合した私は宣伝についてもメジロのウマ娘としてきっちり責任をもって行いたいと思い、おばあ様に相談いたしました。
宣伝自体は企業側でテレビや街頭を利用しての宣伝を行うとのことでしたので、私は何か別の方法で出来る事がないかと考えました。
おばあ様と相談した結果ウマチューブとウマスタを利用した宣伝

をすることに決まり、ウマチューブにあるメジロ家が持つチャンネルを使うことも決まりました。
チャンネル自体はライアンが嬉々として筋力トレーニング講座と銘打った動画を上げたり、ドーベルやブライトが好きなアロマや紅茶の話をする動画などが上がったりしておりましたわね。
そこで今度はどんな宣伝を行っていくのかということで、関係各所と相談したり話を聞きつけたライアン達と意見を出し合った結果、様々な分野で活躍するウマ娘の方々に実際にその商品を使っていただき、後日配信にゲストとしてお呼びして実際の使用感などを述べていただくという内容に決まりました。
対象としたウマ娘はレース競技に出ているウマ娘はもちろんの事、それ以外の職業に関わるウマ娘も対象といたしました。
その、恥ずかしながら……そういったレースに関わっていないウマ娘の方が居る、という事自体は知識としてはありました。
ですが改めてそういった方々を調べ、実際に赴いて出演交渉をしていくうちに、まだまだその知識には実感が伴っていなかったこと、そしてなにより自身が住んでいる世界の狭さを痛感させられました。
商品開発の際に出会ったウマ娘の研究者さん以外にも警察や消防、運送業や建築分野など様々な場所で活躍する方達に出会えたことは、私にとっての今後を考える上でとても貴重な機会になったと思います。
そんな交渉も山があれば谷もあり、快く引き受けていただける方もいれば職業故の事情や個人的な理由から出演を断られてしまうこともありました。
それでも何人かの方に依頼を受けていただき、次はどなたに依頼するかと考えていた時でした。
「マックイーンちょっといいかな？」
「あら、ライアン？どうかいたしましたか？」
おばあ様から与えられた執務室で次の依頼者の選定を行っていたところにライアンが訪ねてきました。
「仕事は順調？」

「ええ、おかげさまで。とてもやり甲斐もありますから」
「そっか、でもトレーニングもあるんだからほどほどにね？」
「ええ、わかっておりますわ……それで、今日はどうしてこちらに？」
「あぁ、うん。ちょっとね……次の依頼者は決まったの？」
「今選んでいるところでしたが……それが？」
「実はそのぉ……あたしから推薦したい人がいて」
「あら、そうでしたか……それで、その方は？」
「うん、この娘なんだけど」
　そう言ってライアンから渡された書類に書かれているのは……一人のウマ娘のプロフィール、なのですが……。
「……バーチャルウマ娘……ですか？」
「うん……あぁ！バーチャルってあるけどちゃんとしたウマ娘の娘だから大丈夫だよ!?」
「あぁ、えっと……その、この方はどういった方なのですか？ええと……シルトマイヤーさんでしたか」
　そんな軽い気持ちでライアンに説明を求めた私でしたが、数十分後にはそんな気軽に聞いた自身の横っ面を張っ倒してやりたくなりましたわね……。
　なにせそこから始まったライアンの怒涛のシルトマイヤーさんトーク……なんでしょう、血は繋がらなくともやっぱり私もライアンもメジロのウマ娘なのだと実感いたしましたわ。
　きっと普段お茶会で野球トークを聴くライアンもこんな気持ちだったのですね……次からはもう少し頻度を減らしましょう、人のふり見てですわ。
　４杯目の紅茶でやっと落ち着いたライアンに改めて話を聞いていくうちに私自身も興味を持ってそのシルトマイヤーさんという方のチャンネルのアーカイブや動画を拝見させていただき、この方ならばと感じたため依頼をさせていただくことに決めました。
　最初の顔合わせを兼ねた打ち合わせで初めて会った感想としては……その、なんといいますか、正直心配の種は尽きないものでしたが。
　その後はマネージャーさんと話を詰めたり、配信の際にこちらで使

うスタジオにお二人をお招きして具体的にどうすればいいのかを話し合いました。
少しでも見知った顔があった方がシルトマイヤーさんもリラックスできるとのことでしたので、当日はクルセラから技術スタッフを同伴してもらうことになりました。
こちらとしても配信に関するノウハウについては持ち合わせてはいましたが、アバターを利用したバーチャルの配信については素人同然でしたのでとても助かりました。
今日もこうして機材の最終チェックとして実際にモニターに映しながら問題がないかをテストしているのですが……。
「……」
「マックイーン、ちょっとうらやましくなってる？」
「そそそ、そんなことはございませんわ!!」
そりゃ、モニターに映るシルトマイヤーさんのアバターはとても可愛らしいですし、その……なんだか私もちょっとやってみたいなぁなんて……思うこともございますけれど。
「クルセラは経歴不問でいつでもお待ちしておりますよ？」
「ちょっと、マネージャーさんまで……もぅ！」
なんていう一幕もありましたが準備は恙なく進行し、無事配信の日取りも決まりました。
正直なところ……隣にどどん！とそびえるモニターに向かって話すというのはどうにも違和感がありますが……きっとこれからの時代はこういったことも増えることでしょう、この経験をこれからに生かしていきませんと！
「それでは、本日はよろしくお願いしますね？」
「は、はははいぃぃ！」
「あの……どうかリラックスをしてお願いしますね？」
「がが、がんばりましゅ!?」
あの、一抹……というか大分不安なのですが……いえ、招待したこちら側が不安になっていてはシルトマイヤーさんも不安に感じてしまいます、ここはメジロのウマ娘として私が率先して堂々たる振る舞

いを見せねばなりません。
「配信１０秒前！……５、４、３、２……」
さぁ、配信の始まりです。

……Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔｏｒｙ

＃０８　後編

もうしばらくお待ちください

▶　▶ー　・ライブ

チャット〉

『新ケア商品宣伝配信　第７回』

メジロ家総合チャンネル　　メンバーになる
チャンネル登録
チャンネル登録者数　２４８３万人

「……皆様ごきげんよう、メジロマックイーンですわ。本日もこの配信にお越しいただきありがとうございます」
コメント：こんにちは～
コメント：ごきげんようですわ
コメント：ですわ
コメント：待ってましたわ
コメント：最終回かぁ
コメント：もっと見たい！
コメント：マックイーンちゃんももっと動画出してほしいなぁ……
コメント：マイヤーちゃんが出ると聞いて
コメント：マイヤーちゃんのチャンネルから来ました
「あら、本日のゲスト様のファンの方もいらしているみたいですね、本日はよろしくお願いいたしますね」
コメント欄を見る限り、どうやら普段からメジロ家のチャンネルをご覧になっている方々の他にも、シルトマイヤーさんのファンの方などもこの配信に来てくださっているようですわね。
コメント：むしろマイヤーちゃんが心配だ……
コメント：大丈夫かな？
コメント：こんな時こそ俺たちが応援するんだろ！頑張れマイヤーちゃん！
コメント：他所様のチャンネルに出るなんて……マイヤーちゃんも立派になったな
「ふふ、皆さんもお待ちのようですし早速ご登場願いましょうか。本日のゲストは株式会社クルセラのバーチャルウマチューバーグループ、セカンドライフ所属バーチャルウマ娘のシルトマイヤーさんですわ」

「あ、こ……こ、ここ」
「……シルトマイヤーさん？」
「ハヒュ……ホヒュ……ほわぁぁ……本物のマックイーンしゃんだぁ……」
だ、大丈夫でしょうか……なんだかモニターに映ったアバターが小刻みに震えているようなのですが？
コメント：マイヤーちゃんェ……
コメント：おいぃ……
コメント：既にいっぱいいっぱいやん
コメント：大丈夫なのこの娘？
コメント：推しの前で限界化してて芝
「あぅ……えと……こんまいや～……え～……セカンドライフ３期生の……し、シルトマイヤーです」
「はい、というわけで本日のゲストのシルトマイヤーさんです、本日はよろしくお願いいたしますわ」
「は、はい！よよ……よろしくお願いします！」
「さて、まずはこの配信について改めてご説明をさせていただきます。この配信はこの度新しく作られた新ブランドのウマ娘用ケア商品の宣伝となっております」
スタッフさんが画面を切り替えてブランドの説明と商品の画像を出している間にカメラに見える位置に実際の商品を並べておきます。
こういった宣伝ではやはり手元に実際の商品があると話を進めやすいですからね、カメラに映らない位置で配信に参加しているシルトマイヤーさんの手元にも同じ商品をスタッフが置いてくれています。
ちなみにですが、クルセラさんのところにいるＣＧスタッフさんが今回の配信のためにわざわざ商品の３Ｄモデルも作られたらしく、シルトマイヤーさんの話に合わせて画面の中に登場させるという話ですわ。
「さて、宣伝企画の一環として様々な分野で活躍しておられるウマ娘の方々を実際にお呼びして、その使用感などをお聞きするこの企画も今回で最終回となります。それではシルトマイヤーさん？」

「は、はい！」
「この企画用にお渡ししていた商品ですが、まずは使用した感想をいただけますかしら？」
「あ、えっとその……まずはやっぱり質がすっごく良くて、シャンプーの泡立ちも滑らかできめ細かくて……それに櫛も！私は癖が強いんですけど……櫛がすんなり通って驚きました」
「なるほど、あの櫛は他の皆様にも好評でしたわ」
「そうですよね！ヒト向けの櫛ってウマ娘にはちょっと引っかかりやすいですから」
「そうですわね、櫛の試作品を作ってくださっているのは京都にいらっしゃる職人さんなんですが、とてもいい仕事をしてくださりました」
　コメント：京都の職人技なのか
　コメント：それだけで何万としそう
　コメント：でも良い櫛は髪も傷めないし長持ちするから一点物でも買う価値はあるよ！
　コメント：確かに髪を扱う職業のヒトって櫛とハサミはこだわってそう
「ほわぁ……京都、凄い……」
「ふふ、それくらい開発も本気だったということですわ。そういえばシャンプーの香りはどうでしたか？」
「あ！その、私あんまり強い香りの物って苦手だったんですけど……このシャンプーはすごく優しい香りがして、すごく良かったです」
「そうですか、香りについては私もテスターとして参加した際はとてもこだわっておりましたので、気に入ってもらえて嬉しいですわ。ちなみに……どの香りがお気に入りですの？」
「あ、えっと……一番は柑橘系ですね。仄かに漂う甘い香りがすっごく良くて、リラックスできました」
「まぁ、そうでしたか！その香りは私もお気に入りで、実は私もその香りの商品を使っておりますのよ？」
「ハヒュ!?ままま、マックイーンしゃんと……同じ……はわ、はわわわ

わ!?」
「あらあら、別に恥ずかしがることではありませんでしょう?」
コメント：あらあら
コメント：まあまあ
コメント：おやまあ
コメント：ちょっと柑橘系のシャンプー買ってくるわ
コメント：商品の予約はよはよ
コメント：推しとおそろいとは恐れ入った
「うふふ、コメントの皆様も商品の事が気になっているようですが……念のため、こちらはウマ娘用の商品となっております、ヒト用の商品についても開発は進んでおりますので続報をお待ちください」
コメント：まじか
コメント：これは買うしかないな
コメント：楽しみにしてますわ！
コメント：ですわ！
その後は他の商品の感想やどういった使い方が良いのか、また個人的なこだわりなどをテーマに配信を進めていきました。
様々な業界で仕事をするウマ娘を集めただけあってやはり皆さんそれぞれこだわりがあり、シルトマイヤーさんもウマチューバーという仕事の上で気にしている部分があることがわかりましたわ。
「さて、ここからはゲスト様についてのトークパートとなっておりますが……シルトマイヤーさんはバーチャルウマチューバーということでしたわね」
「は、はい！」
「何故その道を選んだのか、なにか理由はございますの？」
「えっと、その……選んだというか、選んでもらえたっていうか……バーチャルウマチューバーになったのは社長さんにスカウトしてもらったのが切っ掛けなんです」
「そうでしたの、それはどういった経緯だったのでしょう？」
「えっと、詳しくは言えないんですけどイベントで歌う機会があって……それを社長さんが見てくれたみたいで、その場で「ウマチュー

バーにならないか」ってスカウトしてくれたんです」
コメント：歌ってる姿でスカウトされるとか歌上手勢か
コメント：それでスカウトってすげえな
コメント：そんな逸材をその場で見つけられた社長の豪運よ
コメント：歌そんなに上手なん？
コメント：マイヤーちゃんのお歌動画はどれも秀逸よ！
コメント：特に最新の奴はボカロのＰＶ作者との合作だから特におすすめだぞ！
コメント：へぇ～ちょっと見てくるわ、サンクス！
コメント：でもそんだけ歌が上手いならウィニングライブで見たかったかな
コメント：まぁ、確かに。なぜレースに行かなかったんだ……
コメント：レースの世界には興味なかったんかな？
コメント：ウマ娘でレースに興味がないなんて無いやろ
コメント：確かに
コメントの方達もおっしゃっている通り、ウマ娘は皆レースに対して並々ならない想いを抱いているものです。
それはレースに対するもの以外にも、ウマ娘の本能として走る事に対するある種の衝動ともいえるものです。
実際これまでお呼びしたゲストの方々は皆さん今もレースに出ているか、もしくはレースを引退した後に今の仕事を選んだ方達でした。
「そうだったのですか……その、レースの世界に憧れは無かったのでしょうか？」
「いえ、もちろん憧れてましたよ？私もあんな風にレースで走って、ウィニングライブで皆の前で歌って……キラキラ輝けたらなぁって思ってました……でも私、トレセン学園の受験に落ちちゃって……そこで凄いウマ娘さんをいっぱい見て、なんか……私とは違う世界だなぁって思っちゃって」
コメント：おう……
コメント：そっか、マイヤーちゃんも挫折を経験したんやな……

コメント：まぁトレセン学園はウマ娘の中でもトップが行く場所だしなぁ
コメント：地元じゃなく世代で負け知らずじゃないと生きられない世界やしなぁ……
コメント：レースの世界なんてトップ層のさらに上澄みだもんな
「私よりも凄い娘はいっぱい居て……あぁ、そういう娘達だからこそここで活躍していけるんだって思ったら、なんだか納得しちゃって。それからはあれこれ興味があることをやったりしたんですけど、なんかしっくりこなくて……だから、今は社長さんに声をかけて貰えて、こうして皆の前でバーチャルウマチューバーとして活動する事が出来て、とても……楽しいです」
コメント：えがった……えがったなぁ……
コメント：良い話だなぁ……
コメント：他のゲストの人たちもそうだけど、ウマ娘は頑張り屋ばっかりだな
コメント：俺らも見習わんとなぁ
コメント：社長さん！マイヤーちゃんをこれからもよろしくお願いします！
コメント：良い娘すぎる！推すからこれからも頑張って！
「あ、えと……コメントの皆さんもありがとうございます、これからも頑張りますね！」
「ええ、私も応援しておりますわ……そういえばシルトマイヤーさんはウマ娘のレースをよくご覧になっておられるとか？」
「は、はい！よく見てます」
コメント：憧れていた世界だもんな
コメント：マイヤーちゃんの同時視聴は実況とはまた違ってていい
コメント：出走している娘の詳しい解説とか助かる
コメント：推しに詳しいオタクの鏡
コメント：たまに早口になりすぎて聞き取れない時あるけどな
コメント：マックイーンさんの復帰戦とか興奮しすぎて泣いてたしな

「あら、私の復帰戦もご覧いただけていたのですね？」
「は、はい！それはもちろん！」
「それは嬉しいですわ」
「ももも、もちろんそれ以外にも！天皇賞も！ＴＭ対決も見ました！去年のドリームトロフィーも全部見ています！」
「うふふ、そんなに興奮してもらえるならこちらも競技者として誇らしく思いますわね」
「あ……は、ぅ……しゅみましぇん」
「あら、嬉しいのですから良いのですよ」
コメント：限界オタクやん
コメント：ちょっとチャンネル登録してきます
コメント：可愛いので推しますわ！
コメント：ですわ！
「はう、かわい……はわわわわ」
「ふふ……それ以外にはどんな物を見たりしていますか？」
「えっと……その、じ……実はメジロ家さんのチャンネルも前々からよく見てて、ライアンさんの筋トレ動画とかはボイトレのトレーナーさんと一緒に参考にさせてもらってますし、ドーベルさんとブライトさんの動画もいつも楽しませてもらってます」
「そうなんですの？ライアンよかったですわね？」
コメント：マイヤーちゃんも見てるのか
コメント：良かったねライアンちゃん！
コメント：そういえばライアンちゃんはマイヤーちゃんのファンなんだっけ？
コメント：こないだウマッターにサイン入りぱかプチを自慢してたな
メジロライアン：ありがとうございます！
コメント：お
コメント：あ
コメント：でましたわ
コメント：きましたわ

「はわわ!?あの、その……ここここ、こちらこそありがとございます!?」
　その後は普段どんなことをしているのかとかお互いの好きな食べ物や趣味について話が弾み、配信時間はあっという間に過ぎて行ってしまいました。
　コメントにもメジロ家のチャンネルを元々見ていた方以外にもマイヤーさんのファンの方やバーチャルウマ娘に興味を持つ方が来ていた様子でとても盛り上がりましたわ。
　企画最後ということで改めて発売に向けての抱負とあいさつで配信を終えた私は、スタジオの隅で配信機材の撤収を待っていたシルトマイヤーさんに話しかけました。
「シルトマイヤーさん、本日はありがとうございました」
「あ、いえいえ!?そのぉ……なんか、終始慌てちゃって……あれで大丈夫でしたか？」
「ええ、とても楽しい時間でした……なんだかこれで終わってしまうのがもったいないくらいですわ」
「はぅ……あ、ありがとうごじゃいましゅ」
「うふふ、今度は案件ではなく私の配信にお友達として出演していただけると嬉しいですわ」
「はひゅ!?お、おおおおお友達ぃ……ふ、ふにゅうぅぅ～」
「あらあら、大丈夫ですか？」
「よっと……失礼します、マックイーンさん。本日はありがとうございました」
「いえ、マネージャーさんもありがとうございました。今回は難しい依頼に答えて頂き感謝いたします」
「こちらこそ、この経験はきっとマイヤーさんの成長につながると思っていますので……ほら、マイヤーさん？」
「はひ!?あ、あああああの！ありがとうございました！」
「ええ、こちらこそ……ありがとうございました」
　お疲れなのか、少しふらふらした足取りのマイヤーさんをマネージャーさんが抱えて歩き去る姿を見送った私は、撤収作業をスタッフに任せて報告のためお屋敷にいるおばあ様の下に向かいました。

「おばあ様、配信による宣伝活動は本日で無事終了しました」
「そうですか……マックイーン、貴女は今回の事で何を学びましたか？」
「そうですね……まだまだ私の知らない世界が、ウマ娘たちが過ごす場所があることが実感できました」
私の脳裏に浮かぶのは今回の企画で出会えたウマ娘の方々……そして、その最後に出会えた私とさほど年齢が変わらない少女。
私が知らない世界を歩くその後姿は誰よりも眩しくて、私の知らない未知で溢れておりましたわ。
「きっと……レースだけをしていては分からなかった部分がまだまだあるのだと理解できました」
「そうですか……貴女の口からその言葉が出るのなら、今回の件を任せた意味もありました」
「おばあ様……」
「……貴女はメジロのウマ娘として立派にその使命を遂げました、これからの貴女はメジロのウマ娘としてではなく、メジロマックイーンとして……何を成せば良いのか、考えてみなさい」
「……はい、おばあ様……ありがとうございました！」

ｓｉｄｅ：メジロマックイーン　ｅｎｄ…

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶　▶　　・ライブ

チャット〉

『案件お疲れ様の振り返り雑談するよ！』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる

チャンネル登録

チャンネル登録者数　８．９万人

「こ～んま～いやぁ～。セカンドライフ所属３期生のシルトマイヤーで～す」

コメント：こんまいやー！

コメント：こんまいや～

コメント：っよ！紺舞屋！

コメント：っよ！

コメント：こんまいやー！

コメント：っよ！っよ！
コメント：あの配信で推すことにしました！
コメント：案件配信ぶり～
「あ、配信を見てくれた方もいるのかな？ありがと！今日は案件振り返り雑談で～す」
コメント：ああいう宣伝で配信って珍しいな
コメント：まぁメジロ家主体だし、宣伝と誘導はばっちりだったしな
コメント：クルセラの公式ＨＰとウマッターでもやってたから結構人が行ってたんじゃないかな？
「ん～見た感じうちのチャンネルでよく見る人もいたかな？改めて配信を見に来てくれてありがとうございます～」
コメント：新鮮な感じがしてよかったです！
コメント：面白かったからこれからもどんどんコラボして
コメント：まだまだコラボを待つ相手は多いぞ！
「あはは……コラボについては追々考えるとして……いやぁ、まさかこんな形で案件を貰えるなんて思わなかったよ」
コメント：確かに
コメント：収録時の話聞きたいです！
コメント：名ウマ娘を目の前にした感想は？
「ん～配信はメジロ家の敷地内にあるスタジオだったんだけどさ、まず家にスタジオが有るってことがすごくない？しかもすっごく大きいの！部屋の一室とかじゃないんだよ？貨物倉庫かな？って思うくらい大きいんだから！」
コメント：さすメジ
コメント：やっぱりメジロはデカかった
コメント：メジロはデカい（意味深）
コメント：なおマックイーンちゃんは……
コメント：おいバカやめろ
コメント：敷地内にあるとかどんだけよ？
「その中にはいろいろな撮影用の部屋とかあってさ、ちょっと見学さ

せてもらったんだけどトレーニングジムとか試写用の映画館もあったんだよ。衣裳部屋なんていろんなドレスがずら～っと並んでたよ」
コメント：ドレス？
コメント：マイヤーちゃんドレス着たの!?
コメント：ドレス姿見せて
コメント：#ドレスを着てくれシルトマイヤー
「いやいやいや！着てないから！……大体着てたって見れないでしょ？」
コメント：ならばドレス衣装の実装が待たれるな
コメント：ドレス代　　１００００円
コメント：いくら貢げばドレス姿が見れますか？　　３０００円
「いやいや違うから!?そういうことじゃないからね!?もう……ほらほら振り返りの続き！えっとぉ……その、当日はそのスタジオでマックイーンさんと一緒に収録したんだけどさ、なんかもうねぇ……オーラが違ったね」
コメント：オーラ？
コメント：まぁそれはなぁ
コメント：そら（今も現役のウマ娘なら）そうよ
コメント：未だ現役の最強ステイヤーですからなぁ
「なんていうかさ、打ち合わせの時とか配信テストしている時はほわほわしてて、メジロのお嬢様なんだなぁ～って思ってたんだけど……いざ配信が始まるとさ、なんかこう……空気が変わるっていうかさ」
コメント：本気モードってことかな？
コメント：むしろ余所行きモード？
コメント：プライベートを知らんから余所行きも何も……
コメント：レース前とかの雰囲気かな？
「もうオーラが凄すぎて私てんぱっちゃってさぁ……はうぅぅ～改めて思い出すとほんとあれでよかったのかなぁ……」
コメント：まぁ面白かったし大丈夫じゃない？
コメント：わりと評判は良かったと思うぞ？
コメント：企画のオオトリとしては十分の仕事をしてたよ

コメント：同接もかなり多かったしな
「そっかぁ……ま、まぁそれならよかったかな……」
コメント：ちゃんと商品の感想を言えてたからえらい！
コメント：ちゃんとマックイーンちゃんの質問に答えられてたからえらい！
コメント：目を見てたのかはわからんだろ……ｗ
コメント：そういや実際使ってみてどうだったん？
コメント：裏だから言える事もあるでしょ？ん？
「ん～実際あの場で言ったことが本心なんだけどなぁ……今も残ってる試供品使わせてもらってるんだけど、良い香りなんだ～」
コメント：まだ使ってたんかｗｗｗ
コメント：1週間分とかじゃないのか試供品って？
コメント：マイヤーちゃん……
コメント：貧乏性でちゃったか
「いやいや、貰ったのは売り出すものと同じものだからまだ残ってるんだって！もぅ……この香りお気に入りだし、今度似た香りの商品探してみようかな？」
コメント：そういえば香りが良いって言ってたな
コメント：その香りマックイーンちゃんもお気に入りで使ってるんだっけ？
コメント：なるほど、つまり同じ香りのシャンプー使えば……
コメント：それ以上はいけない
「そっか、マックイーンさんもお気に入りで……っは！つまり今……私はマックイーンさんの香りに包まれている!?」
コメント：マイヤーちゃんェ……
コメント：この娘は……
コメント：Ｏｈ……
コメント：こいつ……
コメント：幻滅しましたマイヤーちゃんのファン辞めます
「じょじょじょ、冗談ですよ!?そんな事思ってないですし……ほ、本当

に！本当ですからね!?ちょっと皆さん聞いてくれてます!?本当ですから～～～!!」

＃０８　誰にでもきっとある輝ける場所

＃０９

「さぁ各ウマ娘最終コーナー！先頭は依然３番クリストマフ、その後ろに８番マエロニートスが上がってきた！さらに中盤では１番人気５番シングルサナトスが前をうかがっているぞ！」

レース場に響き渡る実況の声がターフを走る私の耳をかすめる、だがそんなものに気を取られる余裕なんてない。

「さぁウマ娘達が最後の直線になだれ込んできた！クリストマフが伸びる！伸びる！マエロニートスとの差はすでに３バ身ほど！シングルサナトスも懸命に追いかけるが届かないか！……いやさらに後方大外からクラウハーゼン!?１１番クラウハーゼンが上がってきた!?いったいどこに居たんだクラウハーゼン!?伸びる！伸びる伸びる伸びる！ぐんぐんとスピードを上げてシングルサナトスを！マエロニートスをかわしたぁ!!」

脚が鉛のように重い、肺に針が刺さっているみたいに痛い、空気を通すはずの喉が詰まりそうになる。

それでも、私は走る。

「クリストマフはまだ粘る！だが後ろからクラウハーゼンが迫ってきたぞ！残り２００！どっちだ!?どっちだ!?クリストマフ！クラウハーゼン！クリストマフ……いやクラウハーゼンだ！クラウハーゼンここでクリストマフに並ばずかわした！そのまま伸びる！まだ伸びる！……ゴーオオオオオオオル！集団後方で足を溜めていたクラウハーゼン、他を圧倒する猛烈な追い込み！見事な大外一気でレースを制しました!!」

「素晴らしいレースでした！デビューから間もないですが、彼女の力強い走りは今後も期待したいですね」

ゴール板を超え走り切ったことを理解してやっと足を緩める、観客席からの歓声が届くが反応している余裕なんて私には無い。

「はぁ……はぁ……っげほ、ごほ……あぁ……」

「はぁ……はぁ……だ、大丈夫？」

私と先頭を争った娘が心配そうに声をかけてくれたので、右手を挙げてそれに答える。
「そう……はぁ……はぁ……あぁ、負けた……うん、次は負けないから」
その娘は最後にそう呟いてターフから去っていった。それを見送ってから私は観客席に応援の感謝を伝えて最後に控室へと戻った。
控室では自分の所属するチームのトレーナーが手持ちのＰＤＡを片手に難しい顔をしていた。
「戻りました、東条トレーナー」
「あぁ、お帰り……いいレースだったぞ」
顔を上げた東条トレーナーの言葉に苦笑いを浮かべながらテーブルに置いてあったスポーツドリンクを手に取る。
「いえ、まだまだです……課題のすべてはこなせていませんし、修正すべき問題も新たに見えてきました」
「まぁ……そうだが、お前はもう少し肩の力を抜くことを覚えろ、クラウハーゼン。根の詰め過ぎはオーバーワークのもとだぞ？」
「……いえ、これではまだまだです……もっと精進しなければ」
「まったく……体調は大丈夫か？脚に違和感などは？」
「はい、疲れはありますがライブを行うのに支障はありません。足も万全です」
「そうか……今日はよくやった。明日は今日のレースの反省会だ、いいな？」
「はい、わかりました」

～＊～＊～＊～

府中の中で広大な敷地面積を誇るそこは「日本ウマ娘トレーニングセンター学園」。
中央トレセンとも呼ばれるその学園は２０００人を超えるウマ娘が所属し、互いに切磋琢磨してレースの頂点を競い合う学び舎。
所属できるウマ娘達は皆一流であり、名実ともに日本のトップを生

み出す場所である。
「はぁ、はぁ……ふう」
そんな学校のグラウンドでは一人のウマ娘が早朝から練習に励んでいた。
走るその背の後ろに流れる髪は黒鹿毛、それをゴムひもで一括りに纏めた少女は走る速度を緩めながら一息入れる。
既に長い時間走り続けているのか汗が絶えず頬を伝って流れ落ちていく。
彼女の名前はクラウハーゼン、つい最近デビュー戦を勝利し現在は2勝で次はホープフルステークスに出走する予定で調整しているところだった。
デビューが他のウマ娘よりも遅れたため、まだそれほど注目されていない彼女だったが、それでもジュニアからG1を視野に入れられるほどその実力は完成されてきている。
トレーナーである東条の目から見てもさらにその先、クラシックの3冠と言われるレースで勝負できるくらいには仕上がってきているという自負があった。
だがこうして誰も起きてこないであろう早朝からの練習を重ねているように、本人はそれを疑いこそしないものの、決して慢心するつもりはない。
何よりも彼女には実力が徐々に確かなものとなった今でも……いや、それよりもずっと前から追いかけ続けている背中があった。
「はぁ……はぁ……まだ、まだ……ですね」
誰もいないはずのターフの先、だがクラウハーゼンには確かに前を走る朧げな背中が見えていた。
「茉莉お姉ちゃんの……努力に比べれば……これくらい、まだまだです」
誰ともなくそう呟いた彼女は再び姿勢を正して黙々とターフの上を走り始めた。
やがて朝練を始めた他のウマ娘が切り上げ始めた頃になってようやく走り終えたクラウハーゼンは自室のシャワーで汗を流して制服

に着替えた。
　ちなみに、同室の少女はいまだすやすやと夢の中である。
「まったく……トーラ、起きないと遅刻しますよ？」
「んぅぅ～……あとごふん～」
「……はぁ、先に行きますからね？」
　相も変わらず朝に弱い親友に呆れつつ部屋を出る、寮ではすでに朝練から戻ったウマ娘達に加え早めに登校しようとする娘達で徐々に賑わいを見せ始めていた。
　クラウハーゼンもそれに混ざり寮の食堂で朝食を食べる、ただ他のウマ娘達と少し違う様子なのは箸を持つ方とは逆の手に握られた小さな単語カード。
「……次、えっと……うん」
　ご飯をしっかりと食べながらも器用に単語カードをめくっては頭の中で回答を出していく、最初その光景を見た他のウマ娘は一様に驚いていたが、やがて日常となればもう誰も気にする事は無くなった。
「やぁ、クラン。今日も勉強しながらかい？」
「……あ、フジ先輩。おはようございます」
　そんな彼女に声をかけてきたのは寮長でもあるフジキセキ、手に持っている朝食をクラウハーゼンと同じテーブルに置いているところを見ると、彼女も今から朝食の様だった。
　ちなみにクランというのはクラウハーゼンの愛称だ、決めたのは同室の親友である。
「あぁ、おはよう……まぁ、行儀が悪いからほどほどにね？」
「あ、はい……すみません」
「いや、勤勉なのは良い事さ……まぁ、確かに中央トレセンは文武両道を掲げてはいるけど、常日頃から心掛けなければならないほど成績が悪いわけじゃないだろう？」
「まぁ、そうですが……習慣のようなものなので」
「まったく……その勤勉さをエルに分けてほしいくらいだけど……あまり無理はいけないよ？」
「大丈夫です、無理はしていません」

「そうかい？日も登らないうちから走り始めている生徒がいる……と、寮長会議で話題になってるけれど？」
「……そーなんですねー……それはわたしもみならわないとー」
「……っぷ、あはは！まぁ……同じチームの先輩としてちょっと心配なだけさ。心の隅にでも留め置いていてくれると嬉しいな」
「……はい、気を付けます」
「そういえば、お姉さんは元気かな？」
　その言葉に思わず食べていたご飯を勢いよく飲み込んでしまい、ちょっとむせる。
「ごほっ……お、お姉ちゃん……ですか？」
「あぁ、配達のバイトで来ていたんだけど……最近すっかり見なくなったものだからさ」
「あ～……はい、元気ですよ？配達は……確か辞めたって言ってました」
「そうか……まぁ、肉体労働も中々大変だろうからね……会う機会があったら私が心配していたって伝えてくれるかい？」
「は、はい！わかりました……多分伝えたらぶっ倒れるんだろうなぁ、お姉ちゃんのことだから……」
「ん？」
「い、いえいえ！なんでも……あ、その。ごちそうさまでした！」
「ん、あぁ……それじゃ、またあとでね」
「は、はい」
　慌ただしく朝食の食器を片付けて学校に向かうクラン。
　別段姉の事を聞かれて困ることはないのだが……何分その姉がしている仕事の事を考えると深く伝えるとどうなるかわからないだけに……。
「はぁ……苦労しますね、本当に」
　教室に入りクラスメイトに挨拶をしながら席に着く、しばし近くの席の娘と談笑していると、慌ただしく扉が開く音と共に寝ぐせでぼっさぼさになってるウマ娘が飛び込んできた。
「せ、セーフっす！」

「トーラまた寝坊？」
「おはー」
「また今日は一段と寝ぐせが酷いわね？」
「いやぁ、今日は有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》でぶっちぎりで走る夢を見てたもんだからいつも以上に気持ちよく寝ちゃってたっすよ～……あ、クラン！酷いっすよ！おいていくなんて～」
「声はかけました、あと五分と言って寝たのはトーラでしょう？」
「それはそうっすけどぉ～」
　なんてぼやきながら後ろの席にカバンを置いたのはトーラスヘクサ、クラウハーゼンと同室のウマ娘でこれでもすでに３勝と速いペースで勝利を重ねている実力者だ。
「はぁ～……まだ眠いっす」
「ちょ、のしかからないでください重いです」
「え～そんなこと無いっすよ～……ん？」
「どうかしましたか、トーラ？」
「くんくん……すんすんすんすん！」
　っずぼ！という音が聞こえてきそうな勢いでうなじに顔を突っ込むトーラに、慌てて引き剥がそうとするクランだったが、体格的にも体勢的にも劣勢なせいで結果ただわたわたと両手をばたつかせるくらいしかできていなかった。
　慌てふためくクランとは対照的に他のクラスメイト達はまたやっているといった様子で面白がっているため止める者は誰もいない、これが二人の平常運転なのであった。
「ちょっと!?髪に顔を突っ込まないでください！匂いを嗅ぐな!?」
「……嗅ぎなれない香り、シャンプー変えたっすか？」
「髪に顔を突っ込んだまま喋らないでください！くすぐったいですから！……ええ、変えましたよ？以前使ってたのが無くなったので」
　結局どうすることも出来ないと悟って姿勢を正して質問に答えるクラン、傍から見れば一人のウマ娘が癖のあるウェーブヘアーに顔を突っ込んで会話をするという、えらくシュールな絵面がそこにはあった。

「へぇ～……でも珍しいっすね。あんまり香りがついてるの好きじゃないって言ってたのに？」
「……そうでしたか？」
「そうっすよ～……ふ～ん、柑橘系っすかぁ～……ほ～？」
　そこでようやく髪から顔を出したトーラは意味有り気な笑みを浮かべていた。
「な、なんですか？」
「いやぁ～わかる！わかるっすよ～？憧れってのは誰にでもあるもんっすからね～」
「いや、だからなにがですか？」
「またまたぁ～誤魔化さなくてもいいっすよ～？そりゃ憧れの人が使ってれば試してみたくなるのも理解できます、私も使ってみたかったっすからね～？」
「……いえ、別に私は」
「いいっすいいっす！すべてを語らずとも私はちゃ～んと理解してるっす！」
「いえ、そもそもなにか誤解を」
「むっふっふ～意外とクランも乙女な部分があるんすねぇ～部屋にぱかプチも飾ってますし～」
「いやその、だからあれは」
「むふふふふ、そんなに憧れてるんですねぇ～？あの」
「だ……だから！私は別におね「マックイーンさんに」……は？」
「メジロのご令嬢で名実ともにトップクラスのステイヤー！歩く姿は百合の花、されど走る姿は烈火のごとし！憧れちゃうのはわかりますよ～」
「……あ、はい」
「どうしたんすか？別に今更隠さなくてもいいっすよ～？部屋にぱかプチだって飾ってるくらいですし。シャンプーもあれっすよね？この前ウマチューブでやってた宣伝で見たんすよね？」
「……ええ、そーですね。というかいい加減離れてください重いです」
「も～恥ずかしがっちゃって～……ところでさっき何か言いかけてな

かったっすか？」
「何でもありません、ほらそろそろ先生が来ますよ？」
「つげ！そうっす！クラン～1限目の課題見せてくださいっす～！」
「……はぁ」

～＊～＊～＊～

授業を終えたクランは一人練習に向かうウマ娘を横目にチームの部室に向かう。
前日にレースを行ったクランは今日は所属しているチームリギルの専用ルームでトレーナーである東条とレース内容の振り返りと反省会を行う予定だった。
「それじゃ、まずはレースについてだけど……クラウハーゼンの所感はどう？」
「はい……想定よりもバ群を抜けるのが難しく思うように走れませんでした」
「そうね……今回のレースでは追い込みとしてベストの位置取りを出来ず、後半で進路を塞がれた感じかしら？」
「はい、そのため大外までいかなければ思うようにコース取りが出来ませんでした」
「そう……とはいえ大外を走ってなお、あれだけのロングスパートを行えることがわかったのは今後のレースプランにとってはプラスね」
「……まだ、あの走りをものにできたという自信はありません、今後はそのあたりの練習を希望したいです」
「そう……わかったわ。まだクラシック入りしていないからあまり負荷はかけれないでしょうけど、やれる範囲で検討します」
「……わかりました」
「それにしても……少し意外ね」
「え？」
東条が手に持っていた資料をめくりながら何気なく呟いた言葉に首をかしげるクラン。

「てっきり前につける先行策にこだわるかと思っていたから……憧れてるんでしょ？」
「……何がですか？」
「貴女がメジロマックイーンに憧れているというのはよく聞くわよ？だから彼女が得意な先行策を取っていると思っていたのだけど……これから経験をしっかり積んでいけば、思考力と判断力のあるあなたなら前での勝負も十分可能になるでしょうね」
「あ、いえ……そういうわけでは……」
「そう？……まぁ、まだ決定ではないけれど今後は追い込みの練習もして、物に出来るようなら今後は追い込みのレースプランも考えることにしましょう。適正距離については中距離から長距離を視野に入れつつね……それでいいかしら？」
「はい、よろしくお願いします」
その後これからの練習プランや次の出走を予定しているホープフルステークスについての確認等を済ませて帰宅することとなった。
チームの練習の指導に向かう東条を見送って寮に帰ろうとしたところで、学校の入り口に佇む人影に気が付いた。
「何をしているのです、トーラ？」
「お、クラン！待ってたっすよ～」
そう言って近寄ってきたトーラは手をこすって随分と寒そうにしていた。
まだ雪こそ振っていないとはいえ季節はもう冬、いくらコートを着たりタイツを身に着けたりしたところで、やはり学園の制服では防寒性にはいささか心もとない。
一部の生徒の中にはまるで毛糸の塊のように防寒具を重ね着する生徒もいるのだが、トーラは身動きが取りづらいからとほとんど防寒具を身に着けていない。
「何してるんですか？というか寒いでしょ……先に帰ったはずでは？」
クランはトレーナーがレースに随伴しているため軽い調整だけですぐに帰るとトーラが昼休みに言っていたのを思い出していた。

それを聞いてトーラはえへへ～と笑って見せた。
「そんなのクランを待っていたに決まってるっすよ！」
「いえ、待っていたって……約束していたわけじゃないでしょう？」
「それはそれっす！それにクランも今日は反省会と打ち合わせだけで帰るって言ってたじゃないっすか？」
「それでも……いつ終わるかわからないでしょうに」
「まぁ、ちょ～っと寒かったっすけど……こうして会えたんだから問題無しっす！」
「はぁ……わかりました。ところで待っていたと言いましたが何か用事でも？」
「そうっす！これから一緒にカラオケどうっすか？」
「カラオケ……ですか？」
「そうっす！まぁ私がライブの練習をしたいってのもあるっすけど……クランならお世辞抜きでダメ出ししてくれそうっす！」
「どういう評価ですか……はぁ、いいですよ。私もライブの練習なら問題ないでしょうし」
「へへ、やりーっす！それじゃ早速行くっすよ！」
スキップでも始めそうなほど浮かれるトーラにやや呆れながらも連れだって歩きだすクラン。
「そういえば……最近よく練習していますが、トーラは歌うのが好きなのですか？」
「あぁ～……まぁ、歌うことはちっちゃい頃から好きでしたけど、今はそれだけじゃなくて……目標があるんすよ！」
「目標ですか？」
「そうっす！私はその人に少しでも近づく……ちか、ちかづ……けるかなぁ、自分みたいなガサツなウマ娘じゃやっぱ無理かなぁ……」
「ああもぅ、ネガティブは良いですから……それで？」
「あ～えっと……その、その人はレースに出てるウマ娘じゃないんすけどね……歌がすっごく上手くて、私にとっては憧れで……目指したい人なんすよ」
「へぇ……思えばトーラからそういう人が居るって聞いたのは初めて

ですね」
「クランはマックイーンさんが憧れなんすよね？」
「だから……別に憧れがないわけじゃありませんが、そういう対象ではありません。それで……その人に近づきたいから歌を練習しているのですか？」
「まぁ……それもあるっすけど、それ以外にも……いつか立派なウマ娘になったら、その人にお礼を言いたいんすよ」
「お礼……ですか？」
「はい！実は……私、トレセン学園に入る前は成績が悪くて……学校内でのレースとか、地区で行われてる模擬レースではいっつもビリっけつだったんすよ」
「トーラが……ですか？」
トーラは彼女たちの代では最も注目されているウマ娘の一人だ。
恵まれた体躯から生まれる力強いスパートと持久力、そしてデビュー戦から一貫して逃げの走りで勝ち続けている。
しかもそれは大逃げと呼ばれる走りで、あのサイレンススズカやメジロパーマーを相手にしてきた数々のトレーナーたちは頭を抱え、その脅威を知らなかった新人トレーナーたちを現在進行形で絶望の淵に叩き落している。
そんな彼女がトレセン学園に入る前は勝ちの一つも望めないウマ娘だったなんて、なんの冗談なのかと思うことだろう。
「ほら、低年齢だと基本的には先行くらいでしか走らせてもらえないじゃないっすか？自分はそこまで駆け引きとか得意じゃないっすから……いっつも頭を押さえられて、焦って走ってるうちにスタミナを削られて……だから、走るのを辞めようかって思った時があったんすよ」
「そうなんですか……それで？」
「それでまぁ……やけになって練習もやめて……でも、練習しかしてこなかったから何していいのかわからなくなって……そしたら、ウマチューブで見つけたんすよ……あの人を」
「ウマチューブで？」

「はい！それで、その人の配信を見るようになって……ある日、その人にお便り……みたいなので相談したんすよ、そしたらその人が答えてくれたんすよ！自分の胸に手を当てて……燻る物があるならそれを燃やしてみろって」
「燻る物……ですか？」
「そうっす！そう言われて……一生懸命考えたっす、自分はあんまり頭は良くなかったっすけど……それでもいっぱい考えて……やっぱり思いっきり走りたいって思ったんすよ」
「……それで、走ったんですか？」
「それはもう、めちゃくちゃの我武者羅に走ったっす！駆け引きも位置取りも無し！ゲートが開いたらわき目もふらずに全力で前に出たっす！そしたら……今まで見たことも無い景色が見えたんすよ」
「景色ですか？」
「遮るものが何もない一面のターフ、体全体に打ち付けてくる風……それが気持ちよくて、夢中で走って……気が付いたらゴールしてたっす」
「……そこから今の大逃げで走るようになったってことですか？」
「そうっす！まぁ学校にいた指導員からは脚が壊れるとか成長に影響が～とか言われたっすけど、見ての通り体の頑丈さだけが取り柄っすからね！最後には納得してもらって、逃げで走れる体づくりを教えてもらったっす」
「そうだったんですね……」
　気が付けば普段から利用しているカラオケについていた二人は受付で手続きを済ませて部屋に入った。
「というわけで一日でも、一歩でも立派なウマ娘に近づくために今日もガンガン歌って練習するっす！」
「そう言うことなら厳しく採点させてもらいましょう……ところで、一ついいですか？」
「なんすか？」
「その憧れているという人は、どなたなのですか？」
「あぁ、そういえば言ってなかったっすね！その人はシルトマイヤー

ちゃんって言うんすけど」
「……ほぇ？」
トーラの言葉に思わず手に持っていたマイクを落としたクラン、大音響で鳴り響くハウリングにしばらく二人が身悶えしたのは言うまでもない事であった。

～＊～＊～＊～

「はぁ……疲れました」
あれから動揺を何とか隠してトーラの歌を採点したり私も歌を歌ったり、ライブの曲をパート分けで歌ったりしたのだけど……さすが目指す相手が相手なだけにトーラも歌はうまかったですね……まぁ、お姉ちゃんほどではありませんがね！
ちなみにトーラは延長込みで歌い続けた結果、帰るころには疲れ果ててご飯を済ませてシャワーを浴びたらすぐに眠ってしまいました。
「それにしても……なんで皆さん勘違いするんでしょうか？」
部屋に置いてある数あるぱかプチ、その中からシルトマイヤーちゃんを取り出して抱えるようにして抱きしめる。
これは初めて出たグッズの中でも一番のお気に入りのぱかプチです、しかもクレーンに登場した初日にその時持っていたお小遣い全部をつぎ込んで手に入れた逸品ですからね！思い入れが違うのです。
「そりゃ……その、カモフラージュ用に他のぱかプチも置いてますが……むぅ」
本当は声を大にして言いたい。
その配達をしていた姉は今とっても可愛いウマチューバーになってますよと！
私が憧れているのは常に前を走り続けていた姉の背中なのだと！
というかトーラが憧れてるその人私の姉ですって！言いたい！切に言いたい！これでもかと自慢したい！
「とはいえ……さすがに身バレはＮＧですからね……気を付けねばなりません」

ある日知らない女性が訪ねてきたときは驚きましたが、まさかあのお姉ちゃんがバーチャルウマチューバーになるなんて思いもしませんでした。
お姉ちゃんは何事にも一生懸命な努力家で、特に歌に関しては私はお姉ちゃん以上の人がこの世に存在しないと確信しています。
とはいえ……学校の友達の話を聞いたことも無ければついぞお姉ちゃんの友達という存在をこの目で確認したことも無かったので……そんなお姉ちゃんがウマチューバー？え？……大丈夫なんですかそれ？と思ったものです。
とはいえ懇切丁寧に説明され、またお姉ちゃんが所属する会社の事も聞いて大丈夫だと思えた私は、素直に応援することにしました。
お父さんなんかはいまだにそれがどういう活動なのかわかってないみたいですけど、でも配信をたまにお母さんと一緒に見ているみたいです。
「はぁ……妹というのも大変です」
特に最近は学校でマイヤーちゃんの話題が出るたびに冷や冷やさせられますからね。
そりゃ人気が出て有名になるのはとても嬉しいし、話題が出るたびに尻尾がわさわさしてしまうくらいですが……。
特に今日は同室のトーラがまさかのマイヤーちゃんのファンであることが判明しましたからね……。
「今まで以上に気を付けて生活しなければいけませんね……はぁ」
とりあえず、今日はもう疲れました……お気に入りのマイヤーちゃんお歌リストを流しながら眠ることにしましょう。

＃０９　憧れはすぐそばにあったりするもの

#10

私が毎週アルバイトをしている喫茶店はご年配のマスターさんが一人で営んでいたお店です。

私がアルバイトをするようになる前まではお一人でお店の事を全部こなしていたようなんですが、今は私がいるので力仕事やお店で使う材料の買い物なんかを任せていただいています。

買い物をするのは私が住んでるアパートの近くにある商店街、実は喫茶店もこの商店街の近くにあるので事前にマスターさんに電話をかけて何か必要な物があればお店に入る前に買ってから行くようにしているんです。

まだ見極めの難しい生鮮食品やコーヒー豆はマスターさんが信頼しているお店に連絡して用意しておいてもらうんですが、それ以外の物は私がお店に行って買っています。

この商店街にお店を構えている方達は皆さん喫茶店の常連さんでもあるので、伝えればすぐに品物を用意してくださいますし、普段の買い物でも顔を出すと喜んでもらえるので、普段の買い物もここでするようにしてるんです。

「あら茉莉ちゃん！いらっしゃいねぇ」

「こんにちは、おばあちゃん！えっと……」

「あぁ、喫茶店のでしょう？連絡をもらってこっちに用意してるから持ってくるわねぇ」

「わわ、ありがとうございます！あ、あの！私が持ちますから！」

「そお？それじゃお願いしようかしら」

「はい、任せてください！」

おばあちゃんが用意してくれていたのは喫茶店で出しているカレーに使うお野菜です、ニンジン玉ねぎジャガイモと基本のお野菜を揃えつつ、季節に応じて旬のお野菜を入れるのが喫茶店自慢のカレーライスなんです。

特に私のお気に入りの具はジャガイモです！これは一口サイズに

切ったあと油で一度軽く素揚げにしていて煮込んでも形が崩れないほっくほくのジャガイモなんですよ！
「重いけど大丈夫かい？」
「はい、これくらい大丈夫です！」
「そうかい？それじゃまたおいでね？」
「はい、ありがとうございました！」
おばあちゃん夫婦が営む八百屋さんをあとにして、あとは時間までに喫茶店に向かうだけとなりました。
とはいえまだシフトの時間まではちょっとありますね……どこかに寄り道をするのも良いかもしれません。
「もしかしたら何か面白いものが見つかるかもしれませんしね、ちょっと寄り道していきましょうか」
さてどこに行こうか……なんて考えていた時、ふと私の耳に小さいですが何かの鳴き声が聞こえてきました。
「ん？これ……猫、でしょうか？」
私たちウマ娘は耳、聴力がとても敏感なんです。
普段生活する中でも大きな音というのは私たちウマ娘にとって普通のヒト以上の騒音なんですよ？
私が普段使ってる大きめのキャスケット帽も耳を隠す以外に耳を音から守る意味もあるんです。
まぁ、イヤーキャップとかをすれば良いんですけど、普段使いしないせいか、耳になにかつけるのはどうにも違和感があって……。
「えっと……こっちかな？」
そんなわけで喧騒に紛れてしまうような小さな猫の鳴き声を聞き取った私は商店街の隙間にある路地裏に入りました。
一本路地に入るだけでそこはもうさっきまで賑やかだった商店街とは違って、密集した民家が連なる細く入り組んだ小道になります、なんだかこういう道って通るだけでワクワクしますよね！
「おーい、猫ちゃーん？」
怯えられないように声をかけながら声のする方にゆっくりと歩いていくと、商店街から見てすぐの電柱のそばにあるごみ捨て場から声

が聞こえてきました。
「みゃぁ……みゃぅ～」
「わ、かわいい！」
そこにいたのはまだ生後数ヵ月くらいの小さい子猫でした、ただ……。
「でもこの子……捨てられたのでしょうか？」
その小さな猫はタオルの敷かれた段ボールの中にいました、近所のヒトが寝床として用意したにしては場所が場所ですし……。
猫は私の顔を見ると小さな体を目一杯動かして段ボールをよじ登って外に出ると、私の足首に体を押し付けたり靴ひもを咥えて遊び始めてしまいました。
「あ、あぅ……か、かわ……いや、でも……ど、どうしましょう？」
手にはこれからバイトに向かう喫茶店の買い物袋、それに喫茶店に猫をつれていくのは流石に……いや、でもここでこの子をおいていくなんて……。
「あ、あぅあぅあぅ～……どうしましょう？」
荷物を喫茶店に急いで持っていってもいいですが、その間にこの子がどこかに行ってしまったら心配ですし……かといって一緒に喫茶店に行くのはきっとマスターさんのご迷惑になりますし……。
「うううぅ……どどど、どうすればぁ……」
「あの……どうかしましたか？」
「……ほぇ？」

～＊～＊～＊～

Ｓｉｄｅ：イクノディクタス

私の名前はイクノディクタス、中央と呼ばれるレースで今も走り続けている一人のウマ娘です。
トゥインクルシリーズからドリームトロフィーリーグへと移籍した後も前と変わらず一つでも多くのレースで走れるよう、今もトレー

ニングを欠かしてはおりません。
今は学園を離れ同じチームで過ごした仲間達と、そのチームを率いていたトレーナーからの紹介で見つけたアパートで寮のように2人一組でルームシェアをしております。
「おや、あれは……？」
今日はそんなルームメイトであるターボはなんでもご実家の方の学友に合うために、隣室であるネイチャは実家の手伝いに行くということでそれぞれ3日ほど留守にし、タンホイザは何故かネイチャにくっついて共に出払っております。
思えばトレセン学園でチームカノープスに所属してから何をするにしても常に一緒に居た彼女たちが居ない日常というのは久しぶりですね。
ネイチャからは冷蔵庫に入りきらないほどの大量のタッパーに詰め込まれた料理を献立と共に渡され、何かあればすぐに連絡するようにと言われています。
ネイチャには掃除や炊事等でお世話になっておりますし、料理は非常に美味しいので大変ありがたいのですが……心の隅で「お前はおかんか!?」と思ってしまいましたね。
私とてウマ娘としてきちんとした栄養学を修め、日々栄養バランスの良い食事作りを心掛けていたのですが、どうにも私の料理は皆さんの口に合わない様子……おかしいですね、栄養は完璧なのですが……。
さて、現在は皆が出払って2日目、今日は消耗品のいくつかを買いにアパートのすぐ近くにある商店街へと来ていたのですが……。
「あの方は確か……同じアパートに住んでおられる方でしたね」
商店街の中ほどにある路地、八百屋の隣にあるガレージ兼倉庫と今日は臨時休業しているメガネ屋の間にあるそこは商店街の喧騒からは完全に隔離されたような静かな場所のようでした。
その奥で荷物を片手におろおろしている女性が見えたので足を止めてみると、どうやらなにか困っている様子。
そしてその横顔や着ている服装からその方が私と同じアパートに

住んでいる女性であることがわかりました。
　声をかけたことはありませんでしたが、アパートの他の住人の方と仲良さげに会話をしている姿を見かけた事がありますし、よく管理人である大屋さんを手伝って掃除や蛍光灯を取り替えるなどしているのを見かけたこともありました。
「なにかあったのでしょうか……？」
　それほど親しい間柄というわけではありませんが、困っている様子を見かけたのならば助けるのも何かの縁というものでしょう。
「あの……どうかしましたか？」
「……ほぇ？」
　私が声をかけたことでやっと背後に誰か居たことに気がついたのか、その……少々抜けた表情でこちらを振り向いた女性……いえ、この場合は少女でしょうか？と目が合いました。
「なにかお困りのようでしたので……」
「あ、あのあの!?えと、そのぉ……ど、どちら様でしょうか？」
　そう言われて、そういえば今日はネイチャに言われて普段はあまりしない変装をしているのでしたね。
　普段であればファンの扱いに慣れているネイチャや誰とでもすぐに話せるターボやタンホイザが居るのですが、私一人では多数のファンに囲まれても上手く対応できるかわかりませんから……。
　しかし今はまだ街中、ここで姿を現してしまっては変装の意味もありませんし……なによりも騒ぎになればこの方にもご迷惑をおかけしてしまいますね。
「いえ、私は何も怪しい者ではなく通りすがりのただのウマ娘ですので」
「は、はぁ……そうなんですかぁ」
　自分で言っておいて大変恐縮なのですが……大丈夫でしょうか、そんなにあっさり納得されるとこちらも心苦しいのですが……あぁ、今ならネイチャの突っ込みがとてもありがたいものなのだったと理解できます。
　とはいえここで発言を撤回しても話が拗れてしまいますから、もう

ここは勢いで押し通しましょう。
「ええ、そうなんです。ところで先ほどからお困りの様でしたが？」
「あ！その、えっとぉ……」
「みゃぅ！」
「……猫、ですか？」
「あ、はい……そうなんです、けどぉ……」
少女の足元から声が聞こえたので見てみれば、確かに小さな子猫が靴ひもでじゃれている様子でした。
毛並みは三毛猫、見たところ生後2～3か月といった感じでしょうか？
「ふむ、見たところ野良……というよりも、捨て猫でしょうか？」
「はい……あ、ちちち違いますよ!?私が捨てたとかじゃなくて!?」
「いえ、それは大丈夫です。あなたがそのような事をする方には見えません。ふむ……鳴き声につられて立ち寄ったところ懐かれた、といったところでしょうか？」
「はい……そうなんです」
見たところ度胸？この場合好奇心が勝っているのか……随分と人慣れしていて私が近寄っても逃げる様子も無く、興味津々といった様子でこちらを見上げています。
そばに置いてある段ボールは雨風にさらされたのかひどく汚れており、中に敷いてあるタオルも同様。
捨てた人間の最後の情けなのかおそらく餌を入れてあったであろう小皿は空っぽで、自分で食べたのかはたまた他の野良にでも食べられたのか……。
「ふむ……それは買い物の途中なのでしょうか？」
少女が手に持っている買い物袋はパンパンに膨れ上がっていて、どうやら野菜の類が詰め込まれているようですね。
「いえ、実はこれからバイトがあって……それで、これもバイト先の買い物で……」
「……ではこの猫を飼うにしろ保護団体に預けるにせよ、ひとまずここからは移動しましょう」

「あ、そそそ、そうですね！えと……」
「この子は私が見ておきますので、まずはバイト先に一度連絡を入れてみてはいかがでしょうか？」
「は、はい！そうします……えっと……」
一先ずバイト先に連絡するように促してから、足元で小枝で遊ぶ子猫に手を伸ばしました。
子猫は私の指先をスンスンと匂いを嗅いでから小さな手で何度か叩く仕草を見せ、それが終わると体をこすりつけるようにしてじゃれてきました。
なるほど……私は今まで猫などの動物を飼うといった事をしてきたことはありません、ネイチャがよく猫の動画をウマホで見てにやついているのを横目にしていた程度でした。
ですが、こうしてじゃれてくる様子を見ていると確かにネイチャがにやけてしまうのも納得がいきますね。
そういえば、猫をもふりたいというのはわかるのですが、吸いたい……というのはどういった意味なのでしょうか？

「はい、はい……え、でも……はい、わかりました……お待たせしました！」
「いえ、それで？」
「えっと……私のバイト先は喫茶店なんですが、子猫も一緒に連れてきなさいって……」
「そうでしたか、とても良いバイト先ですね……では、行きましょうか」
私はさっそく子猫を今までいた段ボールに入れると、それをそのまま抱え込みました。
「あ、あのあの!?服が汚れちゃいますよ!?」
「構いません、洗えばいいだけですし……それで、喫茶店というのは？」
「あ、えと……こ、こっちです！」
そう言われて少女に案内されながら一度商店街の中に戻りました、

時々好奇の眼差しを向けられることもありますが……まぁ、レースに出ている時ほどではありませんね。
「う～ん……どうしよう、うちで飼えるかなぁ……」
「……あの、不躾で失礼かもしれませんが……クラウンパレスにお住まいでは？」
「はひ!?え、えと……は、はい。そうですけどぉ……？」
「やはりそうでしたか、いえ……私もそこに住んでいるのです、あなたの事も何度か見かけていたので……よく大家さんのお手伝いをなさっていますよね？」
「は、はい！そっか……同じアパートの方だったんですね……」
「ええ、それで……大変心苦しいのですが……確か私たちが住むアパートはペット不可の物件だったかと」
「え……あぁ、そっか……うぅ、じゃぁどうしよう……」
「……まずは、この子を無事喫茶店まで送り届けましょう、それから考えればよいかと」
「そ、そうですね……あ、ここです！」
少女に案内されてたどり着いたのは商店街から少し歩いた先にある、一戸建ての住宅を改築して作られた喫茶店でした。
周りはすでに商店街からは離れているため静かなもので、時折近所の住民や仕事中のサラリーマンがちらほらと通り過ぎていきます。
「マスターさん、おはようございます」
「おや、茉莉さんおはようございます、それと……そちらは？」
マスターさんと呼ばれた方はカウンターの奥で作業していた手を止めるとこちらに来てくださいました。
「あ、ええっと……」
「私はこちらの茉莉さんと同じアパートに住む通りすがりのウマ娘ですので、どうぞお気になさらずに」
「そうでしたか、ふむ……それで、そちらが子猫ですか？」
「あ、はい！そうなんですけど……」
抱えている箱の中を覗くと周りが気になるのか周囲をきょろきょろと見まわしていました、出会った時にも思いましたが中々好奇心が

旺盛な性格のようですね。
「ふむ、生後3か月かそこらへんでしょうか……こちらをどこで？」
「えっと、商店街の裏路地で見つけて……」
「なるほど、ではそうですね……さすがに店内に置いておくことはできませんが、今日は一先ず奥の休憩室に置いておきましょう。茉莉さんお願いできますか？」
「あ、はい！それじゃついでに着替えてきますね……あの、運んでくださってありがとうございました」
「いえ、それほどのことではありません、どうかお気になさらず」
嬉しそうに子猫の入った箱を受け取ってお店の奥に行く茉莉さんを見送ってから、私もそろそろ帰ろうかと思ったところで、マスターさんが横からそっとタオルを差し出してきました。
「折角のお洋服が汚れていますよ、これでお拭きください」
「え、あぁ……ありがとうございます」
「いえいえ、こちらこそ茉莉さんを助けてくださりありがとうございます。せっかくですからコーヒーの1杯でもどうでしょうか？」
「え、いえ……そんな、お構いなく」
「いえいえ、せめてものお礼ですよ……今は昼休憩の時間ですから他のお客さんもいらっしゃらないですし」
「あの……では、1杯だけ」
マスターさんの勧めでカウンターについた私は改めて店内を見渡しました、落ち着いた内装に品の有る家具。
どこか古めかしい雰囲気があるのはきっと年代物と思えるアンティーク家具で統一されているからでしょうか？
とはいえそれは不快なものでは決してなく、初めて訪れたお店だというのにどこか懐かしく落ち着いた気持ちにさせてくれます。
「どうぞ、こちらは私がブレンドした当店オリジナルとなっております」
「あ、どうも……」
カップを受け取ると香ばしいコーヒーの香りが漂ってきました、学園でたまにマンハッタンカフェさんのコーヒーをごちそうになるこ

とがありましたが、それとはまた違った感じですね。
「いい香りですね」
「そうでしょう？こちらは常連のウマ娘さんのお客様の要望でさわやかな香りであっさり飲めるものをと頼まれたものなのですよ」
「なるほど……うん、とても美味しいです」
「ありがとうございます……イクノディクタスさんほどの名ウマ娘さんに認められたのなら、箔がつきますね」
　その言葉に思わずマスターさんの顔を見ると、笑いながらウィンクしておられました。
「……バレていましたか」
「ええ、私は何かとウマ娘さんとは縁のある人生を歩んできておりますので……それに、茉莉さんからあなたのお名前を度々聞くことがありますから」
「私のですか？」
「ええ、茉莉さんはウマ娘さんのレースがとてもお好きなようで、他にもナイスネイチャさんやツインターボさん、マチカネタンホイザさんの事もよく常連のお客さんとお話しているようですよ？」
「そう、だったのですか……ありがたいです」
「ふふ、ただ茉莉さんは少々人見知りですので、ここでの出会いは秘密のままにしたほうがよろしいかと」
「そうですか、では引き続き私は通りすがりのウマ娘ということで」
「ええ、わかりました」
　そう言ってマスターさんと笑いあいながらコーヒーを楽しんでいると、お店の奥から喫茶店の制服に着替えた茉莉さんが戻ってきました。
　白のシャツに黒のスラックス、そして深緑のエプロンと……ピンポイントにあしらわれたエプロンの赤と金色の刺繍の色も相まって、なんだかシンボリルドルフ生徒会長を思わせる配色ですね？
「お待たせしました、マスターさん……それで、そのぉ」
「茉莉さん、まぁ落ち着いてこちらに。まずはコーヒーでもお淹れしましょう」

「あ、はい……ありがとうございます」
「ふむ……マスターさん、こちらで子猫を引き取ることは？」
　私がそう聞くと、マスターさんも少し困った顔で笑いました。
「そうですねぇ……私としては寂しい老後を過ごす相手には良いのですが……喫茶店のこともあるので中々……」
「あぅ……やっぱり、そうですよねぇ……」
「となると、やはり保護団体に？」
「そうですね……」
「あうぅ……そうですよねぇ」
　そういう茉莉さんは少し寂しい様子、確かに出会って間もないとはいえあれほど小さな子猫に懐かれたとあれば、多少の情が湧いてしまうのも致し方ないでしょうか。
「……それならば、少しいいでしょうか？」
「なんでしょう？」
　確かに私や茉莉さんが住むアパートでは飼うことは出来ません、この喫茶店でもさすがに動物を飼うというのは衛生的に見て良くないでしょう。
　ただ、私のすぐそばには丁度いい所に猫好きがいるのですよ……それも動画を見ただけでにやにやしてしまうくらいの。
「ちょっと心当たりがありまして……そちらに一度連絡をしてもよろしいですか？」

Ｓｉｄｅ：イクノディクタス　ｅｎｄ…

～＊～＊～＊～

《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「ふぉぉぉおおおわあああ！かわいいいいいい」《／ｆｏｎｔ》
「ね、ネイチャちゃん？」
「おぉ～ターボも見たい！み～た～い～！」
　そこは住宅街の中にある喫茶店、その店内には夜も遅いというのに

複数の人影があった。
　そのうちの一人、通りすがりのウマ娘改めイクノディクタスが子猫の引き取り手に心当たりがあると連絡を取ったのはナイスネイチャだった。
　連絡を入れて子猫の事を話すと二つ返事ですぐに向かうと返答され、一度商店街で合流してから再び喫茶店に戻ってきたのだが……。
「タンホイザはわかりますが、なぜターボまで？」
「ん？ターボは元々今日の夜までには帰って来るつもりだったぞ？そしたら駅でネイチャを見つけたんだ！」
「そうだったのですか」
　どういうわけか駅にはナイスネイチャとマチカネタンホイザだけじゃなくツインターボもおり、結局いつものカノープスの面々で喫茶店に戻ってきたのだった。
　ちなみに子猫を保護した張本人である茉莉はバイトの時間が終ってすでに帰宅している、本人は後ろ髪が引かれる様子だったが、マスターの説得により帰宅していた。
　もし今ここに茉莉がいれば、尊みに溢れかえってたぶん息してないだろうことはマスターにも容易に想像できたのだった。
　余談であるが、茉莉は結局このことが縁となり度々この喫茶店を訪れるようになったチームカノープスの面々と出会うことになるのだった……。
「皆さんコーヒーでもどうですか？」
「あ、ありがとうございま～す」
「ターボカフェオレがいい！」
「ターボ、あまり厚かましいことは」
「いえいえ、構いませんよ。イクノディクタスさんもどうですか？」
「いえ……さすがに今度はお金を払います。タンホイザもターボもちゃんと払ってください」
「は～い……」
「ん～ターボはこのチョコバナナケーキも食べたい！」
「ええ、かしこまりました」

「まったく……ネイチャもいい加減帰ってきてください。その猫吸いとやらは家に連れ帰った後にでもできるでしょう……？」
「あはは～ネイチャちゃんいいなぁ～……写真撮ってウマッターにあげちゃお～」
「っは!?……いかんいかん、猫の魅力にやられちゃってたねぇ……ところでイクノ、この子猫どうしたの？」
「あぁそれは……まぁ、親切な方が見つけたんですよ。それで引き取り手をどうしようかとこのマスターさんと話していた時に、ネイチャならばと連絡したのです」
「へぇ～そうなんだ。ならその親切な人にもちゃんとお礼言わなきゃねぇ～」
「あぁ～……まぁ、その」
「すみませんが、その人は少しシャイな方でして……お礼は私の方から申し上げておきますよ」
「あら、そうなんだ……じゃぁマスターさんよろしくお願いしますね！」
「ええ、確かに」
「それにしても、三毛猫ですかぁ～……名前はミケちゃんですね！」
「え～そこはもっとこう可愛い名前にしたいなぁ……っていうか飼うのはネイチャさんなんですけど!?」
「ふむ、ホームズというのはどうでしょうか？」
「刑事を相棒に探偵にでもするつもりか?!」
「ならネイチャちゃんは何が良いの？」
「それはこう……み、みぃちゃん……とか……」
「……あはぁ～」
「……っふ」
「なんか文句あるのかお前らぁああ!?」
「ん～、ターボもそれはどうかと思うぞ？」
「た、ターボにまでダメ出しされたぁ……」
「そうですね、せめてもっと真っ当で可愛らしいものを」
「いや、そうじゃなくて……だってこいつオスだぞ？」

「……へ？」

10　小さな命の大きな幸運
それは一つの奇跡

#11

まだ朝日も昇らない時間、朝霧が仄かに漂うそこは閑静な住宅街に囲まれた場所にあった。
住宅街の中にありながら小高い丘であるその場所は森林公園となっていて、休日などには多くの近隣住民がそれぞれ思い思いのひと時を過ごしている。
そんな公園も日も登らぬ早朝となれば人影もまばら、いるとすれば早朝の空気を楽しむ目的で散歩に出る者か、もしくは……。
「ふぅ……ここに来るのは久しぶりですね」
ジャージを着こみ、早朝故の寒さからその上に薄手のジャンパーを羽織ったウマ娘が一人。
彼女は立華茉莉、ごくごく普通のどこにでもいる一般ウマ娘……だったのだが、どういうわけか気が付けばウマチューブでそれなりの人気を得て今では立派なバーチャルウマチューバーとなっていた。
そんな彼女は習慣化したランニングで自宅から少々離れた場所にある公園まで来ていた。
そこはかつて、まだレースを夢見て走っていた時にトレーニングしていた場所でもあった。
「中学校で練習もやめて、進学先もトレセンから変えてから来てませんでしたけど……変わってませんね」
とある案件を切っ掛けに始めたランニングは最初こそ色々とひと悶着があったにせよ、現在も楽しく続けられていた。
元々ウマ娘であるので走る事は楽しめており、今朝は少し違う方向に行ってみようと思って気の向くままに走ってみれば、気が付けばどこか懐かしい風景の中に迷い込んでいたのだった。
周囲を見渡せば散歩をする老人や自分と同じようにランニングを行うヒトなどがちらほらと見えた。
「よし、私も走りましょうか」
早速走り始めれば、久しぶりに訪れる場所だというのに道にあるわ

ずかな起伏も坂のちょっとした傾斜の違いも手に取るようにわかる、いや思い出せていた。
それくらい無意識でも体が反応して走り方を調節できるくらいには茉莉はそこで走り込んでいたのだった。
「懐かしいなぁ……まさか、またここを走る日が来るなんて思わなかったなぁ」
まだ自分が小学生の時、トレセン受験に失敗して地方トレセンへの進学率が高い中学校に進学したのだが、そこではすでに茉莉が「中央トレセンの受験に落ちた」ということは知れ渡っていた
親しい間柄以外には中央トレセンを受験したことを教えたことは無い、それでも学校という閉ざされたコミュニティというのは情報に対して敏感だということなのだろう。
別に茉莉自身それに引け目を感じていたわけじゃない、周囲だってそのほとんどは「そうなんだ」程度の認識でしかなかった。
だが中にはその事実に過剰に反応する者たちがいる、ウマ娘のそれも多少なりとも名の知れた家の者たちだ。
それでも大っぴらに喧伝するようなことはしなかったものの、口さがない者達からは「寒門のウマ娘が良い気になって」とか「身の程知らず」など影から言われることがあった。
それでも地方でもいい、レースに出て夢の舞台に立つ……その想いで走り続けた茉莉だったが、やがて周囲と徐々に力の差が出始めたのは2年生の夏。
進学を前にした頃には同学年ではもう勝負が出来ないほどの実力差がついてしまっていた。
誰が悪いわけじゃない、何かが間違っていたわけでもない……ただ、茉莉が速く走る事に致命的に向いていなかっただけなのだった……。
やがてそれを悟った茉莉は練習を辞め、進学先も地方トレセンから今の学力で入れる高校へと変えたが、それでも日々練習漬けで疎かとなっていた学力では立ち行かず、かろうじて定時制の高校への入学が叶ったのだった。

「……っふ……はぁ……はぁ……」
それでも辛い日々だけではなかった、ともに練習をする友人もいたし、励ましあって走り競い合っていた仲間達だっていた。
何よりも走る事が好きだったし走っていることが何よりも楽しかった、たとえ結果が伴わなかったとしても走っているその瞬間、心の中は楽しさで満たされていた。
今走るこの道だって楽しい思い出で溢れていた……だが時が流れ次第に見えてきた壁の高さに、いつしか茉莉の脚はこの場所に向かうことを拒んでしまっていた。
しかし時が経ち見えるもの、聞こえるものが違ってきたことで、やっと茉莉はこの場所に来ることが出来た。
「はぁ……はぁ……あは、やっぱり……ここを走るのは楽しいですね」
小刻みに変わるアップダウンが走る体に負荷をかける、ともすれば曲がりくねった道が見通しを悪くして逸る行き足を鈍らせる。
きっと広いターフを走るウマ娘にはとんと無縁な状況かもしれない、それでも茉莉は楽しんでいた。
そうして一通り公園の中を走り、やがて木が生い茂る区画に入った時、ふと頭の片隅に思い出す姿があった。
「そういえば……あの娘は、今も走ってるんでしょうか？」
それは全てを諦める少し前。
仲間との練習からも離れ、それでも我武者羅に走り、ただ諦めるしかない高い壁の前でもがいていた頃のこと、ふと後ろを誰かが走っているのを感じる時があった。
ただその時は夜も遅く、並び立つ木立の影で暗く見通しの悪い道だったこともありはっきりとその姿を見たわけではなかった。
その娘はただ真っ直ぐ自分の事を見て走っていた、いやけしてその時に目があったわけじゃない、でもその娘は私を見ている、何となくだがそう感じたに過ぎない。
唯一わかったのは、長く綺麗な黒鹿毛の少女だったことくらいだ。
「もし……走ってるなら、いいな……」
記憶の片隅、色あせてしまった朧げな記憶の中のウマ娘を思い、彼

女は一人黙々と走っていった。

～＊～＊～＊～

Ｓｉｄｅ：ライスシャワー

府中にある日本ウマ娘トレーニングセンター学園、そこでは沢山のウマ娘が夢を叶えるために今日も練習を重ねていた。

時間は放課後ということもあり、チームでトレーニングをしている者もいれば気の合う者同士で切磋琢磨している者たちの姿もある。

その中で坂路と呼ばれるトレーニング場でも２人のウマ娘が汗を流していた。

「はぁ……はぁ……」

「ふぅ……ふぅ……大丈夫ですか、ライス？」

「う、うん……ありがとう、ブルボンさん。ライスは大丈夫……はぁ……ブルボンさんこそ大丈夫？」

「激しいスタミナの消費を検知、早急の水分の補給と共に激しく消耗したエネルギーの回復行動に専念すべきと判断。つまり……疲れました」

「あはは、そっか……」

ブルボンと呼ばれたのはミホノブルボン、３冠こそ叶わなかったが無敗で皐月・日本ダービーを勝ち取った２冠のウマ娘であり、当初短距離向きだと言われる中で並々ならぬ努力によりダービーウマ娘まで上り詰めた。

そしてそのブルボンと共に練習しているのはライスシャワー、小柄ながらもしなやかな走りが持ち味であり、ミホノブルボンの最後の１冠であった菊花賞、そしてメジロマックイーンの天皇賞春の３連覇を阻止しての勝利を挙げた実力を持つステイヤーだ。

二人はすでにトゥインクルシリーズからドリームトロフィーへ移籍を済ませており、今もなお先頭を争い続けるライバルでもある。

「ありがとうね、ブルボンさん……ライスの練習に付き合ってくれて」

坂路の片隅に置いていたタオルで汗を拭きながらライスがブルボンに頭を下げる。
「いえ、ライスとの練習はとても有意義なものです、それに……友達、ですから」
「あ……うん、ありがとう！」
「こちらこそ……ところでライス、少しいいでしょうか？」
「なに、ブルボンさん？」
「ライスは私やマックイーンさんを破るほどの実力を持つウマ娘です、確かに宝塚での故障こそありましたが……こうして一緒に練習して改めて実感しました、ライス……貴女は確実に強くなっている、それこそ私と菊花賞を争った時よりも、ずっと……」
「そう、かな……？でも、ブルボンさんにそう言ってもらえるなら、嬉しいかな……」
「ですから、なおの事わかりません。どうしてここまでの練習を？」
「えっと、それは……やっぱり、走ってた方が楽しいし……えと」
「……失礼しました、ならば言葉を変えます。ライス……貴女は今誰の背を追っているのですか？」
ブルボンの言葉に汗をぬぐっていたライスの手が止まった。
「……あはは、やっぱり……わかっちゃう、かな？」
「ええ……私は貴女の友達で、ライバル……ですから」
「そっか……友達で、ライバル……」
「はい、なので私は知りたいと思っています。今ライスの目には誰の背が見えているのか」
「うん……そうだね、ここじゃあれだから……とりあえず片付けしよっか？」
「わかりました、練習プロセスを停止。撤収プロセスに移行します」
後片付けを終えた二人は汗を流して着替えをし、今は学園にあるカフェを訪れていた。
夕食を取るウマ娘や食後の団欒を楽しむ傍らで、二人は奥の席に座り各々が注文した飲み物に口を付けた。
「えっと、それで……私が頑張ってる理由、だよね？」

「はい、現状の実力とデータベースから照合した結果ドリームトロフィーにおいてもライスは指折りの実力者なのは疑う余地がありません」
「あはは……面と向かって言われるとちょっと恥ずかしいね……」
　顔を赤くしながら、それでも友達でありライバルでもあるブルボンから褒められたことが嬉しくて笑顔になるライス。
「えっとね……ライスもね、今まで走ってきて……ブルボンさんやマックイーンさんのように強いウマ娘に勝つために頑張って、今では競い合えるくらいにはなったって……そう思うんだ」
「はい、ライスの実力はすでに私やマックイーンさんに引けを取りません。長距離で限定すれば私の勝率も格段に下がることが予想されます」
「えっとね……でも、最近ね……そう思えるようになって、そうしたら……そのもっと先にね、見えてきたものがあるの」
「見えてきたものですか？」
「うん、その……これは、たぶんライスの原点みたいなものなんだと思うんだ……」

～＊～＊～＊～

　その娘に出会ったのは、まだライスがトレセン学園へ入学するよりも前だった。
　当時の私はウマ娘のレースに夢中で、私もいつかあの世界に入ってターフでたくさんの人から応援や祝福を受けるんだって、そればかり考えてた。
　だからライスはいっぱい走ってた、同学年の子供たちが友達と遊んだりしている時も、雨の日も風の日も……。
　そんなある日、いつもとは違う場所で練習してみようと思って住んでいる家から少し離れた場所を走っていたの。
　そこは大きな公園で、ウマ娘だけじゃなくてその近くに住んでるヒトも散歩をしたり、ランニングをしたりすることが出来るくらい大き

い公園だったんだ。
少し小高い丘の上に作られた公園だったから吹き抜ける風が気持ちよくて、私はすぐにその場所が気に入ってそこで練習するようになったんだ。
たまにジャージを着たウマ娘が何人か固まって走っていたから、きっと近くの学校のウマ娘達もここで練習してたんだと思う。
だからライスもランニングしたり、たまにはのんびりお散歩しながら歩いたり、ベンチでのんびり読書をしたりしてたんだ。
ある時ライスの学校で開催される模擬レースに出ることになって、それでその日は少し遅くまで走り込もうと思って公園を訪れたの。
「あ、あの娘……」
そうしたら、一人のウマ娘が走ってるのが見えたの、たぶん同じくらいの年齢の娘だったと思う。
着ているジャージがたまに見かけてた人達と一緒だったから、きっと近くの学校の生徒だったんだと思うんだ。
それで、その人は黙々と走ってて……フォームはウマ娘としてはお世辞にも綺麗じゃなかったけれど、その横顔はとっても楽しそうで……。
その姿に見とれちゃって……見えなくなるまで見送ってから慌てて私も練習するために走り出したんだ。
その日は遅くまで走って、暗くなったころに止めたんだけど……その娘の姿はもう無くて、結局その娘がいつ帰ったのか分からなかった。
それでその日から同じ時間帯に走ってたらたまにその娘を見かけるようになって、ある時気になって後を追いかけながら走ったことがあったの。
ゆっくりだったから後を追いかけるのは楽……そう、思ってたんだけど。
「違ったのですか？」
「うん、あのね……ライス、結局その娘について行けなかったんだ」
「ついて行けなかった……ライスがですか？」

「あはは……あの頃は今みたいなスタミナはまだなかったから……それでも、同じ学年の娘達よりは長く走れる自信があったんだけどね」
最初は問題なかった、大きな公園をゆっくり回って1周。
途中小さな坂や大きく曲がりくねる道はターフで走り慣れているライスにはどこかもどかしくて、そのせいかいつもよりもスタミナの消耗が早かった。
それでも大丈夫だと思ってその背中を黙々と追い続けたんだけど……それが2周、3周と続いて……。
「結局私がバテちゃって……途中で追いかけるのを辞めちゃったんだ」
「ライスが諦めるほど……私は今のライスのデータしかインプットされていないので判断できませんが、現状「感情：驚愕」が発生しています」
「うん、それでね……」
疲れてベンチで休みながら、目の前を黙々と通り過ぎるその娘を見てたんだけど……何周しても疲れた、とか苦しい、とか見せなくて凄く楽しそうに自然体で走っていたの。
そのうちライスも帰らないといけなくなって帰ったんだけど、その時もその娘は走り続けてたんだ。
どうしてそんなに走れるのか、ライスは不思議に思って……だからその日からその娘の後ろを走りながらマネしてみようって思ったんだ。
「では、今のライスの走りの原点というのは」
「うん、その娘なんだ。それまでいっぱい走ってきたし学園に入って、おに……トレーナーさんに出会えて、二人でいっぱい練習して今の走り方になったけど……」
そういえば、ライスが初めてお兄さまの前で走った後、楽しそうに走るけど何処かライスには合っていない走り方だねって言われたんだっけ……。
それで、えっと……その娘の真似をしながらしばらく走った後、ライスは学校の模擬レースに出たんだけど……レース途中で先頭争い

をしていた娘達が転倒して、ケガは大したことなかったんだけど結局レース自体は無効になっちゃって。
　それで、目標だったレースがそんな形で終わっちゃったせいからかな……何となく走る気になれなくて、しばらくたってからあの公園に行ったんだけど。
「あれ……あの娘、いないのかな？」
　いつもだったら走っているコースにその娘の姿は無くて……きっとそういう日もあると思って……でも、それから何日も何日も同じコースを走ったけど、その娘を見かけることはなかったんだ。
　それで、ライスが不思議に思って丁度近くで見かけた同じジャージを着ている娘に聞いてみたんだ。
「あの、その……」
「ん、どうしたの？」
「貴女……見かけない娘ね、どうしたの？」
　休憩中だった二人に声をかけたんだけど、二人とも嫌な顔をしないで聞いてくれたんだ。
「えっとね、その……ちょっと、聞きたいことがあって」
「私達に？」
「うん……えっとね、あっちのコースを走ってた娘が最近見かけなくなって……それで、どうしたのかなって……」
「あっちのコース？」
「あっちって誰か走ってたっけ……？」
「えっと……あ、もしかしてタチバナさんかな？」
「タチバナ……さん？」
「うん、私たちと同じ学校の娘なんだけど……あぁ、でも……」
　そこでその娘達は言いづらそうに顔を見合わせてたんだけど……。
「多分、もうその娘はここに来ないと思う」
「……え、なんで？」
「その娘……もう、走るの辞めるって」
「辞める……な、なんで!?」
「私達だってなんでって思うけど……でも、もう走らないって……そ

れに、進学先もレースと関係ない高校にするって」
「そんな……なんで……」
「……タチバナさんも頑張ってたけど、学内のレースでも結果出せてなかったから……諦めちゃったんだと思う」
「そんな……」
「えっと、あの……それじゃ、私たちも練習があるから」
そう言って二人は走って行っちゃった……私はショックでその場から動くことが出来なかった。
あんなに楽しそうに走ってたのにって……当時の私は純粋だった、だから結果が出ない娘の気持ちをまだ知らなかった。
きっとそれは傲慢でもあったんだと思う、だからなんでって……そればっかりだった。
それからは前から使っていたトレーニングコースで練習して、トレセン学園に入学して……レースに出て、色々あったけどやっと誰かのために頑張って走れるライスになれたんだ。
あの頃に比べれば格段に速く走れるようになった……それでも私の目にはしっかりと見えているの。
あの公園のコースを変わらないペースでただ黙々と走り続ける背中が……二度と追い越すことが出来ない背中が。
今思えば、きっと私は悔しかったんだ……あの背中と一緒に走ることが出来なかったのが、追い越すことが出来なかったことが悔しかったんだ、でも……。
「わかってはいるんだけどね……もう無理なんだってことくらい……でも、最近ふとその背中を思い出して……」
「なるほど、そう言うことでしたか……」
「ごめんね、こんなことブルボンさんには関係ないのに……」
「いえ、そんなことはありません。それに私自身そのタチバナさんという方に興味が湧きました。それほどの長距離を苦にしないウマ娘……もし、その方が今も走っていたら菊の冠は私でもライスでもなく、その方の頭上にあったのかもしれないのですから」
「あはは……そう、かもね……」

「……ライス、夕食後の予定はありますか？」
「え？ううん、特には無いけど……？」
「では、今度は私の練習に付き合ってください……ライスの話を聞き、私の中に「感情：奮起」が発生、今すぐにでも走らなければ解消できないという診断結果が出ています」
「あはは……うん、わかった」

Ｓｉｄｅ：ライスシャワー　ｅｎｄ…

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶　▶━　・ライブ

チャット〉

『久しぶりだね！雑談するよー！』

シルトマイヤー【セカンドライフ3期生】　メンバーになる
チャンネル登録
チャンネル登録者数　9．1万人

「皆ぁ！久しぶりだねこんまいやー！セカンドライフ3期生のシルトマイヤーです！」
コメント：きちゃー！
コメント：待ってた！
コメント：こんまいやー！
コメント：こんまいやー！こんまいやー！こんまいやー！!!!!
コメント：っよ!!
コメント：っよ！
コメント：っよ！紺舞屋!!
「いやぁ、最近はレコーディングとか収録とかで色々忙しくて中々配信出来てませんでした、ごめんね？」
コメント：いいのよ
コメント：推しが頑張ってる姿は尊いものよ
コメント：久しぶりのマイヤーちゃんの声でもう耳が幸せ
コメント：レコーディングということは新曲？
コメント：まさかオリジナル曲では!?
「あはは、ありがとうね～。あと歌は残念ながらオリジナルではないですよ～、でも今回の曲は今までとはちょっと雰囲気が違うから、皆

もびっくりするかも」
コメント：ほほう？
コメント：それは楽しみ
コメント：今までとは違う……デスメタルか!?
コメント：そのチョイスは謎過ぎ
コメント：マイヤーちゃんのですぼいす（ハート）
コメント：そんなに聞きたければアーカイブのウマ娘カートの配信見てこい
コメント：あれは良いシャウトでした、あそこだけ切り抜いて3時間リピートしてます
コメント：ヒェッ
コメント：それはもう病気では……？
「あはは……まぁ、デスメタルは確かに好きで聞くことはあるけど……さすがに歌うのは喉の調子をやっちゃうからね？」
コメント：ほ～ん？
コメント：調子？
コメント：〈調子をやる〉舞台用語で喉を傷めるという意味
コメント：確かに喉は傷めそう
「だけどある意味それくらい雰囲気というか、印象が違う歌を今回歌わせてもらえてるから楽しみにしててね！」
コメント：了解！
コメント：今から楽しみにしてます
コメント：そういえばウマッターで企画って言ってたけど？
コメント：なにかやるの？
「あ、そうだった！ええっと……ちょっと待っててね～……はい、これ！皆見えてる～？」
コメント：これは!?
コメント：セカライ公式がやってる配信じゃん
コメント：え、マイヤーちゃんがついにでるの!?
コメント：これは期待せざるを得ない
「というわけで、公式からの告知に先駆けてこの場で出しましたけど、

セカンドライフ1期生の夏森葵先輩と一条和己先輩が司会を務める
セカンドライフの公式動画に私がゲストで参加してきました！……
なんで呼ばれたんだろ？」
コメント：さもありなん
コメント：そりゃ（3期生で10万人突破に一番近いなら）そうよ
コメント：でも他の3期生も順調に登録者伸びてるからわからんぞ
？
コメント：3期生全員10万人が射程圏内という異常事態
コメント：おいこら2期生の事悪く言うのやめーや
コメント：#もっと伸びろシルトマイヤー
「えっと、動画自体は来週から公開予定なので皆さんお楽しみに！
……さてさて、告知も終わったのでここからは雑談していきましょ
～」
コメント：わーい！
コメント：そういや久々のオフだったんだって？
コメント：配信できないくらい忙しかったんだよね？
コメント：ちゃんと休んで？〈2000円〉
「わ、スパチャありがとうございます！そうなんですよ今日はオフで
……本当は昨日がオフだったんですが、実は歌の練習をしようと思っ
て事務所に行ったんですよ」
コメント：え？
コメント：おぉい……
コメント：これがワーカーホリックってやつか……
「いえ、それでレッスンルームに行ったら……笑顔で背中に不動明王
を背負ったマネさんが待ち構えてまして……その場で昨日と今日の
2日分のオフが決まりました……」
コメント：おおぅ……
コメント：さすがマネさん
コメント：さすマネ
コメント：ばっちり行動把握されとるｗ
コメント：まぁマイヤーちゃん真面目で努力家だからな

コメント：こういう時は絶対休みの日も練習するってすぐにバレる
コメント：ていうか前科があるんでしょ、どうせ？
「さ、さぁ……なんのことかなぁ～？」
コメント：マイヤーちゃんさぁ……
コメント：休むのも仕事のうちよ？
コメント：そうだぜ！世の中休めない奴もいるんだぜ！（現在７０連勤）
コメント：おふ……ブラックぅ……
コメント：７０連勤ニキはご自愛を……
コメント：だいじょうぶ！あと３０連勤は確定してるから！
「れ、連勤ニキさんはご自愛を……」
コメント：マイヤーちゃんは今日はゆっくり休めましたか？
コメント：絶対休んでないでしょ？
コメント：さらっと流される連勤ニキェ
コメント：（^ q^）
「あ、えっと……私は今日は流石にのんびりしてましたよ？マネさんからもきつ～っくいわれたので……あ、でも昨日久しぶりに早く寝たら朝早く目が覚めちゃって、それで日課のランニングをちょっと長めにしてきました」
コメント：日課？
コメント：ランニングしてたんだ
コメント：詳しくは切り抜きの「もっちりマイヤーちゃん事件」を参照
コメント：あれは、悲しい事件だったね……
コメント：本当に……
「ちょっとちょっと？勝手に悲しい事件にしないでくださいよ～……まぁあれが切っ掛けでしたけど、今でもランニングは続けてるんですよ？えらくないですか？」
コメント：ちゃんと続いててえらい！
コメント：早起き出来ててえらい！
コメント：健康にすごせててえらい！

コメント：コメントで自己承認欲求満たさんでもろて
コメント：まぁでも実際継続出来てるのはえらいわけだし
コメント：俺もマイヤーちゃんを見習って明日から走ります！
コメント：それ絶対走らないやつやん
「日が昇るかどうかの薄暗い時間から走るのってなんか街の雰囲気もいつもと違ってちょっとドキドキしますから、お勧めですよ！」
コメント：早朝ランニングは確かに気持ちよさそう
コメント：健康生活
コメント：まず早起き出来るかが問題だ
コメント：確かに早朝っていつも通ってる道でもどこか違って見えるのはある
コメント：普段人通りの多い道だと人がいないだけで違和感凄い
「私としては朝もお勧めですけど皆が寝静まった真夜中もいいですよ？特に晴れている日だと星が綺麗ですからね」
コメント：都会じゃ星とか見えんて
コメント：田舎の星空とかは凄いって聞くわ
コメント：実際すごいぞ？寝転がって見上げるとなんか星空に落っこちていく感覚するくらい
コメント：ほえ～凄そう（小並感）
「今日走ったのはいつものコースじゃなくて少し開けた丘の上の公園だったので、上って来る朝陽が見えて絶景でした！きっと星空も綺麗なんだろうなぁ」
コメント：へ～
コメント：そんないい場所があるのか
コメント：都内でも意外と地域住民しか知らない公園とかあるからなぁ
コメント：東京都内ってそういうのが無くてコンクリートジャングルってイメージが強いなぁ
「そこは中学生の頃に練習で使ってた場所だったんですけどその頃と変わらない感じでした、やっぱり走るっていいですよね～」
コメント：そりゃウマ娘ならそうだろうなぁ

コメント：マイヤーちゃんの貴重なウマ娘要素助かる
コメント：助かる
コメント：要素も何も存在がそもそもウマ娘なんだよなぁ
コメント：つっても……ねぇ？
「君達ぃ……？私は紛うこと無きウマ娘ですよ！」
コメント：お、そうだな
コメント：せやな
コメント：おう
コメント：そうだね、立派なお耳だもんね！
コメント：立派でしたねぇ
コメント：配信にばっちり映ってたもんね
コメント：初配信で耳をさらす配信者がいるらしい
コメント：自己紹介の初配信がアーカイブじゃなくて一人だけ編集動画になる女がいるらしい
「な、なんのことかなぁ～……わたしわからないなぁ～……」

＃11　その思い出は遠いどこかで繋がっている

#12

それは、とある雑談配信での事。
「さて、つぎは……ん？」
気になった奴を拾って雑談していた私の目にひとつのコメントがとまりました。
コメント：ご飯にかけるものには何が一番ですか？
「ごはんかぁ……それってふりかけとかってことかな？」
コメント：最近色々なのがでてるよな
コメント：のりたま最強
コメント：ゆかりこそ至高よ
コメント：なんと、ごましおの奥深さを知らぬとは
コメント：子供用のやつって意外としっかり作っててなおかつ大きさがお弁当に
：ちょうど良いのよね
コメント：まぁ子供用っていっても大きさが小さいだけで中身は同じだしな
コメント：最近は醤油味のいりごまがお気に入り
コメント：おかかとかはウェットタイプがお弁当に合う
コメント：1周回って塩だけにたどり着いたわ
コメント：それはもう悟りの境地では……？
「うんうん、みんな色々とお気に入りがあるみたいですね～」
コメント：マイヤーちゃんは？
コメント：マイヤーちゃんのお気に入り気になる
コメント：私、気になります！
「むふふ～ふりかけですかぁ……いやぁ昔からよくお世話になってますね～。ほら？私も端くれとはいえウマ娘ですから、食費は大人の男性以上にはかかるわけで……ごはんをお腹いっぱい食べるのにおかずを用意するのも一苦労なんですよ」
コメント：そいやマイヤーちゃん自炊派だったっけ

コメント：セカライで数少ない自炊できるライバー
コメント：今のところ半数がメシマズ勢だからな
コメント：あ、葵ちゃんも出来るから……！
コメント：コンビーフを砕いて缶詰のコーンを混ぜたものを料理とするならな
コメント：オイルサーディンの缶にパン粉をかけてオーブントースターで
：焼いた物を料理と呼ぶならな
コメント：酒のつまみしか作れんやつを同列に語られても……
コメント：もうやめて！葵ちゃんのライフはもうゼロよ!!
夏森　葵　：お前ら覚えてろよ!?
「わ！葵先輩！いらっしゃーい……まぁ、葵先輩の料理の腕はともかくとして」
コメント：流されたw
夏森　葵　：マイヤーちゃんひどい～……ぐすん
コメント：うわきっつ
コメント：まぁ、普段の行い（料理）ですかねぇ？
コメント：せめて人並みには作れるようになろうよ……
夏森　葵　：!?!?
コメント：葵さん、せめて黒くない物作って……
コメント：企画で出してた葵さん作の塩気のないみそ汁っていうのは衝撃的でした
コメント：見事なまでの無慈悲な死体蹴りである
夏森　葵　：お前ら覚えてろよ！あときっつとか言ったやつ覚悟しとけよ!?
「あ～……皆もあんまり葵先輩いじめないように！……さて……えっと、ふりかけの話でしたね！それで……私も色々試したわけですが、そこでひとつ！私はたどり着いたのです。至高の逸品に！」
コメント：ほほう？
コメント：わたしのゆかりを超えるとでも？
コメント：ならば私のお手製刻みニンニクラー油を出さざるを得な

いな
コメント：ならば俺はめんつゆ漬け卵黄を出そう
コメント：ならば私は激辛タコミートを出すぞ！
コメント：みんな無限にパクパクしちゃう奴ぅ！
コメント：だがそれらはふりかけ的にはレギュレーション違反です
「ふっふっふ、そういった物ももちろん美味しいですが、何かと手間やお金がかかる物でしょう？そんな中で私の食事の彩を支えてくれた私の相棒……それは！」
コメント：それは？
コメント：それは!?
コメント：いったいなんなんだ!?
「それは～……う○い棒です！」
コメント：う○い棒……？
コメント：お菓子の？
コメント：彩とは……？
コメント：ごはんのおかずにかじるのか？
「お菓子のう○い棒です！あれをですね、袋に入れたまま砕くんですけどコツがあってですね、全部砕くんじゃなくてちょっと塊が残るくらいにするんです。するとご飯にかけた時に食感の違いが出て美味しいんですよ～」
コメント：めっちゃ力説するやん
コメント：そんなのにコツなんてあるんか？
コメント：でも味の濃いお菓子って確かにご飯に合いそう
コメント：ハッピー○ーン
コメント：危険なお粉はやめてもろて
コメント：俺ビッグ○ックのソースで丼一杯いける
「一袋でお茶碗２杯分は余裕ですからね、今でも随分と助けられてますよ～」
コメント：ふりかけの方が安くない？
コメント：いや、どうなんだろ？
「そうですね、例えば小分けになってるふりかけだと１パック２０個

で大体２００円だとして一袋１０円の計算、対するう○い棒は一本１０円、それで２杯ならふりかけ換算で二袋分です」
コメント：そう言われると安い……のか？
コメント：でもご飯に合う味ってそんなにあった？
「ふふふ、それが意外とあるんですよ～。のり塩味や納豆味は定番ですし、トンカツソース味にテリヤキバーガー味も相性抜群！牛たん味やたこ焼き味も変わり種で有りですしコンポタとチーズを混ぜるとこれが美味しいのなんのって！あと意外なことにシュガーラスク味！あれが程よい甘さでおやつにちょうどいいんですよ～」
コメント：これはう○い棒ガチ勢ですわ
コメント：定番とは……？
コメント：言われてみると、名前だけならご飯に合いそうなものが結構あるんだな
コメント：納豆味とかまんまっぽい
コメント：あれなぜかちょっと粘り気感じるしな
「業務用のスーパーとかでなら大量に買えますからね、定期的に買っておいてストックしていますよ！」
コメント：そういえばあれって割と地方限定のやつとかあったな
コメント：そういや海軍カレー味とかあった気がする
コメント：あぁ、スマホの軍艦ゲームのコラボだな
コメント：うちの地元にはイカニンジン味あるぞ
コメント：想像つかんぞそんな味ｗｗｗ
コメント：なんかうちの地元の味らしい。ちな地元民は皆首傾げてた
コメント：それだけあるなら食べ比べとかしたら面白そう
「ほむ、食べ比べ……なんだか面白そうですね！」
コメント：あ
コメント：おい
コメント：あ～ぁ
コメント：すまぬ……すまぬ……
コメント：もっちり再来

「もぅ！今度はそんな事にはなりませんよ！やるのは一回だけだし、ご飯だし……だ、大丈夫です！」
コメント：未だかつてこれほど信用ならない大丈夫があっただろうか？
コメント：まぁ一杯ご飯食べれるのは健康の証なわけだし……
コメント：まぁ、たまには……ね？
「よーし、それじゃ次の雑談配信ではどんなう○い棒がご飯に合うのか飯テロ雑談します！」

～＊～＊～＊～

とまぁ、そんなわけで突発に決まったう○い棒どれがご飯に合うのか食べ比べ配信。
一応マネさんに連絡すると無事ＯＫが取れました、まぁ最後に「けっして食べ過ぎないように」とくぎを刺されましたが……ふっふっふ、そのあたりもぬかりはありませんよ！
今回はお茶碗を使わずに小さい手毬お握りにしようと思ってます！一口で食べれるし何よりも見た目が可愛いから私の女子力を見せるいい機会にもなるでしょう！
というわけで後日食べ比べ配信をする日をウマッターで告知した後、早速私は準備に取り掛かりました。
今回は作ったおにぎりを皆さんにもリアルタイムに見てもらおうと思います、見てもらうだけなら写真を撮って配信画面にかぶせてもいいんですが、折角ですから事務所から小型カメラをお借りして、それで撮った映像をそのまま配信画面の隅にでも置いておこうかと思います。
部屋の中が配信にのってしまうのはＮＧなので映すのは手元だけ、もちろん間違っても耳なんて映しませんからね？
それらの機材やほしいものを方々に頼んでしばらく、予定していた翌日の食べ比べ配信を前にして私は近所にある商店街に向かいました。

ここには大型のスーパー以外にもお菓子を専門に扱うお店もあり、さらに驚くことに昭和からお店を続けている駄菓子屋さんもあるんですよ！その駄菓子屋さんには私もよくお世話になってるんですよ～。

というわけで、まずは定番が揃うスーパーとお菓子専門店をはしごして一通りの味を抑えた私はいざなじみの駄菓子屋さんへ。

「……らっしゃい」

商店街の奥の奥、地域の都市開発から取り残されたような古い木造平屋が続く小道の先にある駄菓子屋さん。

お店を営んでいるのは顔の右側に鋭い傷跡が残る剃髪のおじさん、ご両親が残した店を次いで今もこうして守っているそうです。

見た目はなんともその……あれな上にドスの利いた声ですし、接客なんて知らんと言わんばかりの対応なので初めて訪れた方は皆さん怖がってしまいますが、実際はとても面倒見がよくて子供好きですし手先が器用でご近所ではちょっとした家屋の修繕や機械関係で頼りにされてるんだとか。

「こんにちは、頼んでいたものはありましたか？」

「……来な」

そうとだけ言ってお店の奥に引っ込んでいくおじさんを追って奥に入ると、裸の電球のみが灯る薄暗い部屋でおじさんが取り出したのは鈍く光る銀色のアタッシュケース。

「……頼まれたもんだ」

「では……」

くるりと反転して渡されたケースのカギを開けてゆっくりと蓋を開けます。

中は柔らかい低反発クッションの耐衝撃仕様、たとえ高層ビルから落としても中のものには傷一つつかないとＣＭで大評判なアグネス印のケースですか……相変わらず仕事に使う道具には妥協を許しませんね。

裸電球の明かりに照らされてついに姿を現したその中身は……！

「……確かに、頼んでいた通りですね」

「……っふ、こいつは中々手間がかかるブツだった」
「ええ……ええ、そうでしょう。私も沢山の伝を使いましたが……流石ですね」
「……さぁ、ブツの確認は済んだ。あとは……」
「支払いですね……ええ、すぐに支払いましょう」
「……わかった、なら支払いはいつもの口座に」
「あんたたち、何してんだい？」
　そんな言葉でさっきまでついていた裸電球以上の明るさで照らされた茶の間の入口ではこのお店のおかみさんが呆れた顔でこちらを見ていました。
「あ、おばさんこんにちは！」
「あぁ、茉莉ちゃんこんにちは、またお菓子を買いに来たのかい？」
「はい！ここでなら普段見ないお菓子がいっぱいありますから！」
「あっはっは！古いだけが取り柄だからねぇ？茉莉ちゃんくらいの歳じゃ知らない駄菓子も多いだろうよ、それよりあんた！また変な事して遊んでるんじゃないよ！」
「……いや、遊んでるわけでは」
「そいつは茉莉ちゃんが頼んでいたやつだろ？裏にまだあるんだからさっさと持ってきな！」
「……しばし待て」
「まったく……茉莉ちゃんもごめんねぇ？あの人また近所のガキ共から変なことを教えられたみたいでね」
「あはは～……」
　そう、おばさんが言うようにこのお店の店主であるおじさんはお茶目といいますか……何かと影響を受けやすい方で、お店を訪れるたびにこういう風にお遊びに興じる事があるんですよね。
　きっと子供たちの間で流行ってるアニメか何かに影響されたんでしょうか……。
「こいつで全部だ」
　そういっておじさんが持ってきたのは一抱えはありそうな段ボール箱、中に入っているのはもちろん探し求めていたう○い棒です。

しかもですよ！中に入っているのはスーパーや専門店には中々並ばない地方限定バージョンなんですよ！

こういうのは地方にあるお土産屋とか高速道路の途中にあるパーキングエリアとかにあるんですが、普通に買うのはなかなか難しく……そこでおじさんに頼んで問屋さんから直接取り寄せてもらったんです。

「いやぁ～ありがとうございました！」

「随分といっぱい買うけど……そんなに食べて大丈夫かい？ちゃんとご飯も食べるんだよ？」

「大丈夫です！これでご飯をいっぱい食べますから！」

いやぁ普段なかなかお目にかかれない味のバリエーションも多いですから、今から食べ比べをするのが楽しみです！……あ、でもいっぱいあるからその前に味見をしても……よし、早速家に持ち帰ってう○い棒パーティーを開催しましょう！

「……これで？」

「……はぁ、あの娘本当に大丈夫かしらねぇ……？」

なんていう呆れたような声も視線もなんのそのです！

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

▶ ▶ ━ ・ライブ

チャット＞

『ご飯に合うう〇い棒はどれなのか!?食べ比べ会』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる

チャンネル登録

チャンネル登録者数　９．１２万人

「皆さんこんまいや～、セカンドライフ３期生のシルトマイヤーです」

コメント：こんまいやー！

コメント：こんまいやー

コメント：っよ！

コメント：っよ！っよ!!

コメント：こんまいやー!!!

コメント：っよ！紺舞屋！

コメント：こんまいやー！

「さて、本日はタイトル通りの第1回ご飯に合うう〇い棒はどれなのか!?食べ比べ会となっております」
前日のう〇い棒パーティーを経て、ついに食べ比べ配信が始まりました。
ご飯は事前に炊飯器（ごく一般的な普通のやつですよ？）で炊きたてホッカホカですし、今回食べ比べするのは定番な味と地方限定品の中から厳選したいくつかです。
コメント：いったいどれが一番合うんだろうか……
コメント：結局配信当日になっても味の想像ができんかったわ
コメント：現在支持率1．1でなっとう味、次いでのり塩・めんたい・とんかつソースと続き
：最後シュガーラスク味が172倍となっております
コメント：前半は名前を見る限り割とおいしそう
「ふっふっふ、皆さんウマッターやウマスタで盛り上がってるみたいでありがとうございます、それに負けないくらい配信も頑張りますからね～……よっと、皆さん見えてますか～？」
ここで早速配信画面の右隅、私のアバターの前に別の画面を割り込ませます。
そう、それは私の手元を映した別カメラの映像で、これからこのカメラで作っていくおにぎりを皆さんにお見せしていくつもりです。
コメント：!?
コメント：!!!!?!?!?
コメント：こ、このお手ては……まさか!?
コメント：別枠でカメラだとぅ?!
「うふふ～皆さん見えてますか～？今日はこの配信のために事務所から小型カメラと三脚を借りてきましたので、実際におにぎりを作る過程や出来上がったものも配信でご覧いただこうと思います」
コメント：マイヤーちゃんおてて綺麗だね～
コメント：まさに白魚のような手って感じ
コメント：想像してたよりも色白だな

コメント：これには手先ソムリエもにっこり
コメント：手先ソムリエって……なにそれこわ
コメント：とっても健康的な肌艶で……じゅるり
コメント：はいアウトー
コメント：ただの変態で芝
コメント：お耳ソムリエに次ぐ変態が生まれた瞬間である
「はいはい、私の手はどうでもいいですから～……さて、早速作っていきましょうかね。まずは皆さんの予想の上位陣であるなっとう、のり塩、あとめんたいかな？」
コメント：まずは定番から攻めるが吉
コメント：がさごそ……
コメント：マイヤー3分クッキングはっじまるよー！
コメント：砕いて混ぜるだけなら3分もいらんやろｗｗｗ
「さて、まずはう○い棒を袋の大体半分くらいを目安に、半分を指で細かく砕きます」
ここで重要なのは決してすりつぶすように砕かないこと、袋に対して垂直に押しつぶすことでう○い棒の粉がパラパラに仕上がります！摩擦熱が加わるとちょっとねっちょりしちゃうんですよね……。
コメント：ほうほう
コメント：っていってもカメラには映ってないんだがな
コメント：流石に手元固定のカメラじゃなｗ
コメント：それ以上映すとさすがにな
コメント：特にマイヤーちゃんは前科があるから……
「こらこら、前科とか言わないの～……さて、半分をきっちり砕いたら残り半分は食べやすいくらいの塊程度に砕いて……準備完了です！」
コメント：わーい！
コメント：さて、お味はいったい……
コメント：一番合うのはどれなのか……
「さて、まずはラップを敷いて……そこに一口サイズのご飯をのっけて、袋からう○い棒をぱらぱら～っと……そしてこれをくるっと丸めて手の中でコロコロ～と転がせば……はい、できました！」

さっそく炊飯器からホッカホカのご飯をしゃもじですくってラップに乗せ、その上に砕いたう○い棒を振りかけます。
あとはラップで包んで丸めるだけ、でもなんだかそれだけなのに美味しそうですよ！
コメント：おぉ～
コメント：まぁ見た目は普通のおにぎりよな
コメント：普通においしそう
コメント：まぁ、ふりかけおにぎりと差はないからなぁｗ
コメント：小さくてかわいい！
コメント：これは女子力感じますわ
コメント：材料からは微塵も女子力感じないけどな
「え～こちらなっとう味、のり塩味、めんたい味です。それじゃさっそく……いただきまーす！」
コメント：召し上がれ～
コメント：もぐもぐマイヤーちゃん
コメント：お口開けてるの可愛い
コメント：もぐもぐしてるの可愛いな
「んぅ～美味しいですねぇ～！」
コメント：リアクションも可愛い！
コメント：よっぽど美味しいのか今日は一段とお耳が動いておられる
コメント：俺もご飯食べようかな……
コメント：まだ開始２０分なのにすでに空腹が……
コメント：俺も近所で買ってきたう○い棒食べるぜ！
「なっとう味ものり塩味も定番らしく安定した美味しさですね～、めんたい味も辛みはないですが香りは十分です！もぐもぐ……うん、美味しい！」
コメント：美味しいしか言ってないｗｗｗ
コメント：まぁ、う○い棒は美味しいからな
コメント：小ささも相まって無限にパクパクできちゃいそうだな
「流石に無限にはしませんよ～？とりあえず一通りの味を一個ずつ作

るつもりですからね、それじゃつぎは……」
その後も一通り定番味を攻め、最後はチョコ味とシュガーラスク味を使ったデザート枠で前半戦は終了となりました。
「ん～……チョコ味はご飯の熱で溶けてて微妙ですね、やっぱり甘いのならシュガーラスク味一択ですよ皆さん！」
コメント：勧められても……
コメント：そもそも普通は選択に入らないんだよなぁ
コメント：でもちょっと美味しそう……かも？
むむむ、なんだか皆さんには不評のご様子……さて、お茶を飲んでまったりしつつ雑談をした後はついに後半戦、ここからは普段なかなかお目にかかれない味の登場です！
「さて、ここからは地方限定などの味を試していく後半戦ですよ！」
コメント：地方限定ってどれだけあるんだ？
コメント：少なくとも各地方や都道府県分はあるんじゃない？
コメント：ほかにもコラボ商品やイベント限定とかもあるからなぁ……
コメント：絶版物もあるのかな？
コメント：それ賞味期限大丈夫……？
「残念ながら今回は販売が終了したものは手に入りませんでした、さすがに倉庫の奥に眠ってたやつとかは賞味期限が怪しいですしね……」
ちなみに、一般的にう○い棒の賞味期限は大体が１５０日というのがメーカーさんの見解らしいのですが、実はう○い棒の味によっては結構ばらつきがあるみたいで、一番長いのはチョコ味で最大一年くらいは持ちます、私の体感的にですが。
コメント：流石に賞味期限が切れてるのは危ないわな
コメント：油分が酸化してそう
コメント：調べたけど販売終了してるのって４０種類以上あるんだな
コメント：意外と多いな
コメント：気が付いたらいつの間にか無くなってた感じか

「さて、まずは……これにしましょう、はいこちら！横浜海上自衛隊カレー味です！」
コメント：きたこれ
コメント：美味い奴や～ん
コメント：これは鉄板やね
コメント：これう○い棒で一番好きだったな
コメント：見かけると箱買いするくらい美味しい
コメントの皆さんの反応も上々ですね、これは限定商品の中でもかなり話題になった商品ですし、なにより海上自衛隊所属護衛艦の給養員さん完全監修のカレールーを使っているということで味もお菓子とは思えない本格派なんですよね。
「こちらは横浜港のベイサイドエリアのコンビニでのみ販売されている限定商品で、数年前にはとあるゲームとコラボしたことでも話題でしたが、さてさてお味のほうは……っと」
さっそく砕いてご飯にぱらぱらっと……ん～すでにカレーのいい匂いが漂っておりますよぅ！
「それじゃいただきまーす……ん！カレーがとってもいいお味！スパイシーさはないですが、さすが海上自衛隊さんの完全監修です、とっても美味しい！」
コメント：海自カレーとか美味しい未来しかないやつ
コメント：レトルトのやつとかお高いけどその分美味しいもんなぁ
コメント：俺の家には非常時の備蓄として海自のカレーレトルト買い置きしてるぜ
：なお定期的に消費されている模様
コメント：それもうただの買い置きなんじゃ……？
「私も前に一度頂き物で頂いた事はありますね、あれは美味しかったなぁ……さて、それじゃ次は……こちら、長崎限定ちゃんぽん味です」
コメント：まぁ長崎といえばな
コメント：長崎ちゃんぽん美味しい
コメント：地元民は甘めのソースをかけるって聞いた
コメント：なにそれ美味しそうかも

「さてさて、それじゃぁ……うっはぁ～！袋を開けたら早速ちゃんぽんの香りが……こいつは期待できますねぇ！」
コメント：お耳ぱたぱた
コメント：今日はお耳が忙しいですねぇ
コメント：お耳助かる
「よっと、それじゃいただきますね～……もぐもぐ……うん、普通においしいですね！ただこう……コショウとかほしかったかな、もうちょっとパンチが欲しいですね」
コメント：そらお菓子だしなぁ
コメント：お菓子にパンチは求められんなｗ
「あ、ちなみに私はちゃんぽんにはお酢をどばっとかけるのが好きです、それじゃ次……あ」
コメント：お？
コメント：どした？
コメント：なにかあったか？
「あ～……次はこちら、北海道限定ジンギスカン味です」
コメント：あ
コメント：あ
コメント：これは……
コメント：アカン奴きた
コメント：キャラメルに代わる新たなゲテモノ
「うぅ～……いやいや！もしかしたら奇跡的なマリアージュで劇的なハーモニーかもしれないですから!?……で、ではさっそく砕いて……いざ！」
コメント：やめろおおお!!
コメント：ぎゃーーーー！
コメント：やばい未来しか見えん
「……おっふ」
コメント：アバター固まったぞ
コメント：マイヤーちゃん固まっとるｗｗｗ
コメント：俺らでさえ袋開けた一発目の臭いはやばいのに、ウマ娘

の嗅覚じゃ……
コメント：チベットスナギツネみたいな顔してそう
「こ、これはなかなか……刺激的……ぱ、パンチのあるかほりれすね……」
コメント：鼻摘まんだなｗ
コメント：まぁしゃーない
コメント：味のキャラメル臭いのう〇い棒
コメント：なぜメーカーはここまで臭いを追及してしまったのか……
「で、では……いただきます！もぐ……もぐ、もぐもぐ……」
コメント：無言にならんでもろて
コメント：虚無
コメント：顔が真顔ですわ
コメント：虚無顔も可愛い！
コメント：もっと虚無ってけー？
「ん～……なんでしょう、開けた時のインパクトはすごかったんですが……味はたれの香ばしさもあって普通に美味しい……劇的ではないですがまぁ、ありと言えばありですかね……」
コメント：なるほど
コメント：臭いはともかく味は普通だもんな
コメント：たれで全部持ってく強引さ、嫌いじゃないわ
その後は色々な味を試しながら作る工程を皆さんにお見せして、配信は中々の盛り上がりを見せました。
試そうと思っていた味は全部試してご飯も残りわずか、今回の配信はここまででしょうか。
「さて、名残惜しいですが今回の食べ比べは以上となります……なので、今回の食べ比べで私的に一番おいしかったのを今から発表したいと思います！」
コメント：さて、何味が来るのか
コメント：もともとシュガーラスク味推しじゃなかった？
コメント：お耳の具合を見るにカレー味と見た

コメント：大穴大外一気のジンギスカン味と見た
コメント：それはない
「うふふ～、皆さん色々想像してるみたいですね～……では発表します！第1回ご飯に合うう○い棒はどれなのか!?その結果は～……なんと！」
コメント：なんと!?
コメント：どきどき
コメント：わくわく
コメント：いったいどれなん……っだい!?
「……んぅ～……僅差で横浜海上自衛隊カレー味でした!!いやぁ、なかなかの接戦だったんですが、やっぱり本格的な味は手ごわかったですね～。ちなみに2位はもちろんシュガーラスク味です」
コメント：お、おう
コメント：まぁカレーは鉄板よな
コメント：どれも美味しそうでした
「それ以外の順位についてはあとでウマッターでつぶやいときますね！さてさて、それじゃ本日の配信はこの辺で」
なんて、締めのあいさつに入ろうと思ったら……私の目に飛び込んできたのはとあるアカウントからのコメントでした。
シスターマイヤー：なるほど、お姉ちゃんはこういうお菓子が好きなんですね
「……はぇ？」
コメント：これは
コメント：妹ちゃんきたー!!
コメント：シスターちゃん久々！
コメント：だれ？
コメント：シスターマイヤーちゃんが公に登場したのは約1年前に行われた
：ＵＲＡファイナル決勝の同時視聴回、ウマッターはおろか
：コメント欄に姿を現すのはかなり久しぶりのことだ。

コメント：どうした急に？
コメント：あれからマイヤーちゃんは登録者数が１．５倍以上に伸びているんだ
：知らない教官役がいても不思議ではない。
コメント：確かに、あれから同接数もかなり伸びてきているからな。
コメント：なにこれ？
コメント：ちなシスターマイヤーちゃんとはマイヤーちゃんの妹ちゃん（公認）のことだぞ！
コメント：公認なのかｗ
「あ、え……な、なんでいるのぉ!?」
シスターマイヤー：大事なお姉ちゃんの配信ですから当然です。
：ちなみに今日は家で見ているので両親も見ています。
「ふぁぁぁぁぁ!?」
コメント：親御さんも見てるんか
コメント：いえーい！ご両親みてるー？
コメント：おいやめーや
シスターマイヤー：ちょっとお父さん手を振っても皆さんに伝わりませんよ？
コメント：お父さん天然かｗｗｗｗ
「あ、あうぅぅ……」
コメント：これは照れてるのか？
コメント：むしろ黒歴史になりそう
コメント：親が見ている前でのジャンクフード？配信とは恐れ入った
シスターマイヤー：あ、お母さんがこんな食事をしていることを知って苦労させて
：しまってると思って泣いています。
：お姉ちゃんは後でお母さんに釈明をしておいてください。
コメント：お母様……

コメント：マイヤーちゃん親不孝はいかんでぇ？
「ちょ、お母さん!?あ、えっと……え～本日の配信はここまで！高評価とチャンネル登録、ウマッターの登録がまだの方はお願いします！え～……そ、それでは皆さんおつまいやー！……ウマホウマホ……ウマホどこ!?あった！お母さーん!!私大丈夫だからぁ～！」
コメント：おつまいやー！
コメント：おつまいやーです！
コメント：っよ！乙舞屋！
コメント：っよ！
コメント：あれ？
コメント：これって……配信閉じれてない？
コメント：配信きり忘れてるよマイヤーちゃん!?
コメント：ちょ、マイヤーちゃん配信とじれてないって!?
コメント：これはまた新しい伝説作っちゃう？

#12　今を楽しめている事
それが何より嬉しい事

#13

ウマ娘には勝たなければならない刻がある……それは一族の悲願や宿願であったり、個人の憧れや願いであったり。
はたまたライバルとの勝負や前人未踏の記録への挑戦であるかもしれない。
彼女達はそんな戦いのために日々努力を重ね、切磋琢磨し己の限界への挑戦をやめることはない……そして、そんな戦いに挑むウマ娘がまた一人。
「ふっふっふ、ついに……この日がやって来ましたね」
開け放たれたカーテンと窓、その先にあるベランダを越えて広がる空は雲ひとつない快晴の空。
差し込む朝日に照らされるベランダで不敵な笑みを浮かべるのは立華茉莉、この部屋に住むウマ娘だ。
彼女はその笑みのまま手に持ったコップの中身を一気にあおる、もちろん腰に手を添えるのは忘れない。
「むぐっむぐっむぐ……ぷふぅ……やっぱり気合いを入れるにはこれですね！ウマッターでスペシャルウィークさんがおすすめしていた牛乳なだけはあります……ちょっとお高いですが」
そう言って晴れ晴れとした顔を見せる茉莉の目には気合いの二文字がありありと浮かんで見えた、なお口許に白いお髭ができているのはお約束というものである。
今日のためにとわざわざゴルシ印のネット通販で購入したその牛乳は、普段買っている牛乳の定価の3倍はするお高い逸品である、もちろん容器は紙パックではなくガラス瓶だ。
決済した直後は何で買ってしまったのかと地味に後悔してベッドで転がり回っていたのだが、今ならそれも些細なことだと思っていることだろう。
「気合い十分仕上がり上々、コンディションもばっちり。さらにこの恵まれた天候！これはもう私の勝利も約束されたも同然ですね！」

気分上々に部屋に戻った茉莉は手早く朝食を住ませていつもの衣服……ではなく運動用のジャージ、でもなくカジュアルながら動きやすい服装に着替えて普段使いするには少々不向きなくらい大きいトートバックを手に取った。
「さぁ……いきましょう、我々の戦いの舞台へ！」
などと気合い十分に訪れたのはウマ娘が集うレース場……なんてことはもちろん無くて近場にある商店街、その中にあるスーパーの前だった。
創業１００年を越える老舗で敷地面積も一番大きくて品揃えも十分、日々チラシの隅々を舐め回すように見渡し良品を探し当てる歴戦の主婦から健啖家で知れ渡っている往年の名ウマ娘達まで満足させることに定評のある商店街の顔といえる名店。
ゆりかごから墓場までお世話になった住民も珍しくないその店の前には茉莉だけではなく、多くの買い物客がその門が開くのを虎視眈々と待ち構えていた。
その場の雰囲気はすでに朝の清々しい空気を吹き飛ばしグツグツと煮えたぎるような情熱と背筋の凍るような緊張感が場を支配しており、朝練で通り掛かったウマ娘さえも足を止めるほどの異様さに満ちていた。
「た……タマモ先輩……なんなんです、あれ？」
「あぁ、なんや……自分これ見るの初めてか？これはこの商店街の恒例行事や」
「こ、こんなに朝早くから、なんの意味が……？」
「ここらへんで住む上での通過儀礼や。見てみぃ……何年も地獄を経験してきた奴らや、面構えが違うわ」
「……いえ、でも……これスーパーの開店待ちですよね？」
「今日は月に一度の特売日やからなぁ～……まぁ、すぐに馴れるわ。ほないくで～」
「あ、はい！」
などという一般通過タマちゃんがいたりいなかったりしたが、スーパーに集う買い物客達は当然気にする素振り一つすることはない。

商店街で一番大きな老舗スーパーの特売日、それも品揃えも豊富となれば集う客のボルテージも否応もなく上がるというもの。
青果に魚介、肉類もさることながら各種洗剤や細々とした日用品……その数々が値引き価格で売買される特売日。
この日だからこそ買える品々を目当てに集まるのはけして茉莉だけではない、集う者達の目は一様にギラギラと輝いていた。
「皆さんもやる気十分みたいですね……今回も厳しい戦いになりそうです」
それに負けじと茉莉も不敵な笑みを浮かべながらお店の前に貼り出されている今日の目玉商品のチラシに目を向ける。
一番目を引く商品も気になるが、実はもっとも注目すべきはチラシの下の方に並んだ商品達だ。
そこには普段使いする消耗品達が並んでいる、上にある目玉商品は大きく取り上げられるだけあってか普段は少し……ほんのすこ～しだけお高くて日常的に買うヒトが多いとは言えない商品なのだ。
とはいえ、やはりそこは老舗のスーパーたる所以、目玉商品はどれもこれもそう呼ぶにふさわしいラインナップ、そしてそれをいかに目に留まらせるかを考え抜かれたチラシのデザインは数多の買い物客の目を釘付けにしてしまっている。
「くっくっく……目玉商品は確かに中々手を出せない商品が多いですが、そこに惑わされていてはまだまだ二流。そんなことじゃぁこの戦場で戦い抜くことなどできないのですよ……ふふふふふ」
などと怪しい独り言を呟きつつ掲示板に群がる人だかりの外から目当ての商品の値段を確認していく。
「えっとぉ……シャンプーとトリートメントがお安いですね、キッチンペーパーと洗剤は……あ、芳香剤ほしいなぁ」
「あ、ティッシュも安いからおすすめなの！」
「確かに！この際まとめ買いがベストですね」
「あと果物も今日はお買い得なの！ビタミン不足にはぴったりなの！」
「そうですねぇ～……最近食事が偏りぎみですし、それもよさそうで

すね」
「そうそう、あとこっちのタフネスバーもおすすめなの！これ一本でお腹を満たせて栄養もばっちり！あたしのイチオシ商品なの！」
「う～ん、タフネスバーは確かにいいですけど、さすがに普段食べるほどじゃ……ん？」
「でもでも、運動以外でもバイトの空いた時間で食べたりできるから是非是非買っていくといいの！」
「……あのぉ」
「なの？」
「……アイネスさん、いつからこちらに？」
「ん～……最初から、なの？」
「……ふぎゃぁあああ!?さ、最初から!?いたなら声かけてくださいよぉ!?」
「いやぁ、なんかノリノリで解説してたから……つい、なの？」
「うぅぅ……恥ずかしい……」
「まぁまぁ、ドンマイ！なの」
なんて茉莉を雑に励ましているのはアイネスフウジン。
ここ府中にあるトレセン学園に所属していたウマ娘であり、一年で一人しか生まれないダービーウマ娘の一人なのだ。
現在は足の故障から復帰し、その間の鬱憤を晴らすような素晴らしい走りを続けており、ドリームトロフィーでかつての同室であり親友兼ライバルでもあるメジロライアンとの名勝負を演じている。
「茉莉ちゃん随分と久しぶりなの！」
「そ、そうですね……配達のバイトでご一緒して以来ですか？」
「そうなの！」
そう、茉莉は以前やっていた配達のバイトでアイネスと共に働いていたのだった。
その頃はいつも何かしらの失敗をしてはバイト先を困らせていて、アイネスに助けられた事も一度や二度ではなかった。
アイネス自身も数々のバイトをこなしてきた経験と面倒見のよさから茉莉の事を気にかけていて、茉莉がバイトを辞めることになった

時は大層悲しんだものだった。
「まさかこんなところで会うなんて……アイネスさんもこちらに買い物に？」
「そうなの、本当はライアンちゃんも来る予定だったんだけど……メジロの実家の方に行かなくちゃいけなくなっちゃって」
「あ、あぁ～……そ、そうなんですねー……それは残念でしたねー……」
「ん？なんか茉莉ちゃん変じゃない？」
「そそそ、そんなことないですよ？」
「そう？ん～……まぁいいかなの！」
「っほ……」
「そうだ！一緒にお買い物しようなの！」
「……それってつまり、特売日の目当ての品を二人がかりでってことですか？」
「ヒト手は多いに越したことはないの、ここは生きるか死ぬかの戦場なの！」
そう言って拳をグッと握りしめるアイネス、背後にはメラメラと熱い炎が燃えたぎっていた。
「随分とやる気ですね……な、なにかあったんですか？」
「妹達にプレゼントを買うために今節約中なの！ここでの買い物が終わったら一度寮に戻って、それから次は3駅隣のスーパーのタイムセールに行くの！」
「あ、相変わらずの遠征ですね……それじゃ、妹ちゃん達のためにもがんばりましょう！」
「なのーっ！」
そんな様子で共同戦線を結んだ二人のウマ娘の前に敵などいない……と思われたのだが。
そこは彼女達よりも長くこの地に住み、数々の修羅場（特売日）を潜り抜けてきた歴戦の猛者（主婦）が集う鉄火場（スーパー）。
いかにフィジカルに恵まれたウマ娘であろうと柔よく剛を制すが如く、ヒトは時にウマ娘を圧倒するほどの力を見せる事があるのだ。

「はわわ!?そ、その商品わぁあ!?」
「ま、茉莉ちゃん！あっちがお買い得なのー！」
「それは私がもら、ちょ!?おさな……ふぎゃぁ!?」
「っく、茉莉ちゃんの敵討ちは私が！おりゃぁあああ！」
「うぅ、アイネスさん……わ、私だって負けません！」
「よーしゲットなの！……ちょ、まって!?服っ！引っ張るのは反則なのー!?」
「あ、ちょっと!?その商品は私がっ！は、離してくださーい!?」
「ああ！かごの中身はあたしのなのー！取っていくのは反則なのー!!」
柔よく剛を、否……そこにあったのは豪と業、醜き生の本能とも言える何かの骨肉の争いであった。
民度の低さはヒトとしての尊厳を容易く見失わせ、もはやルール無用の乱痴気騒ぎ。
己が求めるものに手を伸ばし、他者を押し退け、ただひたすらに欲望のままに。
苛烈を極める勢いはとどまることを知らず、手に入れた物を奪われまいとヒトは我先にとレジへと押し寄せる。
その濁流を正し、清流へと変えて淀みなく会計作業を進める店員達のなんと精悍なことか、彼らこそまさに地獄を知る顔をした者達なのだ。
「出勤から一度も休めてない……でもやってやる、疲れていてもレジを打て!!」
「この客達を……駆逐してやるっ……店内から、一人残らず！」
「すみません！蒸かし芋食べてて遅れました―！」
などという、なんとも悲壮感漂う店員（一名はのんきに芋を食っていた）がいたとかいないとか……。
さて、そんな魔境と化した店内での戦いを終えた二人はといえば……。
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「……うぁあ～……」《／ｆｏｎｔ》
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「……なのぉぉ……」《／ｆｏｎｔ》

ものの見事に力尽き、口から魂が半分以上抜け出しながら店前のベンチで骸をさらしていた。
「……茉莉ちゃぁ～…ん……だ、だいじょうぶぅ？」
「え、えぇ……な、なんとかぁ……」
「はぁ……今日はいつにもまして激戦だったの……」
「で、ですね……歴戦の主婦の皆様、侮りがたしです……」
「で、でも……目当ての物は買えたの……ミッションコンプリートなのぉ……」
お互いが座るベンチの足元に置いたパンパンに膨れ上がった袋、それが今回の戦利品だった。
「さて……それじゃ、私は行くの！茉莉ちゃん……大丈夫？」
「は、はい……わ、私もこの後予定があるので……それじゃ、また」
「うん、またなの！」
二人はそれぞれの荷物をもって帰路に着いた、その足取りは重いながらも、どこか誇らしげに見えたのだった……。

～＊～＊～＊～

ｓｉｄｅ：アイネスフウジン

ふらふらとした足取りになりながらお店の前から去っていくその背中をあたしは見えなくなるまで見送った。
立華茉莉ちゃん、出会ったのは長期で受けていたアルバイトの合間に受けれる配達のバイトを始めた時だったの。
正直出会った当初の印象は……うん、この仕事向いてないなぁって感じだったかな？
お世辞にも要領が良いとは言えなかったし、教えられても同じミスをすることが多かった……それで怒られて萎縮しちゃってますますミスが多くなるという典型的な悪循環。
ウマ娘の割にはあんまり足も速くない……なんて言っちゃったらちょっと上から目線で傲慢かもしれないけれど、色々なバイトを経験

してきたから、ウマ娘のそういう所を期待している会社さんやお店があるのも事実なの。
あたし自身も長期で入っているバイト先はそういう目で見ないヒト達だけど、何度かは露骨にウマ娘であることに期待して仕事を割り振ってくるお店に当たったこともあったからね。
あたし達ウマ娘だって誰も彼もが足が速い訳じゃない、けどそうとは見てくれないヒト達が多くいるのも事実なの。
それがわかっていたから、あたしは茉莉ちゃんを気にかけるようにしていた。
実際一緒にバイトをするようになって、一生懸命なところとか頑張り屋な所とか、あと意外と頑固で一度やると決めたら諦めないところとか……色々な面を知っていくうちにあたしも自然と応援するようになって、困っていたら積極的に声をかけるようになっていった。
そんなある日、いつものようにバイトに行くと茉莉ちゃんが作業中にちらちらとこちらを見てきた時があった。
「どうしたの？」
「ふひぇ!?」
「あたしに何か用なの？」
「あ、いえ……ななな、なんでもないでしゅ！」
「そうなの？……ん、じゃぁちゃちゃっとお仕事終わらせちゃうの！」
「は、はい！」
その後も配達の途中とか荷捌き場で仕分けをしているときとか、ちょくちょくこっちを見たり話しかけようとしていたり……その日一日は結局終始そんな感じだったの。
「んぅ～～……っと！お疲れさまなのー！」
「お、お疲れさまでしたぁ……」
夕方過ぎに終わったあたし達はそろってお店を後にしたの、あたしの次のバイト先と茉莉ちゃんの帰り道がちょうど同じ方向だったからその日は一緒に帰ったの。
「茉莉ちゃん、今日もいろいろやっちゃったの」
「えぅ……ご、ごめんなさい」

「ううん、失敗は誰にでもあるの！次頑張ればいいの！」
「でも、私……」
「茉莉ちゃん？」
　立ち止まった茉莉ちゃんへと振り返る、夕日で照らされたその輪郭は淡く輝いていて日が透ける髪の毛は普段は気がつかなかったけどちょっと赤みが強いことに気がついて、場違いだけど綺麗だなぁって思ったの。
「あの、アイネスフウジンさん！」
「は、はいなの!?」
「あの、えと……せ、先週のレース見ました！すっごくかっこよかったです!!」
「先週のレースって……わぁ！見てくれたんだ！ありがとうなの！あ、でも……まだオープンのレースだよ？」
　そう、あたしはその頃正式に担当になってくれたトレーナーとメイクデビューを無事に済ませたばかりだったの。
　最初は仮のトレーナーなんて都合のいい言い分で丸め込んで自分の成長のきっかけになれば、なんて思っていたけど……翌日にはとんでもない量のトレーニングメニューを作ったり、常にあたしの負担を考えて付き合ってくれたり……思えばそういう変に頑固で一生懸命なところは茉莉ちゃんそっくりなの。
　でもまさか、レースをバイト先の友達に見られていたなんて、ちょっと嬉し恥ずかしなの！
「で、でもでも！すっごくかっこよくて！終始逃げでペースを作って他のウマ娘達に消耗戦をしかけつつ自分は脚を残して一息いれる、そして最後の直線でこう……ぎゅーんってスピードあげてラストスパートに入って行く所なんて、テレビの前で思わず大声で応援しちゃいました！」
「あはは、ありがとうなの……茉莉ちゃんもやっぱりレースが好きなの？」
「は、はい！でもその……私、速く走れないから……あの、アイネスフウジンさん！」

「ん、どうしたの？」
「その……どうしたら、貴女みたいにかっこよく……なれますか？」
「かっこよく？」
「は、はい……レースで先頭を走ってるアイネスフウジンさんは自信に溢れてて、ただまっすぐ前だけを見据えてて……バイトをしている時も自信に満ちていて……どうしたら、そんなに……」
「う～ん……かっこよく、かぁ……」
「私……昔から……全然ダメダメで、それで……バイトも今日みたいに失敗ばっかりで……」
「茉莉ちゃん……」
　うつむく茉莉ちゃんをあたしは静かに見つめる、茉莉ちゃんがそんなに悩んでいるとは思わなかったから。
　いつも一生懸命で、どれだけお店のヒトやお客さんに怒られてもめげずに笑顔を浮かべていたけど、その裏側ではこんなに悩んでいたなんて……。
「……ねえ茉莉ちゃん……あたしにはね、妹がいるの」
「妹……さん、ですか？」
「うん！しかもしかも、双子なの！とってもかわいいのー！」
「双子の妹さん……ふふ、きっとアイネスさんに似ててかわいいんでしょうね」
「うん！」
　実家で暮らす二人の妹、昔はいっつも「ふーちゃふーちゃ」って言いながらあたしの後ろをくっついて歩いてばっかりだった。
　でもあたしのトレセン学園入学をお母さんと一緒に熱心に後押ししてくれて、すこしでもあたしの負担を軽くしようと家事を手伝ってくれる二人のかわいい妹。
「あたしはね、走ることがすっごく好き！先頭を走ってるとドキドキして、ゾワゾワして……でもね、最初はレースの世界に来るつもりはなかったの」
「え？」
「あたしの家はお母さんが体が弱くて……妹達も小さかったから、

レースは中学校までで高校も手に職を持てるように商業系の学校に進学するつもりだったの……でもね、家族はそんなあたしを誰よりも見てくれていたの。あたしの「大好き」を応援してくれたの。誰よりも応援したいっていうあたしの背中を家族が押してくれたの」
「アイネスさん……」
「だからね……茉莉ちゃんのいうかっこよさが何かはあたしにはわからないけど……あたしは、そんな家族のために走る。走ることは大好きだけど、今はそれ以上に家族や応援してくれる皆のために走るって決めたの、妹達がかっこいいっていってくれる背中をもっといっぱい見せてあげたいの」
「……すごいですね、アイネスさんは……私なんかと大違いです」
「そんなことないの！茉莉ちゃんだって一杯頑張ってるし、誰よりも一生懸命なの！それは一緒にバイトをしているあたしが一番知ってるの！」
「アイネス……さん」
「それにね、きっといると思うの！そんな茉莉ちゃんの背中を精一杯追いかけて応援してくれる誰かが……茉莉ちゃんが気がついてないだけなの、現にここに一人いるの！」
　そういって胸を張って見せれば、呆然と私を見ていた茉莉ちゃんがクスッと笑ってくれたの。
「ふふ……もう……そっか、だから……そんなにかっこいいんだなぁ」
「なの？」
「……私も、なれるかな……そんなかっこいいお姉ちゃんに」
「なれるの！だって……一生懸命頑張る茉莉ちゃんの背中はもう十分かっこいいの！それは私が保証してあげるの！」
「……アイネスさん、ありがとうございます。私……頑張ってみます」
　そう言って顔を上げた茉莉ちゃんの晴れ晴れとした笑顔はとっても優しくて、かわいくて……。
「あ……うん！」
　ちょっと見惚れちゃった……なんて、恥ずかしくて内緒なの！
　ただ、まさかそんな話をした数日後に茉莉ちゃんがバイトを辞め

ちゃうなんて思ってもみなくて、聞かされた時は動揺しまくりテンパりまくりで茉莉ちゃんにもお店のヒトにも迷惑かけちゃったのはいい思い出なの。
「……ふふ、茉莉ちゃんの背中が前よりもっとかっこよく見えるの、きっとあれからもいっぱい頑張ってる証拠なの……よーっし！あたしもまだまだ頑張るのー！」
　なんて気合いをいれているとポケットにいれてたウマホがブルブル震えてるのに気がついた、出してみると画面に出ていたのは今日のお買い物をドタキャンしてくれたあの親友の名前。
「よっと、はろはろー！どうしたのライアンちゃん？」
『あ、アイネス！今日はごめんね……急に予定が入っちゃって……』
「んーん、大丈夫なの！そっちは用事は済んだの？」
『あ、うん。それでたしか3駅隣のスーパーも行くんでしょ？そっちで合流できればとおもってさ』
「わぁ！それは大助かりなの！ライアンちゃんがいればいつもよりもいっぱい買えるのー！あ、でもそれなら今いるスーパーに来てくれた方がいいかもなの、ちょっと荷物が多いから」
『あはは、荷物持ちなら任せてよ！それにしてもそんなに一人で買ったの？』
「ううん、今日はお友達と偶然会って一緒に買い物したの、壮絶な戦いだったの……」
『壮絶って……ま、まぁそういうことなら……ところで友達って？』
「それはね……あ～……うん、内緒なの！」
『えー？教えてくれてもいいじゃないか？』
「内緒ったら内緒なの！ふふふ……」

side：アイネスフウジン　end…

～＊～＊～＊～

配信準備中、もうちょっと待ってね

《ｌｅｆｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》さ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》え《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》お《／ｆｏｎｔ》・ライブ《／ｌｅｆｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》た《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》し《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》ろ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》わ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》だ《／ｆｏｎｔ》

チャット〉

『特売日完全勝利！雑談』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる
チャンネル登録
チャンネル登録者数　９．１４万人

「それでね、お店を出た後は友達と二人でベンチでグロッキーになっちゃってね」
コメント：ええ……
コメント：府中こわ……
コメント：ウマ娘と互角に戦える主婦さんやべぇ
コメント：スーパー府中人ですか？
コメント：府中は魔境、はっきりわかんだね
コメント：客もやべぇが店員もやべぇ……
コメント：なんか巨人と戦ってそう
「いやぁ、歴戦の皆さんは本当に手強いですよ……お友達と一緒じゃなかったら生きて帰れたかどうか……」
コメント：スーパーでの買い物でそんな悲壮な覚悟されても……
コメント：マイヤーちゃん生きてっ……！
コメント：買い物一つで生死を覚悟する街、府中
コメント：ゴッサムシティか何かか？
コメント：開けろ！デトロイト市警だっ!!!
コメント：クソデカコナー君は帰ってもろて
「いやぁ～でもお陰でお得な商品がいっぱい買えましたし、そのあとも商店街のお店でいっぱいサービスしてもらいましたから、家の冷蔵庫も戸棚もパンパンです！」
コメント：食料の貯蓄は十分か？
コメント：きっと1週間かそこらで大体マイヤーちゃんのお腹に消えるに俺の魂をかけるぜ
コメント：そんな冷蔵庫で大丈夫か？
コメント：大丈夫だ、問題ない
コメント：（冷蔵庫が空になる）覚悟はいいか？オレはできてる

「もう！そんなに食べないですよぉ！まったく～……そんな意地悪なヒトばっかりなら最後にしようとしていた告知はメン限だけでしますよぉ～？」
コメント：そんなぁ!?
コメント：正直すまんかった
コメント：すいゃせんすいゃせん！
コメント：悪いのはこいつなんです、僕は悪くないんです！
コメント：わーマイヤーちゃんとってもかわいいなぁ！だから告知して？（ハート）
コメント：っよ！マイヤーちゃんは日本一！
コメント：手のひらクルックルで芝
コメント：煽て方が雑で芝
「ふふ～ん、告知を聞きたいならメンバー登録してくださいねー？登録方法は概要欄のメンバー登録の案内からどうぞ～」
コメント：ちゃっかり宣伝しててえらい！
コメント：既に入ってるんだよなぁ
コメント：ちゃっかりしてて芝
コメント：どや顔マイヤーちゃんかわよ
コメント：かわいいですね！メンバー登録してきます！
「あはは、まぁお遊びはここまでで～……それじゃ、最後に告知を。メンバー限定だけで行っていたＡＳＭＲの配信を近々普通の配信でも行う予定です、具体的には二本立てで前半は一般、後半はメンバー限定となります。あとそのＡＳＭＲは後日メンバー限定でボイスとして販売も予定してますので、これを機会にメンバー登録していただけるとありがたいです」
コメント：まじか!?
コメント：これはメンバー登録せざるをえない
コメント：光の速さで登録したわ……光回線だけに
コメント：寒々マウンテン
コメント：おや今日は雪が降る重バ場ですねぇ
コメント：芝も凍りつくわ

コメント：お前ら厳しくない？
「はいはい、そろそろ今日の雑談配信は終わりますよ～？明日は先日もらったスパチャ読みと届いているマシュマロ読みの配信なのでそちらも是非。高評価とチャンネル登録、ウマッターのフォローもよろしくお願いします！それじゃお相手はセカンドライフ３期生のバーチャルウマ娘、シルトマイヤーでした！皆おつまいやー！」
コメント：おつまいやー！
コメント：っよ！
コメント：おつまいやー!!
コメント：っよ！乙舞屋!!
コメント：っよ！乙舞屋！
コメント：っよ！
コメント：おつまいやー!!
コメント：おつ！

#13　その背中はきっと誰かが応援してくれているはずだから

#14

私の名前はシンボリルドルフ、府中にある日本ウマ娘トレーニングセンター学園で生徒会長を勤めさせてもらっている。
トゥインクル・シリーズを恥じること無き成績で走り抜き、周りからは皇帝などという、少々仰々しい名前まで頂いているよ。
私自身そうあろうと日々心がけていたとはいえ、よもや他の者達からそう呼ばれるとは思わなかったが……そう呼んでもらえるというならば、私の勇往邁進とした姿が評価されたのだと素直に嬉しく思う。
現在はドリームトロフィーリーグに籍を置き、名だたる先達である先輩ウマ娘の胸を借りる傍らでテイオーのような将来のウマ娘界を引っ張っていく優秀な世代のための先導役を担っている。
とはいえ私とてまだまだ年頃の一人のウマ娘、生徒会の仕事やレースに向けてのトレーニングばかりでは少々味気ないというものだろう？
己の走りで若輩達を導き、シンボリ家……否シンボリルドルフとして夢と掲げ目標とした「百《ｆｏｎｔ：ｕｌ８６》駿《／ｆｏｎｔ》多幸」という理想のために万里一空の面持ちで挑んでいても、たまにはゆっくりと静かに過ごしたい時というのも当然あるものさ。
「へぇ～ここがルドルフのお気に入りかぁ～……良い所だね！　落ち着いていてゆったり過ごせそう……マスターさんもセンスがいいねぇ～」
「それはそれは、ミスターシービーさんにお気に召していただけるとは光栄です」
そう、一人で静かにゆっくりと……。
「あ、このケーキ美味しそうだねぇ……ねえルドルフ？頼んでも良い？」
「あぁ……ところでだ」
「あ、こっちのパフェも美味しそうだなぁ～……そうだ、はんぶんこし

ようよ！」
「それで構わないのだが……ちょっといいかい？」
「んぅ……これに合うのはやっぱり紅茶かな？　マスターさんはどう思う？」
「そうですねぇ、では私がブレンドした茶葉はいかがでしょう？　酸味を押さえて花の香りを加えたものなのですが」
「わぁ！　それはいいねぇ！　ルドルフもそれでいいよね？」
「あぁそれでいい……のだが、すこし良いだろうか？」
「それじゃマスターさんそれでお願いねぇ……それで、どぉしたのルドルフ？」
「なぁ……シービー」
「ん？」
「……なぜ、君がここにいるのかな？」
　そう、私は久しぶりの休日を（毎度ついてこようとするテイオーを家の力を使ってまで撒いて）一人でゆっくりと楽しもうと、学園からは大分離れた場所にあるこの喫茶店へと来ているはずだったのだ。
　そのはずだったのに、だ……なぜ気がつけば向かいの席に見知った顔が当然のように座っているのか、この皇帝の目をもってしてもまるで見当がつかないのだ。
「ん？　んぅ～……んふ？」
「……はぁ、そうやって笑って誤魔化すのはシービーの悪い癖だな」
「ならそれに流されていっつも誤魔化されちゃうのはルドルフの悪い癖だね！」
「それは違うぞシービー？　いくらこちらが追求しようとも天《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》行空、自由を友とする君相手では雲烟過眼、ヒラリと躱されてしまうことを過去の経験から知っているだけさ」
「あははっ！　何せアタシは自由を何よりも愛するウマ娘、ルドルフもわかってるねぇ～！」
「まったく……君というやつは」

「ふふふ……本日は随分と楽しそうなご様子ですね、ルナお嬢様？」
「お嬢様？」
「つぐ……ごほん！　その、マスター？」
　どうにかやり過ごして静かな一時を取り戻そうとした矢先にこれだ、爺やのあの顔は確実に面白がっているな……？
　昔からそういうオチャメなところがあるヒトだとは思っていたが……未だに一人でここに来ることを根に持っているな、これは。
「おや、これは失礼を。こちらご注文のケーキとパフェ、それから当店オリジナルブレンドの紅茶でございます。どうぞごゆっくり」
「わぁ！　美味しそうだねぇ！」
「あぁ、ここの甘味はトレセン学園のカフェでも早々味わえないくらい格別だからね、味わって食べると良い」
「ん～あむ！　んぅぅ～美味しい!!」
「そうかそうか、それは良かった。こっちのケーキも食べると良い、私のおすすめだ」
「え、本当に！　あ～～む……んんんぅぅー！　こっちも美味しい～！」
「そうかそうか、それは良かった」
「それでお嬢様って？」
「っち、誤魔化されなかったか……」
「ル～ド～ル～フ～ぅ？」
「はぁ……ここのマスターは昔シンボリ家の屋敷で執事として働いていたんだ、今は後進にその座を譲ってここでこうして喫茶店を営んでいるんだ」
「えぇ～？　でもアタシは見たこと無かったけどなぁ？」
「それはそうさ、シービーが遊びに来るようになった頃にはとっくに辞めていたんだから」
「あぁ、だからさっきルナって言ってたんだ！　へぇ～……」
「……なんだいシービー？　その何か言いたそうな顔は……」
「べっつにぃ～？　あ～む……あ～美味しいなぁ～」
「まったく……って、シービー！　そのケーキは私のではないのか!?」

「えーはんぶんこって約束でしょ～？」
「半分以上食べているじゃないか!?　まったく……そうだ、マス……もういいか、爺や。あの娘は元気にしているかい？」
「ええ、元気にこちらでアルバイトをなさっていますし、なにかとお忙しそうにしているようですよ」
「そうか……それは良かった」
「ん～？　あの娘って？」
「それは……その、このお店で働いているウマ娘が居てね……たまにここに来ては近況を聞いているのさ」
「へぇ～……ルドルフって本当に全てのウマ娘を幸せにしたいんだねぇ」
「まぁ、そうだが……そうだな、あの娘はすこし特別なんだ」
「特別？」
「あぁ……そうだな、すこし昔話をしよう。といってもそこまで昔じゃないが……私にとって印象深い一人のウマ娘の話だ」

～＊～＊～＊～

それは、私が前人未到の記録を打ち立て名実ともに皇帝という名を掲げた後の事。
私の背に憧憬を見出だし、茨で出来た道の入り口へと一人の少女がついに到ったその日……私は理事長からの要請で学園入試科目の一つである模擬ライブの会場を訪れていた。
本来その審査をするのは理事長と秘書であるたづなさん、そして学園の運営を担う幹部クラスのみとなっていた。
だが、理事長から「要請！　生徒会長として、この学園を共に治める者として君の意見も聞いておきたい！」という言葉をもらいライブ会場に設置した審査員席、その背後にある衝立ての向こう側で私は待機していた。
受験生の姿はステージ各所にあるカメラの映像をモニターに回してもらい、私も一人の審査員としてトレセン学園の門を潜らんと試験

に挑む未来の後輩たちの歌を聞いていた。
ライブを疎かにするという事は学園を、ひいてはウマ娘のレースを蔑ろにする事だと私は常々口にして来た。
だからこそ一人一人の歌を真剣に聞き、ステージ上の一挙手一投足を注意深く見つめていた。
さすがこの学園の門を叩きに来るだけの事はある、どの娘も自分というものを良く理解してアピールしているのがわかる。
中には突如ラップを挟んだりブレイクダンスを踊るなど破天荒で型破りなウマ娘もおり、まだまだ粗削りの原石達ではあるがこの世代はなかなか面白い世代になるのではないか、と私は思った。
何より今年はあの娘が、私を憧れだと言ってくれたウマ娘が試験に挑んでいるのだ。
「ふふ……他の者もなかなかどうして優駿揃いだ、これはうかうかしていられないぞ……テイオー」
優秀なウマ娘達が入学すればそれだけトゥインクル・シリーズは盛り上がり、ひいてはウマ娘達の理想の世界へとまた一歩近づいていける。
そんな未来を楽しみに思いながら手元に届いている受験者の資料を手に取る。
「ん？　……この娘は……」
次に模擬ライブに挑むグループに入っているウマ娘達の資料、その中の一つに気になるものがあった。
「立華茉莉君……この娘は名前が無い……のか」
他の資料を見渡した限りどのウマ娘もウマソウルの名前が記載されていたのだが、その少女だけは恐らく両親から贈られた名前が書かれていた。
ウマソウルとは未だ科学的にもオカルト的にも立証も証明もなされていないウマ娘の神秘とされるものだ。
一説には別世界の存在の名前だとする有識者が居たり、三女神からのお告げだという宗教じみた考えも存在している。
ただ、総じて言えるのはウマソウルを認識しそれを自覚できた者は

ウマ娘として大成する……それがどういう結果であろうとだ。
実際ウマソウルを自覚し、名前を得た者はそれを得る前に比べて身体的に隔絶した違いが現れることは長いウマ娘の歴史の中で証明されている。
ウマ娘の間ではウマソウルを自覚できるかどうかがレースで活躍できる一つの指針とされているほどだ。
おそらく、この少女はまだウマソウルを認識できていないのかもしれない……毎年わずかではあるが、そういうウマ娘が試験を受けに来る事はある。
ただ、そういったウマ娘はまず試験に受かることはない……実際この立華茉莉君の実技試験を見れば13人立てで11位。
彼女より後ろの順位の二人は一人が斜行により降着、もう一人はレース中盤の落鉄で大外に逸れたあと脚部不安を理由に棄権していると資料に書かれているので、それがなければ彼女が最下位だった可能性は十分にある。
筆記試験はまた別だが、実技試験を見る限りではこの少女も合格できる可能性は極めて低い……と、言わざるを得ないだろう。
過去には試験の判定基準がまだまだ甘かったがために入学できたウマ娘も居たようだが、今はそれらも見直され厳正な基準と審査で試験の合否が決定される。
それでも毎年ウマソウルを自覚していない少女達が受験をしに訪れる、中には本気でトレセン学園の合格を目指している娘もいるだろうが……ほとんどは記念受験というのが実情だ、無論本人がそう言っているわけでは無いのだが……ね。
中央を無礼るな……とまでは言わないが、そんな浮かれた気持ちで通過出来る程この学園の門戸は広くはない。
ここを訪れるウマ娘は皆がレースでの成功、名誉や栄光を目指して一心不乱にその身を走りへ捧げる者達だ、生半可な覚悟で走りきれるほどトゥインクル・シリーズという世界は甘いものではない。
途中で挫折するか故障するかしかないのならば、いっそここで篩にかけて脱落させるのも温情の一つと言えるだろう。

「願わくば……この少女も覚悟をもってこの場に挑んでくれていればいいのだがな」
やがて模擬ライブ試験を受けるグループが入れ替わり、件の少女が割り振られたグループが壇上へと進んだ。
ところがだ……時が経ってステージ上で行われるパフォーマンスを注視する中で、私は心のどこかが静かにざわつき始めていることに気がついた。
それはまるで強敵とのレースが始まる直前、ゲート内で息を潜め精神を研ぎ澄ませている時のような……。
（なんだ……この胸のざわつきは？　私は……何を感じ取っているというのだ？）
それは一人、また一人と模擬ライブが終わるごとに……いや、彼女の番が迫るごとに強くなっていく。
そしてついに彼女、立華茉莉君の順番が回ってきた。
「受験番号４０５３３１、立華茉莉です！　よろしくお願いします！」
そう名乗って頭を下げた彼女はマイクを胸元に抱き、深呼吸してから顔をあげた……その瞬間、私はあり得るはずの無い感覚を覚えたのだった。
「つな!?　……こ、これは……」
体の芯から、魂すらも揺さぶられたかのような衝撃。
五感全てを支配されたかのような感覚。
良く見知ったそれに、私の体は無意識に反応して強張り、尻尾の毛がうっすら逆立つのを押さえることが出来なかった。
「まさか……バカな、ここは……ここはライブ会場なんだぞ？」
数多のレースを経験し、若輩の身ながらも先達たる名ウマ娘の胸を借りてきた自分の感覚に間違いなど無いと断言できる、だが同時に今だかつて経験したことの無い条件が私の思考を鈍らせていく。
「なぜだ……これは、領域だとでも言うのか!?」
領域――それは時代を作るウマ娘に発現する限界の先へと進むための力。
ライバルとの限界を超えた死闘の末に得る事もあれば、孤高に高み

を目指したその先に見つけられるものとも言われている。
そこで見られる先の景色はその者の原点であり深層心理の底に沈む幻想のようなもの。
未だに謎の多いウマ娘のその深淵ともいえる秘中の秘、得たいからといって簡単に得られるものではなく、だからこそ領域を自在に操ることが出来る力を持ったウマ娘は時代を作ると言われている。
だがそれでも数少ない判明している事実として、領域とはレースでのみ発現する力であるとされてきた……それが今、このライブ会場にて具現化している。
「こんな……こんなことが……」
私は気がつけば何も無い、真っ白な空間へと迷いこんでいた。
どこか遠くから、ともすれば近くから聞こえてくる歌声は確かに彼女のものだ、だがそれがどこから聞こえてくるのか……。
そしてその声を聞けば聞くほど、走り出さなければならないという激しい衝動が胸の底、魂から間欠泉の如く湧き出してくる。
「……っく、だが！」
私とて数々の名ウマ娘と渡り合ってきた身、領域の一つどうして破れぬものか！
領域を破るための力、それもまた領域。
領域を持った二人のウマ娘のぶつかり合いとは、まさに己が魂に内包する幻想と幻想、原点と原点のぶつかり合い。
より強く確固とした原点を持つ方が勝つ、それこそが領域を持つ名ウマ娘達のぶつかり合いなのだ。
「轟けっ！　天下無双の嘶きっ！　我の前に道は無しっ……ならばこそ、勇往邁進！　道は自ら切り開くっ！」

汝、皇帝の神威を見よ

「っくぅ!?」
空間全てが激しく発光し目が眩む中で二つの領域が激しくぶつかり合い、せめぎ合うのを感じる。
やがて静かになったのを感じて目を開けると……そこには先ほどとは一転して真っ暗な夜空とどこまでも続く草原が広がっていた。
風は穏やかに凪、しかし生物の気配はなにも感じないどこまでも続く地平線。
やがて目がその暗さに慣れてきた時、正面に誰かが立っているのがわかった。
「ここは……それに、君は……?」
「……」
「ここが……君の原点、君がその魂に抱く幻想なのか……?」
「……の……け」
「ん?」
そこでようやくその人物、まだ幼女と呼べるほどのウマ娘が私を認識せず、ただなにかを呟いているのがわかった。
「わ……た……けっ」
「いったい、何を……」
もっと良く聞こうとそのウマ娘に近づこうとしたとき、不意にそのウマ娘が顔を上げて私を見た。
その相貌の中で水色の瞳はまるで青く揺らめく炎のように煌々と輝いていた。
「私の魂(うた)を聴けぇっ!!!」

私の魂(うた)を聴けぇっ!!!

「っ!!!」

その瞬間、全ての感覚が吹き飛び私はわたしではなくなってしまった……そう感じたのを覚えている。

気がつけば彼女、立華茉莉君の模擬ライブは終わっていて、わたしは制服の下にびっしょりと汗をかいて椅子に座っていた。

動悸は収まることを知らず、体はG1レースでさえ感じたことの無い疲労感で鉛のように重く動かすことも出来なかった。

結局私は帰りが遅く心配になって様子を見にきたエアグルーヴに声をかけられるまでその場を動くことが出来なかった。

「理事長! 彼女はこの学園に必要な存在です!」

翌日、その熱が冷めなかった私は登校するなり理事長室へ直談判に向かった。

「ううむ……」

「シンボリルドルフさん……」

「もちろん、彼女の成績はわかっています……トレセン学園で上を目指すには到底実力が足りていないことも……だが、それは現時点での話です! これから鍛えれば……なんなら私がトレーナーを説得してリギルでっ!」

「鎮静っ! 落ち着くのだシンボリルドルフっ!」

「っ!?」

そこでようやく私は理事長の机に手を掛け前のめりになっていた

ことに気がつき姿勢を正した。
「ルドルフ会長……君の言い分はわかる……わかっている」
そう言った理事長の手元のセンスがミシリと音を立て、見れば握る手は白くなるほど強く握りしめられていた。
「私とて……彼女のその才能は非常に稀有であり、これからのウマ娘の世界にとって重要な鍵になると思っている」
「ならばっ！」
「だがっ！　同時にそれは薬にもなれば毒ともなり得る物だ……ここはウマ娘のレースの頂点を目指し、競い合うための学舎だ。ここで挫かれた者にとっては確かに新たな可能性となるかもしれぬ」
そこで言葉を区切る理事長はやるせない表情を浮かべ私を見つめてきた。
「しかし……それは緩やかな衰退へと誘う滅びの歌ともなりえるだろう……それほどに彼女の未知（可能性）は眩しく、そして危うい……それにな、ルドルフ会長……いや、シンボリルドルフよ」
「なんですか？」
「それは……君が彼女を必要だと欲するそれは……彼女のため（未来）か？
それとも……自分の夢のため（道具）か？」
「っ……」
理事長の、秋川やよいという一人の少女の目を私は見つめ返すこと出来なかった。
数々のウマ娘達を一人の教育者としてこの地で向かえ、勇壮なる旅立ちを見送ったこともあれば挫折と共に去る背中を無力感と共に見送ったであろう瞳にはどんな言葉も羊頭狗肉、張り子の虎であったからだ。
「すみませんでした、少し……熱くなりすぎたようです」
「いや……私達こそすまない、ルドルフ会長……これほどの逸材を逃し、導くことも出来ぬなど……指導者としては失格だ、私を育てこの地位を継ぐことを許してくれた先代にも面目が立たぬ……だが、学園を統べる者としてここでの成功を約束できぬ者を安易な判断でいれるわけにもいかぬのだ」

「理事長……」
「……いえ、私こそ浅慮な考えでした。申し訳ありません……」
「だがな、ルドルフ会長……これほどの逸材を世に出さず腐らせることこそ教育者として恥ずべき行為だ。私が……私が必ず何とかする。だから……信じて待っていて欲しい」
「はい、ご配慮……ありがとうございます」
　私はその言葉にわずかな安堵と圧倒的な無力感をもって答えるのが精一杯だった。

～＊～＊～＊～

　長々と語ったのは私がまだ己の理想という光によって出来る影に気がつく前の、未熟だった頃の話だ。
　語り終えたときには既に窓からはうっすらと西日が入り込んでいた、どうやら少し語りすぎてしまったようだ。
　私は長く語ったことで乾いた口を潤すためにすっかり冷めてしまった紅茶を口にした。
「あの時ほど、自分が語っていた理想がまだまだ大言壮語、口先だけのうすっぺらい幻想に過ぎないものなのだと感じたことはないよ」
「ふぅ～ん……そんなことがあったんだ」
　目の前に座るシービーも珍しく神妙な面持ちで私の話を聞いていた、そんな私たちのもとに爺やが新しい紅茶を淹れて持ってきてくれた。
「あぁ……だが、あのとき感じた無力感があったからこそ、今の私がいる……彼女のようなウマ娘でも希望をもって歩める世界、それを実現してみせる……そう決意する切っ掛けになったのだからね」
「そうですねぇ、それからのお嬢様はより真摯に夢を見詰めなおし、また貪欲に様々な知識を吸収し一回りも二回りも大きくなられました」
「へぇ～……じゃぁ、それもまたルドルフの原点なんだね」
「原点……そうだね、まさにそうだ……まぁ、まさかそんな彼女がこんな身近な場所で働いているなんて思いもしなかったがね」

「ふふふ、最初にそれをお伝えした時はルナお嬢様も大層驚き動揺なさっておりましたねぇ」
「へぇ～！　ルドルフが動揺する姿なんて見たこと無いかも……どんな感じだったの？」
「こらシービー、余計な詮索はしてくれるな……爺やも口が軽くなりすぎる」
「ちぇ～」
「はっはっは、これは失礼いたしました。ではお詫びに特製のカフェオレをお淹れいたしましょう。もちろん角砂糖とリンゴのはちみつもたっぷりと」
「わっ！　それ美味しそう～！　マスターさんアタシの分もちょうだい！」
「かしこまりました」
「やれやれ……まったく、今日は本当に静かに過ごさせてはもらえないようだ……」
　そう口にしながらも、私の口角は自然と上がっているのは自覚していた。
「それにしても、それだけすごい娘ならアタシも会ってみたいな……ルドルフ紹介してよ！」
「それなんだが……すまない、私もここで働いている姿をまだ見たことがないんだ」
「ん？　どぉいうこと？」
「なに、どこかの過保護なマスターが中々私と彼女を巡り合わせてはくれないのだよ」
「ははは、大事な従業員を守るのも私の役目でありますからね」
「まったく……」

～＊～＊～＊～

「そうなんですよ～……お店にいく途中で連絡が入って今日は急にお店を閉めるっていわれまして」

コメント：ほーん
コメント：いったいなにがあったんやろ？
コメント：急にお客さんが押し寄せて食材が無くなったとか？
コメント：人気ラーメン店みたいだな
コメント：渋いマスターとマイヤーちゃんみたいな看板娘がいる店ならなっとく
コメント：でも喫茶店なんですがそれは……
「まぁそれならそれで、お店が繁盛しているのはいいことですよね！私もこうして皆さんと雑談できますし」
コメント：むしろ休みならちゃんと休みなさい
コメント：配信は嬉しいけどちゃんと休んでけー？
コメント：ここ最近配信が多いようですが……？
コメント：まぁ雑談が大半だし……
コメント：でも裏で作業しながらが多いような……？
コメント：仕事溜め込みマイヤーちゃん
「あはは……ほら、普段あれこれやろうと考えてるのにいざ暇になると途端にやる気がなくなるっていう……あれですよ」
コメント：あぁ……
コメント：あるある
コメント：掃除とか特にな
コメント：掃除は朝家を出る前にするようにしてる
コメント：俺も録り溜めたアニメが……
コメント：俺も積みプラが……
コメント：でもなにも配信しながらせんでもいいんじゃ？
「いやぁ～……なんか、一人で静かにやろうとすると他の事が気になっちゃって……雑談しながらの方が集中できるっていうか？」
コメント：あぁ、わかる
コメント：勉強とかラジオ聴きながらの方が集中できる
コメント：俺もこの雑談配信聴きながら仕事してるぜ！
コメント：会社で配信聴いてるのかよ
コメント：ここに不良社員がおるぞ

コメント：そういうお前らはどうなんだよ
コメント：マッ
コメント：ピュッ
コメント：ア……ア……
コメント：やめろその言葉は大多数に効く
コメント：なんかすまん
コメント：そも聴くのと話すとじゃ大違いじゃろうに
「いやぁ、そうなんですよね～？集中しないと～って思っても雑談しちゃうっていうか」
コメント：本末転倒なんじゃ……
コメント：ちゃんと集中してけー？
コメント：お仕事しようよマイヤーちゃん……
セカライ公式《ｆｏｎｔ：ｕ５８》す《／ｆｏｎｔ》：ちゃんとやらないとまた事務所で缶詰しますよ？
コメント：あ
コメント：あぁ
コメント：マイヤーちゃん……
《ｆｏｎｔ：ｕ２０》「あ、あ……」《／ｆｏｎｔ》
コメント：マイヤーちゃんがタヒんだ！
コメント：この人でなし！
コメント：もうやめて！マイヤーちゃんのライフはもう０よ！
コメント：マネージャー「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ!!」
コメント：マイヤーちゃんタヒす！デュエルスタンバイ！

＃１４　その魂は歌う
尽きること無き想いの丈を

#15　前編

配信準備中、もうちょっと待ってね

《ｌｅｆｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》さ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》え《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》お《／ｆｏｎｔ》・ライブ《／ｌｅｆｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》た《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》し《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》ろ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》わ《／ｆｏｎｔ》《ｆｏｎｔ：ｕ５８》だ《／ｆｏｎｔ》

チャット〉

『ＷＤＴ決勝をみんなで応援しよう！』

シルトマイヤー【セカンドライフ３期生】　メンバーになる
チャンネル登録
チャンネル登録者数　９．１４万人

『長きに渡る予選を勝ち抜いた１４人の優駿が集う夢の舞台、栄光の頂へその手をかけるのはいったい誰なのか！今年もついにこのときがやって参りました、ウィンタードリームトロフィーリーグ決勝レース！今年一年の総決算か、はたまた来年に向けた飛躍の第一歩となるのか。実況は赤坂、解説に細江純子さんをお迎えしてお送りいたします、よろしくお願いします』
『はい、よろしくお願いします』
「いやぁ……ついに始まりましたねぇ～……ということでこんまいやー！セカンドライフ三期生のシルトマイヤーです！本日は今から行われるＷＤＴを皆さんと同時視聴しちゃう配信となっております！」
コメント：まってました！
コメント：この日のために有給取りました！
コメント：現地勢のわい、人が多すぎて吐きそう
コメント：同じく現地勢、人混みにもまれてやばい
コメント：コメント打ってる時点で余裕な件について
コメント：やっぱ家でのんびりみるのが良いな
コメント：でも現地の熱狂も捨てがたい……
コメント：あの熱狂は一度味わうとやめられないからな
「そうですよねぇ、現地でも見たいんですけどそうするとこうやって配信できませんし……まぁ、こっちはこっちで頑張って盛り上がって

いきましょう！あ、さっそく今回出場するウマ娘さん達が出てきましたよ！」
『まずは1枠1番サイレンススズカ、アメリカに渡り多くの重賞を走り抜いた彼女がついに日本のレースに帰って参りました！世界を知った彼女の進化した走りを他のウマ娘はどう攻略するのか！』
『長期の海外遠征を終えてからさらに走りの力強さに磨きがかかりましたね、枠順も彼女の走りにはマッチしていますから期待できそうです』
「スズカさんが1枠1番とか無理ゲーでは……？」
コメント：大逃げでズドン！
コメント：ガハハ勝ったな風呂入ってくる
コメント：勝ったな！第三部完！
「海外に行ってレース以外にも筋力を中心に肉体改造も行ったそうです、得意な逃げは風をもろに受ける分スピードやスタミナ以外にも抵抗に負けないだけの筋力と体幹が重要ですからね」
コメント：ほーん
コメント：確かに足の筋肉の付き方えぐい……
コメント：立ち姿だけでわかる、まるで金属の支柱をいれてるようにブレがない
コメント：これは妖怪トモ触りも即死するレベル
コメント：現地勢ワイ、さっき無事に蹴り飛ばされて３ｍほどすっ飛んでいく妖怪を目撃した
コメント：あいかわらずやな
コメント：なお現在ピンピンした様子で隣で観戦しているもよう
コメント：それで生きてるってどう言うことなの……？
『1枠2番ダイワスカーレット、冷静なレース運びとここぞと言うときの勝負強さが魅力のウマ娘です。今日はライバルであり惜しくも予選で敗退したウオッカ選手の分まで勝利を掴み取ることができるのか！』
『彼女はバイタリティ溢れる闘志と豊富な知識に裏打ちされた多彩なレースが魅力です、今日はどこで勝負をしかけるのか注目ですね』

「ダスウオてえてぇ……」
コメント：さっそく限界化してて芝
コメント：実際ウマッターの絡みはとおとみに溢れておりました…
コメント：は？ウオダスやろが
コメント：おいウオダス勢だ！
コメント：囲め囲め！
コメント：お茶をお出ししろ！
コメント：高級茶菓子も忘れるな！
「ダイワスカーレットさんは去年の予選でウオッカさんに負けましたからね、リベンジ達成と同時に今度はライバルの無念を背負っての走りは見所です。特に今日はスズカさんがいますから同じ逃げでついていくのか好位追走でひかえるのか……楽しみですね！」
『2枠3番シンボリルドルフ、もはやこのドリームトロフィーの顔とも言える彼女ですが、今もなお進化を続ける皇帝の走りにはぜひ注目したいです』
『昨年は惜しくも3位でしたからね、今年こそ優勝トロフィー奪還を成し遂げてほしいものです』
「シンボリルドルフさんは昨年から取り組んでいる末脚の特訓がやっと出てきた感じですね、あの力強さはなんでも友人であるミスターシービーさんが特訓に付き合ったとか」
コメント：ルドCBもてぇてぇ
コメント：どっちかというとCBに振り回されっぱなしだけどな
コメント：それがいいんだよ……
コメント：最近よく一緒にお出掛けしてるお姿を拝見しております
コメント：一緒にCMにもでてたしな
コメント：コスメのCMにはちょっとドキッとさせられた
『2枠4番はタマモクロス、ドリームトロフィーでも指折りの末脚が今日も爆発するのか!?こちらに入っている情報ではなんでも今日は大阪からご家族が応援に来ているそうです』
『仕上がりも万全のようですし、ファンやご家族の前で勝利を飾れるといいですね』

「タマモクロスさんはなんでも必要な分を残して半分はご家族に、残りの半分は自分のようなお金に苦しむ学生のために基金へ寄付しているそうですよ、偉いですよねぇ」
コメント：さすたま
コメント：タマちゃんほんと良い娘やなぁ
コメント：さっき中継にちらっとタマちゃんの応援段幕見えたけどあれ家族かな？
コメント：俺もその基金に少ないけど募金してるぜ
コメント：一般からもやれるのか
コメント：１００円単位でできるから気になるなら調べてみると良いよ！
『３枠５番マチカネタンホイザ、今年もむんむんと気合いは十分！得意とする最後方からの追い上げで今年こそ栄光を手にすることが出きるのか！』
『今年は速いペースでのレース展開が予想されていますから、彼女がどこから仕掛けてくるのかもひとつのターニングポイントになるかもしれませんね』
「マチカネタンホイザさんって、いろいろな帽子を公私ともに持ってるみたいですけど……あの耳を出す穴って自分で空けてるんでしょうかね？」
コメント：えいえいむん！
コメント：むんむん！
コメント：帽子いっぱいあるよね
コメント：この前コレクションの写真ウマッターにあげてたな
コメント：あれで実家に送らなかった一部だってんだからおどれぇた
コメント：穴はどうなんだろう？
コメント：ウマ娘用なら最初から空いてるのでは？
コメント：でも縁とかボロボロなやつもあったような……？
コメント：まさかのＤＩＹ
『３枠６番はオグリキャップ、予選では仕上がりに難がありましたが

それでもトップクラスの成績で通過する実力は確かなものです』
『今日は盟友であるタマモクロスさんとのレースということもあって、実況席から見てもわかるほどの気迫に満ちていますね』
「オグリキャップさんは予選ではすこし調子が悪そうでしたけど、それでも他者を寄せ付けない走りは見事でしたね！」
コメント：調子悪いってもなぁ……
コメント：太りぎみはなぁ……
コメント：ぽっこりおなかではなぁ……
コメント：それでもトップで走り抜けるから意味がわからない
コメント：実況の脳も観客の脳も破壊していくウマ娘
コメント：「なんだなんだなんなんだぁ!?そのおなかには何がつまっていると言うんだぁ!?」「ご飯でしょうね、きっと」
コメント：今年で一番の名実況（迷実況）だったな！
『4枠7番にはアグネスタキオンが入りました、トゥインクルシリーズ引退後は研究の道へと進んでいた彼女がついに今年からドリームトロフィーへの参加を決意！不安視されていた前評判を吹き飛ばす好走で初年度ながらこの決勝まで勝ち抜いてきました！』
『自分自身の走りを研究した上での参戦ですからね、これだけのメンバー相手にどれだけの走りが出来るのか楽しみです』
「アグネスタキオンさんは研究の道一本でいくのかと少々残念に思っていただけに去年末の参加表明は話題になりましたね～。前評判も何のそので現役時代よりもノビのある末脚で安定した感じがしますね」
コメント：タキオンは足の不安があったからなぁ
コメント：それを克服するために研究してたんだっけ？
コメント：それが実を結んだ末の参加か……胸が熱くなるな
コメント：最初こそハラハラしてたけど、気がつけばワクワクしっぱなしでした！
『4枠8番メジロパーマー、メジロの爆逃げウマ娘はこのメンバー相手にどこまで逃げられるのか！今年は同じ逃げウマ娘にあのサイレンススズカもいますから熾烈な1番手争いになりそうです！』

『ドリームトロフィー屈指のスタミナと逃げ足を相手にサイレンススズカがどう勝負していくのかも見どころですね』
「メジロパーマーさんといえば同じ爆逃げの相棒であり大親友だったダイタクヘリオスさんの結婚式での大号泣あいさつが話題になりましたが、今年はダイタクヘリオスさんから託されたレースですからね、気合いも違いますよ」
コメント：旦那そっちのけで大号泣で抱き合ってたのはよかった
コメント：涙でお化粧ぐっちゃぐちゃになりながらポーズとってる写真がお気に入り
コメント：ほんと終始泣いてたからなぁパーマーちゃん
コメント：そのぶん二次会では笑顔いっぱいで弾けてるウマッター連投はすごかった
コメント：なんならその後のホテルまで一緒に行きかねない勢いだったからなぁ
『5枠9番アイネスフウジンが登場です、今年は去年の不振を振り払う見事な走りで先頭争いを演じてくれましたが、このメンバー相手にどこまで食らいついていけるのか見物です！』
『昨年は調整ミスからの悔しい予選落ちでしたが、今年は彼女らしいフィジカルをいかした走りが戻ってきましたね』
「アイネスフウジンさんといえば！皆さん見ました!?ウマスタの妹さん達との写真！かぁいかったなぁ～」
コメント：皆のお姉ちゃんキターーー！
コメント：確かにウマッターとウマスタで妹ちゃん達の事よく出してるよね
コメント：妹ちゃん達もトレセン学園に入学するのが目標だとか
コメント：それまで現役で居続けるんだっけ？
コメント：それまでどころか妹とドリームトロフィーで走れそう
コメント：確かに
コメント：それくらいトゥインクルの頃から変わらんものなぁ
『5枠10番はトウカイテイオー、観客を魅了するその走りから既にその存在感は確かなもの！ライバルであるメジロマックイーンや目

標と公言するシンボリルドルフとの勝負が見所です！』
『ドリームトロフィーへの移籍を経て走りに厚みが増した印象がありますね、今日の走りも楽しみです』
「きゃぁぁ―!!!トウカイテイオーさぁぁぁーん!!!」
コメント：
コメント：
コメント：耳ないなった
コメント：あれ、替えの鼓膜どこやったかな？
コメント：おい誰だよミュートにしたの？
コメント：いきなり大声はやめてもろて
「あはは、ごめんなさ～い……いやぁ、今年のトウカイテイオーさんも見所ばかりの走りでしたからね！これはもうこのレースも決まりでしょう！」
コメント：お？
コメント：あ？
コメント：まったく、これだから……
コメント：ニワカは相手にならんよ
コメント：おいおい……
コメント：よろしい、ならば戦争だ
『6枠11番セイウンスカイ、幻惑の逃げウマ娘にして策士としても名高い彼女の走りがこのレースをどう引っ掻き回すかが勝負の分かれ目になりそうです！』
『彼女は中々結果がでない時期が続きましたが、今年はついにトンネルを抜けた感じですね』
「セイウンスカイさんはどんな走りをするのか毎回わからないところが魅力のエンターテイナーですね、果たして今日は逃げるのか、はたまた先行策か、真ん中あたりで控えるのか……楽しみにしましょう！」
『6枠12番はウィニングチケット、今年は怪我を理由に引退したナリタタイシン、同じくトレーナーへの転向を表明して現役引退を決めたビワハヤヒデの分まで走りきるとレース前のインタビューで語っ

ておりました』
『お二人の気持ちを背負っての走りは今年の予選からの全力勝負で見てとれますね、このレースへの気迫も十分です』
「ＢＮＷの３人の勝負はどこでも名勝負ばかりでしたからね……それぞれの道を歩んだとしても心は常に一緒って感じがしていいですねぇ」
コメント：この３人が一番好き
コメント：タイシンはなぁ……本当に惜しい娘が引退してしまった
コメント：今もリハビリ中なんだっけ？
コメント：そのはず、引退後は実家のお店を手伝うらしい
コメント：花屋の店頭にタイシンいるとかやべぇな
コメント：ファンだからって押し掛けたりするなよな！
コメント：我らファン一同３００歩下がって電柱の影からこっそり見守る所存
コメント：それはそれで不審者で芝
コメント：一方でハヤヒデのトレーナー転向は予想できてたな
コメント：インタビューでも自分の担当よりも理論しっかりしてたしな
コメント：それでも担当の意見を尊重してレース展開を決めるあたり信頼関係ＭＡＸよな
コメント：たしか試験にはもう受かってて、来年から元担当の所でサブトレになるんだっけ？
『７枠１３番メジロマックイーン、名門メジロ家を背負う彼女は今年もこの舞台に上がって参りました！レース以外でも様々な分野で活躍する彼女の走りには今後とも注目したいです』
『彼女は積極的にいろいろな分野へ挑戦していますからね、ウマ娘レース界に新しい風が吹き込んでいるのを感じますね』
「きゃぁぁぁぁ!!マックイーンしゃぁぁぁぁんっ!!!」
コメント：
コメント：
コメント：もう予備の鼓膜もないなったわ

コメント：予測可能回避不可能
コメント：おいおい窓ガラスがビリビリ振動したんだが？
コメント：音波兵器かよ
コメント：ウーハービリビリやばい、ケツが痺れたぞ
「いやぁ～申し訳ない！マックイーンさんはあれから度々配信外で絡むこともありましたからね！このレースでは是非ともトップをとってほしいですね！」
『最後に7枠14番に入りましたスペシャルウィーク、昨年までは自身の生まれ故郷である北海道を中心にレースと調整を繰り返した彼女が満を持してこの中央に帰って参りました！憧れであり目標だと語ったサイレンススズカとの勝負がどうなるのか出走が楽しみです！』
『北海道の大地で磨き上げられた彼女の走りはまた一段と迫力が増しましたね、スパートの際の踏み込みの音が響き渡る様はあのシンザンやミスターCBを彷彿とさせますね』
「スペシャルウィークさんは北海道でレースに興業に牧場に大忙しだったみたいですが、応援する人たちの想いを力に変える彼女には一番のトレーニングだったみたいですね」
コメント：町起こし村起こしに引っ張りだこだったからな
コメント：タルマエちゃんと一緒に出てたのは良かった
コメント：スペちゃん饅頭はウマ娘サイズでお買い得だよ！
コメント：お買い得（食べきれるとは言っていない）
コメント：人の顔より大きいお饅頭はちょっと……
コメント：あんな大きさ正月のお祝いくらいでしか見ないぞ……？
コメント：それを美味しそうに完食するウマ娘の姿よ
コメント：確かオグリが箱買いしていたような……？
「さてさて、これで14人の紹介が終わったわけですが皆さんはどうですかね？私はトウカイテイオーさん一押しですけど？」
コメント：おいおいタマちゃんに決まってんだろ？
コメント：会長は今日も絶好調だしいけるいける
コメント：今年のタキオンの走りに可能性を見た

コメント：アイネスお姉ちゃんは最強なのです！
コメント：ふーちゃんが勝つもん！
コメント：スズカの脚にかなうわけないだるぉう？
コメント：スカーレットのつよつよ頭脳一択よ
コメント：オグリの強さは誰もが知っている事だろうに……
コメント：テイオー最強！
コメント：おいおいマックイーンちゃんを忘れてもらったら困るぜ？
コメント：全てをぶっちぎる爆逃げを頼むぜパーマーちゃん！
コメント：日ノ本一のウマ娘ってところを見せてくれスペちゃん!!
コメント：いやいや皆わかってないなぁ、今年はセイちゃんの年なんだって
コメント：それなら3人分の想いを詰め込んだチケゾーこそ！
「ふむふむ……皆それぞれ推しがいるみたいですねぇ～、これはレースが俄然楽しみになってきましたね！それじゃ出走時間までは雑談しながら今日出る娘達のお話でもしていきましょうか！まずはそうですね～……」

to be next story…